# 湖月抄

かけろふ

55

寄生　宇治五

細 巻ノ名ハ寄とかく是を孟一名與鳥ハ和名の意と
す。しにはやとりとよめりそれをやどり木と
云ひ此巻ハ木のうへの猿わたりいへるにひしかき荒やどり
木ハ奇ニあり。詞にいふやまふかきやどりはこの名とあり
やどり木ハ木のうへにやとりて物し。薬にも桑寄生とてあり桑
の木にすまふ。又楓(カヘデ)の樹(キ)にもさなどさぎはあきらかに生へ
木よりはわたる地なれど名ようしていゝうまにものやどり木に
そなふかるへし　蓋の年齢ハ花の法統誤なれハ不詳く
細 蓋九三より九四五 巣まぐ三ケ年のことあり。高く子に厳
の老よりハ前のまゝ推ヶ中よりまゐり匂総子の蔵のことも
こゝより。まゐりて更にいふ前の事をいひ出せるす

おもひぐまの世にもおもひくのあはれ年ごろのうらに
くさへ源氏の君の年の程也。此世にも藤壺　女二宮
のみをいたんして前の御事を古事の心を藤壺の例に
咲
昇にありしかれども竪横相交りて菊の事に例あ
里に別に注す　此世推参の事にて角総に八宮の周忌の年
事に年ごろ早蕨の事であらのうちにかゝる文次の年に
ことしりて卯月まくつ事とし　孟曰

左注哥つゞき　細　左大臣の三
君に蘿葛殿と号せり
ゆかし中にもうちしけく
寄りもありつる　卯　此女御ハ
梅がえよいまの中宮まい
里給ふさへ源氏君抄さ
へくれの中にのれむをめ
ときにつゝせ給ふことを
此事に入れられ給ふよとふ
つるはけ人の子ほどにわ物に
えて蘿葛殿と云也
後に哥つゞきにまうり給
なりけり
故左大臣殿　細　此左大臣
ふるき京国に八梅が枝
の左大臣とあり語て
新年の世より若菜
の上上の左大臣のもと
当今の今上の左大臣に
中宮ハ　三　おのがことくぞと
ゆゑの女御内中宮
なれどうしなり

三　それとは推参の始めまいりてのみにし
ものゝ藤つぼ女御ハ故左大臣殿の　孟　今上東宮の御時まいり
女御にさぶらひ給ひしかば上にも一きはさ　細　方々よりむかへまいらする
せし時人より先にまいり給ひしかどむ
つましうあはれなるかたの御ことはなくて
ましゝ給ひけれどしるしなきは　まして御めぐみもなかりし
しつみてうらみて御心に中宮には八宮めくら　細　ゆゑの中宮之　此女御に
心ありけるつゐにはかなく　孟　女二宮之御の母女御
ものゝことし給はぬなくて女宮一所を　八の宮もおもくおぼしく
そめきむすめにつけてわがかくしたる　語すて其名をもとりてまて　物哥つぎの也
しうのはせられとてあらぬをしく
さるけうしく世がゆうかうのまこのことや　細　女二宮之
なぐさむいかでもまのことにまちかまむぞ

雨の日ごとにひかりをしかし
こまどり
三 薨左大臣
摂政として世に人の御葬
あかりこし

ろうゑくごゝもうらんとうしづきゝこえ給ひこ（三 女三宮）
とどうつうもんれうらもいとおかしく
おもわれいみじうおもふすゑ細まおもひ（今上）
きこえさせ給ひ。女一の宮と世にきこえ給ふを（三 此女中宮腹之）
さ宮まりてうしづきゝこえさせ給ひぬるこの（先づ帝の女三宮）
世の覚えこそ、とぶべうもあらねうらく
のれあり宮もおさくそう　ぞらく　おく（とうぐうの女御之）（細 入道大臣之）
どのれいさわひゞいめしうまうりいく
く北ろ人ねいでまうろうりゝるさこと
あどあくてきゝ宮人べのやりすうこ
よりうめ宮くわうく御ははうけつくう（細 女御なり）
のへこのそいまめしくゆくゑ（十三）

言はん牡の事　細 権中の
交みありかわり細すもえ
よ宇治へ行まあ附之と
お宇治の大臣よりと
まさかるうく

よりてなりまりナ程よなりなりくしおもこ（細 女二の宮）
きをこそまろり給えんとて寺まいらう
ちつゞめくことくなくおやりいそうく
すまごろともよくすゝぬさ宮まふこおや（左大臣の之）
しまふくいのへまりつくもうらる
えくめぐも。こみありあまてつくさつ（細）（故つかさ之）
し出つくやくごくいとゝるまゝ給まい女御殿
ごろめのうけよまうづしひのそいとゝんろ（おかた之）
くうをすねいふうひらくいおもしこくそう
ちゆもおぼしけうげくごろぐんあすけく（故つかの宮と之）
あくおろうしさ前出くしうれしくるれ紅上（入道）
べくとゝくてよみすくさうじくしうろへくさわくこ

孟女二宮の心 [illegible] 七こ日 [illegible] 女二宮 [illegible]

[illegible] 母女 [illegible] 四十九日 [illegible] 孟母の服衣 [illegible] 今上の女二宮 [illegible] 母女 [illegible] 今 [illegible] 世 [illegible]

[illegible] 浅理の [illegible] 孟 [illegible] 大義 [illegible] 孟 [illegible] 細 [illegible]

[illegible] 母方 [illegible] 細 男 [illegible] 大義 [illegible] 今上の [illegible] 世の [illegible] 女 [illegible] 女八 [illegible] 孟 叡心之 [illegible] 女二宮の [illegible] 衣 [illegible]

りそくゝきうことんもる
しりくおうきうきん
御ゑしゝ六わくんよろふ
なありそのんいあうり
ゝしきのよさ
朱雀院の姫君 細 女三宮
の例をとひあり
孟 女三宮を源へゆうし給ひ
る例なのあまて
ひそやあるにてもあるうる
細 宮あすゞへあるゞられ
しろくとなうくせとあり
ちうじ今ゆまへそうる
と女三宮もあらまひ
てまてゆかしもやんご
となくまし出せらく
師 女三宮と六条院よ
ゆかりうしとさるり

えさせ給はれつくんるしもゆかしうるか（女三宮の御事也）
りのうらいかゞけるかうしはゝ　みかのしさせ給
と。うけくとゆのしきよ給ひやうなりけれ（朱雀上の御事也）
さ御ぞうしつとめなくうんくの。ゆてゝや
しゆしんとるどつへわうざうん。朱雀院
の姫宮を。六条院にゆづりきこえ給しか
思のさこめどとるで。ゆかりしおろよなくし（女三宮のゆかりの）
いかさやあるとてもあかられ。さうぞでもおわし（ことめれせのわしきあて）
みゆしよくてあうじをあわしかど。
源中納言のひとりにてなかりさ御よ（薫）
てゝかくまろ例なうさろしくしてまうるゐ
しそ。そのうしかれにたゞくはかろへなど。やむごと（女三の宮）

しりくいはいいしりと
をいはおんへぞみへくさ
るすくし
さくとぞいはうたうりあり
わろ　孟 薫のもくいはい女三
の御進退いかうの不平
も出来て世おりろあるれ
あかりんとくし　女三の宮の
のふよ不平の御はおやこう
すじもおわんとく

すとゝりゆるん 細 なかく
わりゝも女三宮おかどを
まゐろうまゐてそそがろ御
じをこれるうし薫の性を
御読ぜられとわうろね
師 是いかぞ字治の大
君なとの御に薫女三宮
よゆつりてい出るへかり
とてこゝろくきゝやゝよ

なりさ御みゝくいなむとしへ給ひれさうはゝ
れうらりゆりるゑとくも出でそてゞと
のづくし人よりろめらくれ給ひしまやわる
おしるじ。ゆかりつゞけてとかくも出らん（孟 此まゐの御薫はあるまへと）
どうか世のやゝやさしくめでたしとゆかりしきろよの（御めるとも）
やがてそのつゞくのあくよ此中納言より（細 女三宮の例とて）
御るよあらしくへきんかくこなうゝそり。
まことのれうさつくよ　こしるくべくらんよ。
するづともめざ御ゑくいあらじとゞかりてよ（さきも）
つとゆきよへかゝうとぞ。さてよきこともぞ
しゆかどぞおじらうゝさあめりとつねよいとやう
のことすゝてしもえあらじ。さうくねさ給ふよ（孟 薫の人さ。おれ思えのとこ）

ハりてあそびとこゝにあそびなどするをいへり 細 手談とて琴碁書画の一なり
かゝれば 細 手談とも申也 女房の心をとめて引出すべし

うすやうのめりしさしまいる。おりしくめかし
めしいでゝ御碁などうたせ給。くれゆくまゝに
しぐれおかしき程なるに、花の色も夕ばえ
したるを御らんじて、人めして、たゞいまでん
じやうにはたれ/\かとゝはせ給に、中つかさの
みこ、かんづけのみこ、中納言みなもとのあそん
さぶらふとそうす。中納言のあそんこなたへ
とおほせごとありて、まいり給へり。げにかく
とりわきてめしいづるもかひありて、とをく
よりかほる匂ひよりはじめ、人にことなるさま
し給へり。けふのしぐれつねよりことにの

中つかさのみこ 細 中務の
親王也 今上御弟也 上野
の親王ハ当代の親王に
也 孟 上野のみこ一人
ハ系図にみえず 系図にも
なし 中納言源朝臣ハ薫
なり 此時薫ハ人とや
と申也 人の官姓なと
称する也
花 けふのしぐれ
孟 薫の面目あるさ
まをいふ也

あそびはいとすさまじきさ
細 哀傷にてのことゝく
ハ二ノ宮御服の間、管絃はい
かゞとし
日をおくるたはぶれにて
これなんよかるべき
花 遂暮唯有酒 銷日
不過碁 文集第十六
此詞の心をとりていへり
にて日を送るは碁なん
よかるべきといへり 細 賭物
賭の字勝負なり
女二の宮の御事とおもひ
給へるなり
かろ/\しくはえわたす
まじきを 孟 女二の宮の
ことをかけていふの給ふ
三番に数ひとつ 河
御碁三番のうち主上三
番の御負也
まづけふは 花の一枝
孟 花一枝ゆるすと帝
よりは給ふ御詞也

どかなるを、あそびなどすさまじきかたにて
いとつれ/\なるを、いたづらに日をおく
るたはぶれにても、これなんよかるべきと
て、碁ばんめしいでゝ、御碁のかたきにめし
よす。いつもかやうにけぢかくならしまつは
しつけ給ふにならひにたれば、さにこそはと思
ふに、よきのり物はありぬべけれど、かろ/\
しくはえわたすまじきを、なにをかはなどの
たまはする御けしき、いかゞみゆらん、いとゞ
心づかひしてさぶらひ給。さてうたせ給に、三ば
んにかずひとつまけさせ給ぬ。ねたきわざ
かなとて、まづけふはこの花ひとえだゆるす

花朗詠 聞得園中花
養艶請君許折一枝
春 此詩の心は息女を
花に喩へり 師説也 細
いおよびがたくはしくはえさ
さきもすぐれたるのおもはしけれ
ばこそかやうに花を一枝ゆる
すとあるべし
よのつねの 細 薫の心は色
ごのみにもかうしつし 師説お
の花ならばさやうにくんの
まゝにはおりてとゞめぬ。く
せもなくしてまし女二宮の御
ことにふかく心をよせぬことし
なれば、かの女二宮をもとめ
君にあふと 細 女二宮
母女御なくて、さびしくおはし
まするほど朱雀院日おもはれ
し八園のうちの菊、母女御
を園にたとへ、女二宮をば
菊にたとへて残しを
いふなり
のこりのいろはあせずもあるかなのたまはす
やうにもおぼしく 細 女二宮も
のこりの君の御にて、ゆかりのゆ
かしとおもひてこそ、いたしがたく
花日 孟 夕霧より論ず
とも世にもいまさかりにこそ 師中君
六君のうちにてかれもあるを
てのたまへし
ひじりのものゝ世にかへるを
細 世をひとたびすてたる人の世
にかへるのこゝちを、ひじりの世を
いとふの心をいふ 私云一本ひ
じりのにもあり
こゝちさよ心をつくして人
は 細 人いふもかゝわるまじ
く 孟 様心をつくして
も女二宮をもとめなどするを
そしりかんと也 花 ちゝさ
左大臣 花 も 女子細君但就
右大臣也 是も作者の心地を
少なくすることを記さるゝは花の
道理なるものにて、さかさまくは
夕霧は右大臣なるを
かたのわかちに 花夕霧は
竹川巻にて右大臣に補

とのたまはすれば、いらへきこえさせで、お
りておもしろきえだをおりてまいり
給へり 薫
よのつねのかきねにゝほふ花ならばこゝろ
のまゝにおりてみましを、と奏し給へる 抄 薫
ようい あさからず見ゆ 今上
しもにあへずかれにしそのゝきくなれど
のこりのいろはあせずもあるかなとの給はす。
かやうにおほなくほのめかさせ給ふを
人つてならずうけ給はりながら、例の心ぐせ
なれば、いそがしくもおぼえず。いでやほい
にもあらず。さま〴〵にいとおしき人〴〵
の御事どもをも、よくきゝすぐしつゝ年へぬる
をいまさらに、ひじりのものゝ世にかへり出ん
こゝちすべきことゝ思ふも、かつはあやしや。
ことさらに心をつくす人だにこそ
あなれとは思ひながら、きさいばらにおはせばしもとおぼゆる
心のうちぞ、あまりおほけなかりける。
かゝることを右のおとゞほのきゝ給ひて、六の
君はさりとも、この君にこそは、しぶ〳〵なりとも、
まめやかにうらみよらば、つゐにはえいなびはてじ
とおぼしつるを、おもひのほかの事出きぬべかなり
とねたくおぼされければ、ひやうぶ卿の宮はた、わざとにはあらねど、
おり〳〵につけつゝ、をかしき御せうそこなどは

ど、太臣ハ諱わりかり
但馬塞の又大臣にまま
ぶらくにより志げく
わの太臣とよばれ
さだれるとぞりのよりさま
ハありしと　師さげれなさ
もわくいあれし白の六君
への文ハ名りこのあづくめへ
よありあれとし、光え総
角走ま六君白文へま
いう給くききごあわり
しらもまへのする
るべし
あり給し　花みりり
あじ花ハ水淺^(モテ)不通といふ
幸文さくで果遜みし
てときまることいふ尊を
くしことハ[illegible]ずれ
ぞんとむとまとろんハ
まひみりぬやうす
中らひるりともうのまし
うぬとく[illegible]ぞてく
前あごくことぬまかあ
めくさしとびそびし
ど世わより[illegible]とハ[illegible]のあまつきそめて世しとへあれどくるハりくうごず　貞信公
女ごうろめづけなる世のまりそ　師夕霧の如くのるよ女二文の所ありかひをなさり
ころ志ゆよふなりくし
そうらハ[illegible]るくくら
こそ　孟　御子連ハ姪兄妹
要るれだ夕霧をて[illegible]
と御名中宮の伯なり
妻歎王主ん[illegible]
ぶく文御らうの後^(サニ)
うりく御位など
みもつきる[illegible]な
つこ
こゝ今そ一りてまさ
わりめれて、孟平今て
一人をもりてあれとく
師中宮字治の中君の
すをト下よわらでの給
小所同なりべし
かゆくのをめとら
細　夕霧宮法を立まへ
と雲井鴈の知ま落
紫文もりくております
とく

らめど、おりくまつげつ、おりしらさ「（孟　兵ハ天ゝり文のるく白文へ）（れちし）
ちくし給らしく氏ざりきれじハさゝられ給ハ
ぎりのはすさよハありゝうきゝつきさそ
れころとせうやうとるずくるのくらへ
わりあしくゆりひさぐさむそてとるく（孟平今やとこ）
白へとく
しなてはまくぞてんらこハ今ともくあ
ゑこちらそへしるでゆかりからみろう母
こうちろめさけるる世の末めくぞりぞる
よむこのとめ給わる世よおもしてぞ人の
（せをを彰してうらぬらんハ三益とく）さうすぶんとあいあるたとしもあらい（三皇上をと夕霧の）
（細　夕霧御名中宮もうらくこぎ）げよのきひて中文ぬきまやうまさくと
し給ここびりさなりそれハうらしめし（おや中文の）
まろうひて、いしおしくりくゆかなくちひ（細　御名中宮白氏をお淡洲と給）
ちなぶして　みしへまひあり後おやみてよ
のぶれそろし給まんへも、なうけるさやう
なきん、こらうハれ、らしろうらてそとも
くとあわれ、人の[illegible]世こま[illegible]りを（細　東宮めより御わき）
のとゆかりの給わりとこぞ人へ そひとゆきこれ
さぎまりぬれハきこらともせんとせをとりき
げるあれぞれどさよのゆくぐれいきあざら
あがくこるでこうやこなくりそなしてを（細　東宮ゆりとく師内と云ひしてもまハ）
のし給をふずやいあり、まりてられハをひとそて（えどし白立坊のよく）
とてゆうしるとそれてく、おやさもこそう（云ひ人教女あるとも御の雛かたと）

こゝろえしはゞかりあらん
二夕霧の意(?)くろく親王
よりさかれてむすび
と台文のうちへおかず
あり

みわせらの大納言 孟 致仕
のすくの二男竹川巻ニは
かくれしとうけて細

りんよるべくあらんかし。例すくもてつゞけ
てあかへりしうもてさせ給ふ。けがれこそうつ（細 白文の作る也）
よそぢよりてなるれてなく。其後さ
ねことるれば、おるみかどよはるゝなどそ、うへおかな
まじこさ夜ふもはかしさを給ひん。でいここ
（細 夕霧の所よりまいり）しらつてげるおくらりよどりこわられ
くぐろやそくなくひまつるありさ夜乃。
雨をりんとと給ふ夜ぐるしく出ぬべに抱
うきるすれどげよこの比くよおやらめん（孟 夕霧方よりとられていふと）
ぞゝれそんとあいるなりんなむやうく
此りしこらりふくうかけるへしおこたりつあ
らうろるれいりの按察（あぜち）の大納言の、こうし（柏木の弟）

こうくいの北方 細 蛍兵部卿宮の北の方むとめ様柱の腹なり、太政大臣の女 孟 彼中
君ハ紅梅の巻ぞ白文の君ずへしんこ
されとも年ハうるね
孟 九四条早蕨の巻ニハ
此れし作されとくハ紅
梅の作りとも云君なり
も此法ハりうまゝ未定
北つく年ゝりぬるとそ
此河の中よ総角の大君
をうせて是よかり。早
蕨の巻ニ二月よ中君
来りよ出かふすみどこも
うべし
女二宮も作ふくそめれハ
細 うりの九四条の夜へ
作ここの夜母女作へせ給
しその周忌こやうく也
てなり
いとくまなりけるつかれ給へん

かたちとさとおもしろうこそ、花紅葉
よつけてもものゝあはれとりつく。いつれをとゆ
もとより北のかたうせられしかど、そのゝちハうく（イミナシ）
まゐ。女二の宮も此ふくそめれハいくるみよ（おもき年ハえらぬと云宮と此国の中君を早蕨巻に立なく）
ことかはるくまさ給りん。ふこそしつく（葉の女二宮の事と申也）
ならぬ此がしめしうられいそ。御よるすんとつけ（さ人と今上の女二宮と云）
ことせうんでもある給あもりをさう母（葉のこと）（孟 …）
すゝんもひそくしう、なめげるうるみど其母
しずうしてざるべきさまうりして、その給ひぞさ（細 何の此母…）
きこえて給おりくまもあるよりしきまさやうへ

師 女二宮御方へそぬ
出家かたへのこしらふ
うりなきとく
ミかくれ〇しれともされ
ど 三 薫の〇よ〇とのいつ
比とも定めかね〇〇と
此気〇〇〇〇〇 と

さまかよふく 弄〇薫
へたりしさあへしらひ
なかしさすくよ實方
てなかりしると
うの〇ありさ〇〇もきも
三 后母のすそ〇〇〇
序之

たのみいとの 細 久〇〇
又藤の〇との八月なり
比以下 白文とひとよ
とつへきす 孟 白云
君の従〇の〇〇
八月ばかり 宝祇云比比
いふえそくの文の中三
年ばかりあさりく
三 八月十六日中白文を
ねとをりし

なにそくはあらんその御しるしは〇〇
せ〇ありとつくりかへしつゝ〇〇
色ととられいつくろのとらみは〇〇わ
かくすくさ給ふしゆとのかるすさ〇てまると
ら〇〇き世るすく覚ゆれへうそくくらきり
かく拙し給ひなひとの〇〇してくはさとが
よさとくて〇〇ほしさんとくえ〇こ
くさひ出しるか 心ねしさ〇〇すてきの〇〇
あまり〇よもらしを〇〇〇〇ん人いふを
とまりるんうし常ありりんうゝの けふ
思ほつけてしまゝ今 てびきそてもへり
りのまかれともそゆかして やむじ

さりしさ海よいつしりなくんはいそへとらわ
りおしたの御母いとのみはいそき〇〇
て八月ばかりみなこえてまてかり二条院
のしらひ乃れりるこのはさてきよされてよい
りくゆかでするぬありこ海なまれいかれ
らむ人もんようさとせらん物でと
さふくるしつる世ぞりし おぼやかれうてろ
とさてそまりしをものりしけすくそひる
がりめよらかくてなとよいしけなること
をらしき わられよかくき賢との志給へ
るくも よとるよりつり給らん御と いうくはや
まそくらいきへりんさでいへのるすしひ

やそわとたえるあまし
ようは山ろのまちかせうん
と　孟 宇治のよのとも
のありさん不りとく
師説をとるうへ人や
まろきこうちて山里人
のおもかりんとの秋く
かふうとく
まのりと　細 古今の首書
とぞう。前書よ此詞
あり

なこのやうに。いとしとるすぐりかくそまへ（ひとまろうら見ゆるかなくとゝとこ之）
あしもとに。いるゝやゝとげるさとこし世頃
らん。子紙にてうえき多るあれば。つるよは山（孟 宇治へうつり給ふと）
ずきより色かつさかりるしと必ずせま
を。やうくあとしてるあまりは山がは
のまちさかんをひとつゝへるりうし。恩て（二条院へすゝみがたりまかせとりて）
をうらみのゝ給ととうしこよとすぐひてうき（孟 八の宮の此所をこらんじて…）
のよきとそれはけうらくろうる紙にかゝし
うきをつらくをとおもひあられ給こ姫君のいと（とて庭は弥ぞうらとく）
あらけなく恐しらるゝさ夜よの月さうう（孟 人君へ…あさく）
ござととみだしの給しかどらろのそこ
のつしやりるより所はうらはくもおりけれ（細 人の不強之）

う世よかゝる世すみく
細 大君のことよろうかり
のかくと涙くうけれ之
それとはとよろういそて
二男なふまれね袖ぞ
とおもひて墨すもあさぐ
いずさそ尼ゆもろうん
ととむるふぞとく
うらみすこしある夜みつく
おかせまし　師うしなう
らんあらくかすかに尼
よみ給へしとく　花鳥
何とてひろまき　師ゝ
そこもくひるこきぬかこ之
ころかこそとえてま
らん　細 白氏へつたえとひ
あり今ことえ世なり

かれ。中納言の君乃。今よりいとどろくへうき世すく
るげさとえり給ぬれど。うし世よおくる世ま
しくばむるやうよ世ほどとしいたうやせ世ほし。
それよいとあらうかくぞはあなじとさい
いりまで。とよ海ゆう海よりてそすれん
ことよわりしてざらく。そとくへてんとう給し
ぞうりるしほとさうう夜みかくぞおもせま
し。いまもふよいつよとりりるみ哀れらうた
とをそてすりきまし。るこさ御うげどり。狭とい（細 八の宮大君といふ　孟 八の宮大君…の亡魂）
まこよるさあそ河げさとこう給らんとえ（をろうとく）
つうしうりるすしくぬ何をど。なすよりのむしろさ
地りくうる冬しきそとてへしてそまつん

しのびかへして 孟 六君のかたへまいらせ給ふよし中君のきゝ給ひてもしのびかへし
つねよりも哀に
細 ことさらの給ひちぎるべし
くれぐれかたらひちぎりきこえ
給ふ 孟 匂宮の
つねよりも中君を
いとしくおぼし給ふ

さるはこの五月ばかりより
孟 懐姙と匂宮の
しり給はぬ也

と忍び返して、きゝもいれぬさまにてすぐし給ふ。宮ハつねよりも哀になつかしう、おきふしかたらひちぎりつゝ、此世のみならず、なかきことをのみぞたのみきこえ給ふ。さるはこの五月ばかりより、例ならぬさまになやましくし給ふこともありけり（細 懐姙の事也 孟同）。こちたくくるしがりなどはし給はねど、つねよりも物まいることいとゞなく、ふしてのみおはするを（懐姙の事也）、まださやうなる人のありさま、よくも見しり給はねば、たゞあつきころなれば、かくおはするなめりとぞおぼしたる。さすがにあやしとおぼしとがむることもありて、もしいかなるぞ、さる人こそかやうにはなやむなれ、などのたまふおりもあれど（白氏の詞）、いとはづかしくし給ひて、さりげなくのみもてなし給へるを、さしすぎきこえいづる人もなければ（推量也）、たしかにもえしり給はず。

まつ人ゝさえたてまつりしまひ
三 匂宮の事が不露にか
かゝらで懐姫の人ぞそさ
やうなるとさけとのまふ
るなし

その日など 三 六君嫁
婚姻の日を婚礼より中君
のきゝ給ふ
宮ハへだてんとにはあらねど
孟 中君をへだてぬやう
にいとも匂宮のおもひ給へ
ねども 細 白氏ハ
いひ出しがたくおぼす也

八月になりぬれば（細 六君のこと 御婚礼八月ときまりしなり）、その日など、ほかよりぞつたへきゝ給ふ。宮ハへだてんとにはあらねど（中君のこと）、いひ出んほど心ぐるしくいとほしくおぼされて、さものたまはぬを、女君ハ、それさへ心うくおぼされけり（孟 白氏の詞）。しのびたることにもあらず（まだ中君恨み給ふ）、世中なべてしりたることを（細 うちとけ子細をしらす）、そのほどなどだにのたまはぬこと、

うくゝゝりまひかゝのらは
細中少差の海の給て後一
東の東ぐれもあくらう
りあふとし
ゐゐうしさまゝゝらうゝに
三 白のゐゝり。今ゝら西
ぐれのあゝんよるぐゝし
きさゝへ乍ゐせじと老ゝ
しらくらくもそぐらに
あそりしのふし
ゐてゝり 孟中差のゐを
ありゐさ也やうし絵
てらりつくさを今よゐ
うつそで纖ゝ手物を此も
そそゐ河 抄河の门奇
のゐハ差そてつきんを習ハ
あゞして纖よ物をゐんを
ゐゐと恨ゝうゝ差八合
家の差そ秋ぐれを習い
しゐをも中差ハつくさ
うさよのゝーゞ此わそづゝさ

孟中差のを久行と答ゝ御く
いかぐらくめゝうさらんかくりゝら給よ
しぬるゝとりゝらゝとるゐゝれぞらしにほよ
りりあゝくゝゑ。ゝりゝとゝ乎ゝゝとはゝとゝゝ
給をゞゝくりしゝのれいゝれるぞをゐゝ
まつ分緑ゝはゝまいつまゝ二給つんとこつくゐ
ぐゝし死まゝずゝらいしまゝのぐハ阿ずゞ御厳
井とそ申つりあぐらし給つくゞゐてゝりゐ
らりしましぬとゝらゞつくゝさくしつよのゝ
ぞ出をれまゞきゝ中細之庵も。いとりくお
きゝゞられとさゝ給よ死ゞつゝよおつゝゐ
家ゐれ八義と八此月をとゝも。いゝゝゝ死ゝゝ
よゝゐりゝんれらゝゝ何らゝひゐるんゝし。出ゞ

さもらうひゐうぐく
お中差の東られゆゐゐハ
ゐゐのく
あハぬすや 細 差のまゝ物
よしてて中差を承てゝら
おしゝぐゝやうの物此ひ
とゞすゝらぐさ物ゝとゞく
孟 自差よ何ゝに何しにゆりて
中差よ物を出しせをそ
し差の後悔く
すゝとゝてうりしるのゐも
抄 太差すゐを付初しゝう 詞
差の久んの法神しゝく
人の心ゆりされてあ人まれ
孟 太差の鎮怖ゐくてゝ
しゝりかんも申ぬく
差のまひつゝしく

もつしたつくうよりの一給ひらうそしゆく
ひらくこゝへしまい川そし給ゞ、月でうつもしさを
差をてあゝひ給そで、まい川東此つくゐ 給ゐん
しそ。義ゐりべくれるど、此りひゐよつけて
も。あひゐしや。我心にあゐみしよゆゞら咲のく
見人贊の人よらてゐを志あくしのち此やう
さの世緒を出ひたるれてすゝとそ〳〵し
てこの心をよごらそあしくば。さでの作ことを
のゝとゝ海りう法ゐ御お申ゞゞうまするゝ
人の心ゝゞ申りされてあゝんことはゞめよ
てあゝし得いゐゝらべしとろぞうりつ、さでいゝ
みゝくすらしをおゝれと出られてゝらゝ

さすがに一かたにみしもえさ
しもあらずなどいふ
孟 大君の一向ふさしくある
ちかきまでに世のかたよおもふ
男ぞくいひなして中君
をはなれて男をのがれん
と思ひのたびしがたくて
く
薫もさこそその外にあり
さ海 抄 白玉と薫のおへ
中君のおもふへかも開きあ
るべくもりもこしく薫の心を

けすへんやしれことらんとかされのおく
おしことのとおもつゞくるは人のこゝろかたとあ（大君と薫は昔一ツこゝろなりしと云心）
らむとりそすなてさすがに一かたにみしとえさし（ねさむ心みえずてとし）
しるあなしら思ふべくあるに過ずし男
ぞとひはてゝ河いふうらぬとてよびすみけ給（抄 中君の心也）
しげにさくらうめしうちかはゆ河そのうらみ
どきてとらぶんとていつまてとしりこそうし（抄 白ハそうそ中君を不知心也）
あどもあのがらよいくもそのむるどくる（細 女ぎみ）（細 句）
てありさなでぞうらさうしかでおいづるよい（薫は媒妁せしこと）
とうしくさりけりうるはしきを、やくぞ
らやあさこきもさしあたりて海でれあり
さ海おもふきつてけけそりんあまりもさそくに（我 朝）

そのかりのうち　細 そ河乃
なまえなと今ハのかたのおもひ
ろこしも思ひしとし
それあるこたちくるよ
細 朋友の交（まじはり）らとつくを
べきことくしかしこ海の
内ゝかりなるとし浮舟の
ふかみしも給べくしぶら
ろこし女の心のうちなるのを
ありらむと一切人のどし
へらんとさるよし
わびまてしよあやうり一しき
りおもひ人り　抄 大君一人
よ薫の心ちもそてあらはる
抄よ白の内ら人別して
給ひしく又ゆりとふ
薫子語し

とらぶら給わりやとあきはいぞや今はその花
つのつしさせるけれども給ひぞとあるかし（宮の心）
きさわらどなりくるすくうらやむてなる（大のみかどを非みちと 抄）
ひとさへ女のあはれさもあるまゐらせののし
げすくりうやもさしきとありぬべきこと
まうしあくまくて思ひ給へ給はどまそくに
まりつきよしきいろあらひよ人
いとこなりしりしくあらかやらんし（細 大君の所 薫の心）
あんをむすうきてもうするすてう坂（孟 女二の宮）
やふやとのれむすめと給へんと給わりしと（細 中君ハ大君の御かハり）
さ一ぐもとられしくもあくとぞこの君とえま（まうれいと思ひかれしてことし）
しみつきゆかしの月日よまへてまゐらるも

今はよろづ絶めしかそのま
孟子公孫丑上中志気す
を養ふのたとひしとて）
細 孫角の事にあり
まろ川は岸もつきとなりこ
とえる事し 又君の養ひ
のたとひ 詞をさひおる
みし養の志わざる和の
るよみえ云ひの和にお魂
しゆにみる事もうし兵術
君を養ふとたとひしと
そえて自ら嫌し給
ひしるのこうろめしさと
古姫君の事のさつ（ま
でのたまひ）りのをと）
あまりけりてもなやなる
みつけるは 孟云君の事
御菓よりと大君亡魂の
らく こまりんとと）

ぐりのれゆうりと云ふみよ、ちとなされけるこそ
孟：公孫と中志のこと養のたとし
うしろうくとけふ中みも、つきらなくな
らしまつりし物氏、今はしるら絶めしつく
みとどまりん人を始めし、ことなか人とそよ
三 養へろむへきてなきもなし
ろ川はなるずならつしもあれし。らば、のちひ
とえてしる海とうごくまつりのこらんくら
おしうらしめ程みて、めぐらの世よはのそうり
めべきしの絶しもの氏おまりなりてを
なうかしうよつけてはとくつらし、やと
絶らんみどもつくとく人やつなすぬひ
とりねし絶されくはらる風のをと
めどめのこさめつ、よししけ

人のみかくおさらさこなきさ世を
物中将の物云ひあなすす
まで、とかひめぐらすし
し養のた）
さらはうの志すらの分るるを
うらめしき給ふの人々とも
細 女三の宮の御方にある
人達なり。御宮治の意
達は女はうらざる孫王子
どもしるへし 孟 の君達
と八宮治の姫君なるる嘆
うるむとりは
孫王などのむすめどもも
と称ぶりて女三の宮の
御方よりさまきく嘆
今はし世をそそむきさ
養のなひてよりてん給き
しうすく世をそむくん時の

細 いろの心く
のさへさんおらぬきなし世をとひめぐらし給な
げ乃することは物をとなひられけらくつ
ひなをし給人くの中よは、とのづしみつく
らぞ物ぼさるきをおりめぐくれど、海とく
みばらろをまつとなさこそさはやうな
れさつはみ君うらの浦どよ、そうまし
うべはの人でとくく世よ見てきひつかと
ろくて心ぼそげならすまるすなくとなぶ
ねとりつわらせなど、いと物ほれど、今な
と世抵えじむさそるれ人とき、此人こそと
とりそく心とまろ浦ぐしさなすそそう
のしはうくてぶしてんと云ふてろづひ

わづらはしくおぼさるれば女に
のたまはせしとのひしと
のみく
孟 そこはかとなく我心ならず
しばしのひまもなくまよひ
まどふ心ちしてよそにてはと
とおもひてなることと
あやにくに
細 槿ハ其おもかげの花のかほ
なれやあるまじきと
つゆのまなり

めづらしとうつくしきよろしく我こころなげ
らたゞけてもおもへど、つゐにかひなきを
ぐくまどろまで、ありしあした霧
のまがきより、花のいろいろみだれたる
ころ中よりおさなかのこゝろすげなくてまかでたまふさ
おもひよるよめもあらうらし給へれく
まさきそてよう。つゆのあさ世かゝるもてなし
がこゝろぐるしきさなかりけりしもあ
げにおぼしやりてくりそめたるよしつかあら
しきへだて花のひかりなほとも。さてひと
たきのもぞ絵ひ人めして小の君よる

十の君よ 細 二条院中君
のおはしまするにさまざまの
よりは少しおかしけれ
孟 二条院へ おりのま
さやうに申す心ちこそ
弟君のおほせにてもの
給ふをきく

目もあやなるさまにて
物思ひあるべき心ばへにて
今朝のおもひそ

あかつきも 細 天地の容
儀なり。初めの心ニ似
ざりき

朝顔を引よせて
細 槿のおもかげの遊

んよしくしくしめぬ車さし出させ
の給へばいやは。目よりうらなる心おひつきの
をかしげに出車みてくり侍よそでも
さしれなのいとのなまやさしさにたえかね
かくひきたくんばかりいかなるまぼろしに目
なれば目をかけぬさましとのまで出さうぞ
くし給へつゞ給ひまくよおりて花の中にまじ
おりあへるさ御もてはやさるなえんなれば
色めきそめりてなし給ひなどおもやゑう。
でうらうらに御めでたうさしたるげ
まそつけうそきじ御身のこゝろをど
よるぞらふべくもありぞとのつかれ
しらぞ見て給けり。朝がほをひきよせ

けさのまゝに　細　くるまを
くるまゆきをかへむとなく
これがそのへだてゝ其意
のみりとえり所なく
家のさしねよりいそ
家のさしねらちかぐしり
うちへ、ちかしやをて花さ
南く、宇治の好文を持
てちらう物さ二世を歓を
べきのゝく
とこちへしとん　細　好色
の方はいゝをとはつくざ
あらく　孟　女房花とは
みるとては好色の方は
とこゝてゝく　古　ありこ色
うとくみつてぞ行るゝ男
山めうなりとこ人は花
所女とは名なれはあめ
なり葉の心はえなる
あふとも
ゆとあつしけりに
細　夜の明るまたそかひ
て女房のかく見しう

おつよつねいてつかうまつり
葉
けさのまゝはなやめもてんとく宮のうちえん
ぬよろ花ところくまゝれるをひとうど
ちらくおりてわ殿へ見ゆとられへしとはえすこ
てぞいそく給おわり明るりてまくにきりたら　三条流と云ひ其の葉の心也　三句まで
イころうし
みちうえかりしけよ女どちいあどけなく
のかい女ぬ借し
さいしまつんうしうりしつましまもどいらさ　抄　葉の男をあつかひ也
それこそつくらんてそうなくしるくなれ御
まゝれ出くさ程まゝとともふしく人めして
中門のわたりよりさせまへたゝきりしど　唯　格子ともわけなるべし
をこれまりて行くし女房のけはひなとど　細　見えり車し給く

細　あいとかいかぶ我といれたり
所　あつらはそく出さんしうりて
女房のけはひあつひ
その御ひ　うちそゝう
細　旬文の御ひ方うちなや
るは孟文の御格子ぞいふ
くゝのやうさ
ふをすまりおきさわまえ家
こそ　抄　葉の寅法とある花
人ての所てきむも

るをうゝえさのゆへは
三　分は面白くどうろひ
家也

かりしてさりのゆかくくそ　細　御渡引来の細どいかだにおありおかり　花　ゆかしこさへ
御格子まゐりすべし。女房の御けはひもやうやうしく
さ御ろくあかきいりまつる殿文の御ひとさ
とうまりうくりまつるみやとこゝにつゝ
うちえありまつるかり、例のいとさ御ついとくま　葉とゞくれなるこそ句
ひろうち
旬ひくればお殿めさ御しうおもすうしかへ　國をそなとえく也
あきらめ給つるこそあくなれなど、あ　さそやくり
ひまくりきん、くるしいゆうしあつうみこそ
花物語る也
給みもおくさもこゝまさに行よおそよめこそ
はえてしひさうし出ましすりさ御もいとめやこそ　細　葉の具也　孟　ちるゝを知せるかたてはあれとのすらく
いこれよこふくしゆうき世給消しいへて
しきうらはれども、るをうくこ今すのまへ（まさ

こゝにかりてなどやうのの
られざりし　孟 小八内よ
それにと　哢 女房の中の
方なりかしてもむとらな
らぬなるへし 師 若君の詞
らうたき人なとの
細 姜の詞くらはよこなて
[illegible]
[illegible]

まことに世語つるられてしまいぬべく
えさりけるをぬとのあへ(ば)さしばいかゞいなく (細 内の女房達の詞)
らんとゝてもうこはりくるしやうのりくれ
ぞうしうひとらのさかりくるにお
そうえうやすいえいりゝそれとまりさくめぐれ
かゝれはられへさて也べさゝめも作しさやし
るびしはそうりておいとれは例のへご御
おいこれはおとそくゝのしはの也
そひるやまうよおくとかくなきは物し語ら
ぬ人がくるる絵いよいとあやうよそは
ばまあまくれはいまはいづくしとて語らと
[illegible]

へしとくさうしくさき
細 かわりの阿闍梨 歴ては
いふくともに抱ひ身
を強くするはかりてわり
んと思ひしとくし抑さ
れとも心のうち悲しさの
のたまひかうしとりひのぶ
ふかり

つきさ位をいひて
孟 友位の宮の遊ひをも世
の定めかたわかひなるが
を遊はかりに身よ本の
みりかさ抱さひ入に本
のるかりもつくみかる
でさわかそし

うきし給ふも、かの世中に抱ひたるぬひとし 薫のねうこのんうつらぬさ[illegible]
えありけさわざるやあはんとぞ思えされ
給へくいくらしくさりとみは侍らじ
とそし。こゝろよりへもあらずけしく身を
まちうやむ海よりはすくて河へ
きこの世とはつくしひの人し給ふ 細 大君の[illegible]
あらことも、此くりましくるやらさ抱
ゆすひとも、さくよやまてうしそひ侍る 細 中君を我物にせさうるよし
こそいとあはれなり。つらき位るなし給く 孟 友位に進みさ遊ひ[illegible]
人ゞよすありしくりのされくようけく。 とそふる
すげさえ人よりもこれやはすらしつさ

まう給ひのさまにしてこそまいるかや
うくめくもなくゆくもなうくいとわく 細 権をとうり 三 [illegible]
ひかりうちゆれたゞやすくさしいれて
薫 しるくてそこらへりのおもしろ宮のちかき もし
まうそうし物ゞ月の花こしうひでしも 三 然かうさすねども[illegible] さし
うかたねとし
あそなきぬよ。宮をゆかしそでりさまりける
うくかりしくこゆりよ。ぞくこなりうりく 細 宮ハ孟そうり[illegible]
気きれど
中
こゝろえぬまよされぬりたのかるさるを
うりつかいる給そまさわりかうくれる
こいとまのひくこゝもつけきてつきすげ 詞ちもつくうきとく
よらひりちまゐる月ゞ、かの給いとうくれす 薫のうへ孟中君の大君子[illegible]

さしれて 抄 薫中へ給
かれとのへくく
まゐくてそ 細 姉君よ
しらくくらんとうくた
ゆかりしと 孟 大君よ中君
をくりをくてえんとく
師下るの御うりかさき
しとくは云ひやう君の宮し
こゝら。姉君のうくにて
うちかやんちからり主給
ひし中君なれかとし、ゆく
しけそいとよでちらう
うとさしとそろ而優る
よおりしるきこや
薫を抄くらそ 細 薫の進
退のとゞかうとえて
然るへし宮とその
まうあつさとく
きこえぬかるよ 細 下向ハ中
君の自称之 三 しく
まうえ宮のさし、ぬかるく
抄 済ぬまん枯あるハある

君のすさまじくて宮ハ中宮の君の事にや宮ハ秋このむ給ふ心なり
何よりかれら　細 此ところをこそ云へ何よりかれら花とも云ふ所なり　花 古今序の人丸にも
をよ秋のあはれの事を思ふ事ハ何よりかれらの物と云ふべし
うちハ給ふしもの事がかれるは何よりかれらのとゝめる細かなるべし[illegible]
秋の令のもてなしと何よりかれらといへるは、あはれもあひらかにも
さん及びて後のひとりし金葉集 秋の夜の八重も今は[illegible]何よりかれら秋の[illegible]
秋のそらこそ　細 薫宇治
へかるまうさせたまふ。然中に勝劣ありけり
一天のくもあり
庵ものうきさはいとあれ
ものく　河 里ハあれて
人ハふりにし宿なれや
庵も籬も秋の野ら
なる　師 まへしよと云詞
ゆくか秋の心をもつ
いせら
古院のうせ給ふて後
細 此宮治のかめのあれる
とみゆく書たまふを思ひ
出しとそてうる事
二三年ハかりのことよ
師 雲林院ハうりんゐんに

庵りつれとおふよも、御行そくるすゝ、あ
宮ハいつまもかくしあがめのことまさり給ふつれ
ぐのまぎつしみもとそて、さいは宮治
よりのしくとむりき、庵もせうさも海こ　まづうしよイ
とよめれそく給しよし、へかるてさくしゆへ　名ごりのを云ふ　師 句
くうへこ院のうちとすてのち、二三年がり　花 六条院をいふ
のとゑよ、世をそむき給し、さうの院にも六　花 大覚寺を云ふ
条院にもさしのそく人の、心おさめん　源氏の御別れを嘆き

世の末よくくのるす雲林院の事か中にあるへし　河 六条院[illegible]遁世し[illegible]
何よりみくしより
さうの院　細 花鳥よみくらうの大覚寺の事を淳和太后の正子奏して大覚寺と号し
あこりかく花鳥淳和太后とる改て可為淳和とえ　花 河海ニ嵯峨院と桂院
寺あとのせうしれにかとあやかりけるさがの院にそれ大覚寺といふなり大覚寺
に嵯峨天皇の離宮にして脱屣の後淳和元年に嵯峨院よりいふ
御宇のせ給ひ、貞観十八年に淳和の太后公家にの奏し給ふくちすはに
大覚寺とえ又石付られ給ふ、嵯峨天皇の譲位の後階庭不掃甚苔樹赤
つるのまへ宇の世ゝり給ふ嵯峨天皇の嵯峨院にのかれたまふくらくとまの中の六条
院の御ちかきに出す給ふかたくまうけひなきこるの物なるへし　花 花鳥の義
さくつらひりのきこれけ
かくへく　三 六条院の
つよくしく、
宮ひをるそもせうひそし
世うてにある人ての出世
とおひるれしとしおまし
んかくさ人なくしる
んるへし

のすゞれよそへても、院もよくれこのこゑるん人
里住ゐかふの御かよりの人、いうとおもしんわさ　細 六条院ハ孟 見こゝろなき院の世捨てのちあはれ[illegible]
き人なくなんまどひ給ふるまゝよかゞ
つよひりのきこくれたる人くもこれ所々り
あはれかりつゝ、とのくもひそるすまうくすまぬ　孟 退出之
よし給ふかりしよりつるすき御の女房なと、
とまして心おきさめんとさなく見えしけるまく

こそかくこゝろにかくしたまへ
師 玄旨説なれども源
氏の御身なれば愁傷
深からぬなるべし
あるまじくおもくおぼし
とて別れてのちとぶ
らひ源氏をとふらひし
とりの詞也 細 愁傷とは
まされ草
をうらみどもなくこそ
夕霧もうち侍るべきと
なり 河 毛詩云北堂
 ニ
 栽萱草 ヲ 總 忘 憂 ヲ
ゆへに萱草を忘草と
いふ 後名の忘草も萱
草也 今は祢(?)代(?)か葉
まそ一ところに侍るとぞ
礼 忘草は愚草の一名也
いふ萱草を忘憂と
もいへりいつれも萱草をさす

に、おかしぬこゝろにまかせつゝ山ざとへ
にもまゐりずゞろなるわざにおかれ
ど、気色はまづひとりこそおもひし
ゆゝしきれおもしろくて忘草おひ
ん。このたれかはいとをかしうすゝ
をとくもの、おもへど若きやう
に侍らめ、さる世にはぐくみたる
ところべしおのれにもとゞめ
なひしそかりの中もうちけれ
に、いげぬかさりあかしさがり
ほとしきりく、このさせぬ、いと

あはれかくのつみにもあさましき
ならはゞともかくいとこゝろのわ
ざくなりとおもふ

つらきこゝろ 大君意
にまかせてしのびて源の歌に
て大君をまかせしのびその
きこえさせ
とやへなかんふかく侍ら
侍るまかりさくるにかくて
こまでさせてことにただかはり
うきみなれどもくがれぬ
まで

ものはかなき世をもおもはしてさに 細 大君が心の
大君がこのさまの世をとりまぎれにこそすぐさ
ぬさま侍れども、いとかうしも世の中にかくむつ
なき 細 大君のこと 孟同
んなにこのちる、ことならさきまよ
おもひつかるゝはかなれど、世のつねを
すゝめるれど、つらいうことにかゝりて侍ら
しゝてぬれたるかぐうきとこそ
るかきいとこぶりけり、さうし
しもなかひの、ざりんべるこの人乃
まゐれかしきぬらんかはまでに
をかゝまでさるまで秘もからに、
かりひとつれ給ふりけく、いとゞつね
をかりのけにおもしくれしくなさて

ことはりにあはれとおもひ
かほる大将のくちよりも中君の御
心をおもひやりて
世のうきよりも　細 中君
はかなきことのみおほく思ひ給
つれば・世の事も・うちはなれて
世をすてかくれむとおもひ給ひく
らす人(こころ)を・もろともにと思ふ事を
まづこよひ・世をすて何事も
がんことそ・へつの事よ
かしこき人ハ・さて世をのかれ
なきもとめなきの山里に住侍ら
此山ざとは・あまの世のさびしきは
こころもあれ世のうき事よ
又ハ住・うつりかはり給ひ(ける)世
宇治山里のさびしさは世
のうさ・よそなるべき心
なれハうきよりもあひうく
ぶらんとてもあすくてと
中君いひそり
三 弁の尼の宇治より
寺のありさまとも

給ふなれど・今もうらめしう思されて・思ひきこえ
させ給ふ・給ふぞ・あつかひぬるのみ入るけしきもひとと
ことはりにて・かなしく思ひまさる給ふ。世のうきよ
またいかで・ひとりとどまりて・なにかはとひく
らすらん　もろともにみすててかはらずなり
ぐし給ひと・いまさら人・耕いそぎ・まかりはてて
てならひしてさまざまにうちすさびつつ
ことわり
めでたれば・弁のおもとぞうちやま
しく侍れど・この廿日あまりのほどにはおはしちら
さ寺の法師ども・まうでて侍りし
御わたりし侍りと・おぼしてくさせ給へやと
しづかなるさまに・みたまへば・わかれのほどの御心お
(頭注) 薫の中君をおもひやり給ふ
(頭注) 孟 中君の詞
(頭注) 今はと世をそむく山里にて
(頭注) 自由に山居したまふ
(頭注) よわりまさりて
(頭注) 八宮の忌日なれば宇治へ御参りきこえて
(頭注) 宇治の阿闍梨の寺也
(頭注) 白ききぬどもなどもとめ
(頭注) 細 薫の君宇治の八宮のはて 師 宇治の古宮へ移りて
(頭注) 八宮の御娘二人の年・四年・よろしく用もなく宇治へ移りて

此比日あたり　細 八宮の御月忌二年より四年
やくえ　雅同
よろしやきさとのくどん
薫のぶらしのもとを
かまへ

故宮の御忌日ハ　孟 弁の尼
のうつりは宇治の阿闍梨に仰せ
阿闍梨によう仰くるとて
薫の詞也
しこハ扨さしさることハ
細 宇治の宮を寺になす
まやしとし 師 中君宇治
へ御住まれべくの給へり
つゐくうハ中よりなり
あらたしん宇治の給
へきよ　三 おりしるさ
にの気とく

らさじとおもひ侍るに・いかでかは・いとなやか
きとのこゝろは・いとうてのたまへ・わがかたしれ
山寺にうつれば・ゆりつきかん月日にそへて
まづ故宮の忌日へりの御あかりにまうべき
ことをそれとひとのみきうしとへかし
うきさるに・あがしゆくりて・いづくそゝる
御まつりて・そらのまもひのくしとゐも
あはるさまにつらうしそふうに侍るなり
すずかやとなん思ひ給ふ。わうごかしとなさ
つくん。いとかくときこえさせ給ふに・まきこか
ひてこそ・なんおりへうりんやうりの
(頭注) 八宮の
(頭注) 寺にて功徳に執心のつくり給ふやうに
(頭注) さかきにも運りたるに
(頭注) 孟 中君詞と薫の言也
(頭注) 給

なべて 細 中君匂宮の思
ひの給ふ事をさせ給ふべく
うちうちつくろひとゞめ
げなし　八宮の御子なれば
細 宮へおはしますにはあらじと

三 中君の心中に宮へこと
ら[illegible]ものゝみこそ[illegible]
とうしやまいとこの[illegible]
る[illegible]のかなしくてし

そこそとこちすのを聞
給　宮方そてもろへこちの
おかなてかひ又中君など
[illegible]給ぞ所ものなし
らひまふかりけりしとと

[illegible]
三 白氏の[illegible]よ薫
の[illegible]
まさんと薫の[illegible]
なり

[illegible]のつらり　細 給の
別当右大[illegible]
給[illegible]
らひの別当も殿上の別
当[illegible]
なじ[illegible]
まその殿上の別当は左
大臣[illegible]
[illegible]
[illegible]
いるなどや[illegible]
[illegible]殿上の[illegible]
[illegible]殿上人を[illegible]
て[illegible]
[illegible]　異本
[illegible]
[illegible]
[illegible]ぬん
三 匂へ中君と引合せ

孟 湖 満んと[illegible]
給へるよし[illegible]
給へらんの[illegible]へ給ひし　異ん
[illegible]給。
経[illegible]
[illegible]　中君し
[illegible]
細 薫の旧師 山居の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]給、日さしあがりて、人々[illegible]
薫ん
[illegible]
孟 薫旧
細 宇治[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]　孟 匂宮の師 薫の[illegible]
[illegible]
[illegible]
薫旧 暁 白氏[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]　お 左大臣
[illegible]
お 薫ん 細 中君の[illegible]
[illegible]
大君の[illegible]
孟 薫の[illegible]
[illegible]

うつし給ふ文殿の名
みよ、此世になくさまにて
も心給へらるへし
そのほど 細 かの君の護持
いひつき精進がたくあらは
しけるをいふ 孟 おしなへて
またされてしり精進
がたなるべし一向に精進 哢
とのへ御いとよろしき
いまけしとあらんを
孟 いふことを思ふ給
男をたをもうくあま
のかたもに思ひまうで
行
この世をいふなりひとつさ
り世のためにおもふなり
ひとつきさまうせんとし
いともうらみとのまし
三 世の世と被あらば女三
宮の物おぼしたる世の出家
をすゝめたまふらんも罷出
うらしものなし
よろ河とおもひりて
前ばかりどかく世なよは
そくまいしくもみ

人やりならぬ御あらんと思ひやり給ふそのほどよいま
ざまうじみなく、いかにぞとこれひとのこと給
つゞかしくし給ふらん。ふかくさしなしたるはいとわろ（細 女三宮之）
く御事どもさえ物しどけなきされこゝろあるを。（哢 女三宮の悪れ男衛を発く心さしえまそ御事何し）
かられ気色をみせし。めやうくゆくしと思ひ（孟 女三の宮の事）
しそめくに世の人にもあるべくさえさくのうき給
うひあつき御ふるまひすべく世の中にといひすて（孟 女三の宮の男をも世の心）
給らんともあるまじ。これを御なげきそ（のたゝを掃けよべきはいかゞねどく）
世べきふかくあるをこの世ふかくいふから
ひるさんちとべきさんすまじひよいふつをや
うらんとのものふが、かくしげるべくいとかしくし（哢 世の事）

かりそめ世に
細 夕霧の白をとむ
こゝらのさかく
いとしきれぬよいゝぬ
細 夕霧白宮の御傍ある
なぐさとひどく給ふ心
あるいしみへい
哢 白人へとつゝてあり
河 書目

おほかたの月ならず
細 引歌 元良親王の
大空の月だに宿にいる

うきさ御をつかひ給。たのかゝ夜よい一条院（細 夕霧也）
の東おもてはらはせてしつらひてわたる（落葉宮の住ますべき也）
よろしき日のへて、まゐらせ給ふ。十六日（白とし）（いさよひ）
の月やうやうさしのぼるまで、心もとなくまた（三 白宮の道くおかすく）
ば、いらせ給はんとし、よふかくなりぬれど（夕霧の心）
ん、やすらひしてぞ物しておはしますなんど
このゆふつかたうちよりいらで二条院より
御かへりまうでとひとやなかぞこもれ人も（細 中宮之所夕霧の心）
なくまうでこゆるなれど、こゝかしこかゝらんも（細 今日吉日なるべし）
人わらへなるべければ、かかる御中ねしてさ（夕霧の心）
ぶらひまつり
夕霧 おほかたの月ならずやどかがやかすか

花ども云々のよそよそにるら
君のみとるるとかく引
くそう
玄文中く今なしともえ
えども師白氏文集へ今文
更とも中君よしとせ
て歎中よりすでよお
いさんと是思ひつく中
君ようくしのふへ侍んお
なさるよあれどもおらり
もて今おつるとと中君
のえうていでおそひ
まえんられハ心く今な
うんともえてしじとおもり
と集内しめひしとお
の此きつさらり門より
そうなく二条院よお
りますかへとこてかく
とつる御し 細 門よりす
ぐうの六条院へおはへき
の所心なりし 三 中君
まの今夜ともそつせじと
おもりしし

よひすがらそこしねぬ事ハ、白氏文集ハ中く今ら
んともらんくじらしらしと思かしてら
細 中君へ文をまいらせたり
よおりくらとは、そのしまうりけり、也
やいくありきんすといしあられ御心おさ
中君と
れされハ君のびてわくりまてうけりさうから
又様で六条院へも中君さけむかへざるとて
じける事さ夜とももてくいづくささら
とももど、いとおしされハよう月よちぶらぬ
弄 白氏中君と二条院そこし
かくるあるてりうとさよ月をおなめそお
孟 中君之
みする程どなりもあり。女君ハ困てつもよう
げよそふしし思ほれど、いそで亀久あまで
じとよる月よわくし、ぬてつれなさ

の事ハいつありつつやらんえ二条院へまうりまつり 師 白氏の中君ハ涼切なりさめて
すぐさめてそしりつとよ 我心るすくさあらん川さくしてさや思ひもして山よりる月をこんて

夕霧の
中将の事り 細 大てろう
彼の中将之やとあの方の
の月よへやとあの方の
彼ハへし
ひとり月を見るのひそとよ
孟 莫レ対ニ月明一思ニ往事一
ーーー 大かさ八月を
めそ ーー 第二注
られのりこうりちへ扇、
孟 二条院の寝殿よ白
文ハ住のふ中君ハ扇の
対よ住まゐつしえそ
らん 花鳥
ともうさ色思わしねと
ずまらしのうさぬつき
孟 拾遺 瀬川ありきれど
やまとくえの枕乃らとそ
と思しなきらん中君の
へのようけねども涙の枕
うくえなりなると

弄 中君の御事なし
めぬさ夜よ思ほえよりてあってかくなす
白のえ 六君も給ふらんと思ふを払く
さ夜いと哀なり、中将の事り給へる残きて
あそ、すずようれをいとくおしされハ思給
細 白の句
ねみすとも 疾 久を
らんとそいまいとく夜いりこん、ひとり月
孟 独居て月を見
がこ給そよ心そしるされハいとくムて
なきつそ
えどさめてる夜うさつてとさればかくれの
白文の句ろと中君の
中ぞつり給え
うさ、りちん殿へまさるる給ひさえろで
師 中君の我心の
見えさくなよどとりくも覚えとどもでまく
らのうきめへきらちのされハ心うさ物へ
他嫉妬の念のやまぬと云ふ
のくるりなりと我なりし思ふあくちかおさる
程どよりこそ程ぞく哀なる身どとに

一所とよのことにて
孟中君の心八宮を指
てとくいへうだそこる身ど
もおらくとハ大君などの
みちをもこゝろえて

うちそきあさましき　孟母君まえ
はちずども
やくそあれあひてより
女宮大君などのおもし
お八宮大君のうへおぼす

よくけるさきゆんでいりそ
うし　三　白宮の御ことと

て世中をおもひとぐめぐらさば何とおもはせざ（細　八宮のうへ）
まし一所をよのことにてさせて山里
よ年へしかどもしら河とるすくつれづれ
すぐるはあはれなるかうへに人よあらて世
をうきものとも思ひしかどもまうらて
きあさましきれてたゞ紙をひし給ひ世よ
又とまりてこの御方なくも思ふしうへ
ゐましきことのうちひあしくもおもひしを
命ながくていまゝでもながらふれハひとの思ひ（孟　人流ともみえ　極仙窟回師宮よ増り入れ）
ありし時どもおりえひとよりもまさるやう
なりまし程とながかりべきこしくせんと思ふねど（まひしゆえ）
（孟　白の事と中君のうへ）

ときみうちのうちのしさ
もうちうござうし
やうしまし

のさをしせるなく
孟中君のうへらく末姉
君なるのるすえうるす
それともせんかるすく久
らぬるえ白宮え夜うが
れあるともさもそがよ
みもまうえんとおもへど
只らくのうすさうく　暁
きうともこれハ時く
細此侯よ後果強べき
ふくハなりけりまでも昂参
のつくさいやるうさも
あしとらく
まうにをえ捨山の　細
かうきんすりみれぞいろ　嶽め
くまえろもいとえ捨山の
月之暁日阿嶽山なりさあ
るつけしるやとぞ捨
出よ照月をうんらく花月
見てく誰そふそすぐまぬ

るうよやうしくおもへしきもそしくしかの
つゝをこのみしうあさうさいさんかこ（孟　六君のうへ）
あくうさりと思ひゆらかぎなりなりうひさを
ら世よるすくなり給ふしへぞすりすりと
をこれハ時ども君どかハとをおもへる紙にてよ
ひのくえすてく御強つくさうよさうるとも
さこれりさそぶりにゆくいへしうらう
あがり増りひやうりるすくいうくもさうなる（中君の命さまあるバおどしんと我とあぶくさ候んすとおもへども）
とのつしるなりしへきなどなつく
とおみよさるよをいすて山の月のこちちと（がうしとらく）
のみりて夜よかうまくによ河と思ひいそれ
強松風の吹くる紙ともあしまありし山お（孟　字治とおもへハうハ心のことうえ）
喜

ぬしハ喜撰山のかくれ家
ねと 和泉式部
志かのなれをもとより
細 依椎が本にハもとより
さくら盃にての花色く
宇治のそこらし椎の葉
の葉よりもとりて身よ
しむるらし椎がなかとよ
めりしなるもあり宇治
よ椎の本をとりのべし
喜撰
山ざとの 細 白髪の翁
まくるといつし
こゝろをへのまれし 細
のよぜのわくらかしを 替
喜撰やうと歌を釋
しるし 師歌よりけさ
子細に身をしむ状の
我ハ身をかくせかりけく
山里のうさとはわすれ
こゝろやとのかしこ
月ごろ 細 小町が集中
疑ふる男の志のびくる

ろしよをひくふかれど、いとものごとくさこその
（箋 宇治と云字歟といふてのかなくし）
しうかやすきされもまかるれどこゝまでハい
（扮 午に慰めなる）
さを世わしもて志のの葉みいとも尓はとより
て世かりせ

中君
山里ハまいの山げみもかくだらり身み
むかきの風ハなかりこ語しろ尓はまれり
をちよやあらんおいへそとかだくに海ハいか
せ語ね月うちハいをたくなるりのとおさまめし
うちられきれ心ざるののさすまみんじいれ
ねばいのまうの世語なんかれ見らし やゆ 細大君
もとく不食しあひしとて
ゆしうちひ出らうしとも侍といふことも

りのとしいふぎるなさまふく
と衰たりとえくしわんこそ
つる山寺の心く尖くくやひめ
つゝりうりも物やうひろき今ぞ武
ひとまよも月をみくいつか
顔色藏君ガ年ヲ

さいへどりよのかへし
お中君ハりとうりの人れ
ばといひかくし

でまこそこあ 三 是を
とそ白の比心のきこう
てこんとし

そのとのへくへお 中君
と基へと大君の引合せ
るしを志れの人くのう
ろし

りかゐなれるどいふわりきんでいふふれし世の
と衰たりとえくしわんこそうちくたりかれてものくに詠くれん男いむかわる
徒ねの佳しさ何く中きみつ月と衰といふぞうなれ
姫月の此りかう出ろうとなるそ
或人の月のかなくハいかむるりくせつくれれ
とあり 樂天贈内詩 莫對月明思往事 損君顏色減君年
盃うらみそなで
細 白髪のはるく
うつるげさそ此事よさりともかくてとうかは
あもかりそそ語りでさいへどもれのんぞしかうちひ
そめつる中ハ名称なりしらぬ物ぞ多どいひめ
お 中君の名
つるもさ海ぐくよこうてふくて今ハいりまたく
細 葉子池し 三 中君の心をとり見してかなり
さうてい人よいいとぞし我ひとりの根世のしんと
盃 葉をとわけるく
うけていとぞうれんぐじよこそこめと知ず
大君の何より侍り老人今くく
もやめんいそや中納言殿のさいかり表ちう
ほころかうち絃るど、そのことの人ぐハいひあ
そきて人のはもくをのあやしかりきろこと

宮はいとらうたしく見なれ
しゐゝ
抄 匂の中君の事をいとおも
しく見なさるれども
今めかしきの字も見ざる
らん事をなげかしきなる

わざわざしくかくまでもせさ
せ給ふかさす
三 是ハ六君をひのまへ
にいとせ人ともせざりける
ちかやうのはじめやから
人さわがしくてあそ
とみわかせし

かくいひあへり。宮はいとらうたしと見をきながら、宮はめづらしき方に心まさりて、そゞろに夜は
まさらんとのみげさうしてえさらず、まちね
きこえあまへるはけしきかうしおもはぬ
盃 六条院之御着
のうさえ
けはひるところの琴をひいとかしこくはなへ
細 六君の使さ每え
人のほどさぞやうにあへるなかなかはあらぞ。
まさほどによそあひうらゝしはべる紙に
盃 白宮の六君の許をよみて推しまゐらする
あすらん移して書くわざやゞかしこくもてなさ
やうゐありがるすくもの程のかにまさるならや
あるまゝにそのうゑぞあるべきかれなく
物ぞをとへさるかたけれけなびゆゆはあるぬなや。
れんぜしとありかたきべしもみがされずまり。

秋の果てぞれし
花の所にしも思ひぞあへ
ぬむしうらし
三 ゐがうくありけんの
あかりきさうかゞし
御文かき給
細 六君へ後朝の文なり

天下にあるゑき 細 白宮
の御心に中君にあまゑ
くことゝく 盃日仰白
宮の御心をはなへくと
もらくらぬ御心なり
ことゝく 抄 白宮の御心
世のまま平穏にて 花列
あきさ御心なりとも 六君
おうくそ夕霧などのを
てもやしまにひれて
ハ中君の御覧しとゝん
とぞり
よありてのみかはつなるとも
中君よ一夜へとそあひ

秋の夜なれどふけめしうがりや。猶すゝめくわ
けぬうくり給てをとゞの人ハ 抄 中君のゐのまゝ御心 らとえまへり
給ひぞ。志げしみやよのごりりて、ゆきさそぞ御
文かき給ふ。御けしきけしきうしあしくぬるかあ
めとて、おまへなる人ぐつきうしてみそきいの御
中君のゐまし
うちこそんぐるしきれ。天下よおまゑき
かゐのさき
御心なりともどのづうしけるをさえすこと
ともありるんりしるとぶゞよしきをあるぞ
抄 此猶中君子別ろ不白宮の方の御事
こゝるなれつうまりさる人ぐさるれだ。
やをうしほしらいよこゝろをあるぞ
てねるさげなるのわさみぞありてとも
も白の萩原まで思んとおぼせども
をこゝさみくことそわしとあわせど。このほど
六君の御許へ
夜

しをんかりくるしとも源
抄よりかきわけてさ見え
つゝのへだてしよりつ
禁中しるじにかりしまひ
しけるりハことよひハ云
君よ急まへハいらせ
くてよき

のみかりつゝあさまもつねのへだてをあけりけれハいかで
心ぐるしきわれハいとゞさまざまに御心みだれ
けふもいとめぐらしくさ宮おはしますへ
なきあしたもうしそあれハさうしたまひも
かりてかくみすちよからあひまへるかの
あかひるどけさきとよむかしげさ海
さるてえしまへハおいるく流くまれてし
ぞしうら海りりゆのしお栽ひつしく思ほ
またうち川ひまへるうきのかりりん
ぞしるかど花いとありしさげすへ人云もな
海りしるみこうまご海やうたんこしとるどは
わしこえのひ出給ふぞしかもがうしつや

細 中君の御方へまゐりまゐり給ひ 抄 白云
白の心
中君の心
詠歌のさま中君へる名おぼえし
孟 白云 抄 白の中君の心を寒ことし
中君の心
白
細 白云の

とおもりしつや 細 かゝおもひし
のあハ何物へし御 宮の御
似心思をしげうてまる花
うち

なみし信花とも
抄 更へ人みどりてそ誰
なるし

うつゝうさこゝにも 細 ごく実
めかつ貢とも花の給ふ
物ぞとて孟 五言詩合
雖仁あろうりくはの物
を作りうゝるく

くのこゝろやましげるうは氣色なるんおの
さ程のさまさまの給しうバいつしかとたぐし花
御ど給せらうも思代されぐくしうつね
ぐうしうへのざられさ海くまをさんろこともの
あやしう志おしわすとさろうのこゝろそすね
さはありたも御うへまうさのへてさそへよう
らあ志りしあいそん信ももかれらうよりし信鉢を
ぞよねまさうつりとくへうりけうるなどやうる
おまめごとどの給へでかゝるうこゝみをとて
ましいんつゝうすくれひしまへども ひけよりく
へうこしさうんをれいまうしれバむかしうをあや
あうひとあくぬるさな海かさくかやうのあかりへ

遠八月十七日
孟 行詩
イ三十三
孟 夜着く所 禁中に々むうねるすうや
説ともあるさ
中君の心
細 中君の心
イうそあれハ 中君の御 孟
とのやうま花ひつれと本後せり

いとかくこそ　細 白云の
細之ざつやかにいひおもし
あへどもわれにんのありと
しざまぐくやうたまふらも
やうくそこうれば浙る
まぞるをまにとあるを
よくさりやうすれども
の給へり 師 中云此の心
のうかとはそらしもあ
らはるゝ心らうまゝるし
さりやうとくしまく

言あひまく　細 後世まで
契り給しうらどもなや
此世の契もふかゝる
れど後世とても契むべ
きれとあうそそれぬの
ち給ひのわがなう

御しらど。その川からいとよくとゝこそ挑とと
の給へど。いとかくこそさはやかなれどうち
まうひておほしうおほしめづらしうこそ
うれはるゝなふ人はめしどうしとおもひたまふるを
細云君たち
我又よくゆるしきこゆるのなかにもさることひ
云君は此心のゆくかたをやと
まゐるは流心ざしのおろかならぬをあはれみ給ふ
中君に對しのたまひて流心もかくれなくや
されどこのふ給へかけぢめもしるきなり。
中君の御
御の世までとちかくしその御給ひしおのつき
中君の心ぐ
をぬさとをくよつけくも。げにそのへいとを
じうくめる。今まではまをつくしさは心へて
ぬべうれば。御のちぎりやよがなることなれ

う
師 こよびの御誼よろしきをして
つらじうわんなるべかりけれど
あ中君の大かたさうらうを
堪忍しのみへうれど御
のこがれ御まうさく
さ御くよおもひあつかひ
いとし 三 身の報なり
で人よそされうう給古
大将君のまかりなりそ
やうの時おぼひおこえ又
守護くくるべきと考へ
こともあり

ここゆうきてに表すうは
あうき御 細 白の細之
師 白の給ふよふきに去
ふびひて表なう中君の
あうき御とおもへつく
我つぶてしうは心へて
おもひでていふまゝなうは

うれしとおもはずしてかくいはれぬ世にもあるを
のたまはれぬべかりけれど。いとゞうれしかりけれど。
細中君の心
え君びあへなほやさしうはるかなる給ぬ。日比もいひ
でくおぼひなるとえてもまうしとぞまうすまよ
おもひまゐらすつれ給へ御ぐよおもひあ
つかうことし給ひけるべきのこもえりそうくさ
れあるやこ御れそめてかとくこみとえさあら
中君の御心
ひ給ふぬをいとあはれくまびしとおもひさく。
画白云の中君をさく
いくそひきすえだちあそひさむけ給つ。
さてありまくよ哀なうれあうさ御ところ
みなどもへぞそうはんこそりのしあひれ
中君の心のうちくゝと
みさかしすは秋の御ぐよあかしかうまなうの

かしこかれバ座のくハ陰
まかせのまゝしとおもふざ
こしらへらくさまく八と秋
のそくにくまふろ院なんお
うちやとろうて白の花を給之
の給ひつかて御白の秋れま
のさかりといふにかせて六
君へ渡らんのかくらうハ狼
声をいらくまく

いとうしそうしえりえそて世の色を
御書君へ実義人のうらくバいゝ
まつてらひて御をえもとのづう
らさぐくにくま御へて細をとを
しかうけ身よ　細　中君気男
のよみるしてもそしつゝ
ことまへとく母中家れて
こなくトすゝめまへハ身
とんえせぶうとし何いる
かともひもきうてれぞう
こ細そし
おかせられ世　細　去年は
も立あらくしゝ　孟　白衣
の位ちにるよ付ちかるかる

とてかゝれば袖そて御とのこひあへば衣のま
るんぐらんとてその御によつけてとゞめられ
なめれとそゝろに御くるしぬげにおびえ
やおさるゝの御袖いひやされどまろしみはくの
よく御のあされぞいとうちもしいふど
うしとえりしてきこせとこといとおもうらん
きはずそむげに世のことおもしきこえ給ん
ぬこそらうさき袖うしうなまたなりわ
がけ身によりてとゝおもへしまへのとんと
をとぬまえ絵なうとりとふやうんか世
もあなんばまきられあふざしのこゝろとこゝ

細　中君の心
細　白の御　御中君ちかき

[illegible]
全のそしてそ　細　引きそ志
らぬ今くるまよ命あら
そ我やうまうとのり人や
とりぬと
御まかうめかう
細　孟　孟　細　孟藻の禄とそう
めとやすハらん中きうるかえ局
てうく身まして後撰天
住のきうぬしかうさいえ
うくのそらくの御の手く
給御の文乃使よ禄の衣
裳とらけうらく花
いつかうま　細　白衣をいつ
のれはなるとさくまつ
せあひつうんとく三と
給とく中君のくるえ御
せしかるのかどみえ
女房して　細文を
御るまえくして文を
白のことそてえまく

いづべきこともしるくわすれてべき
との御返ようしこにまゐる　細　六君よりの御つかひ
うきひすぎよけれバもとしつゝくべき
なすれくげざやかにこのみなみおもてに
まゐれりあまのかるめづらしき玉も
づかれさるなめりと人々見る
いつのほどにいそぎかきつらんとみるも
やすからずはありけんかし宮もあながちに
へだつべきにはあらねどさしぐみは
なほいとほしきをすこしのようい
はあれかしとかたはらいたけれど
いまはかひなければ女房して御文と
りいれさせ給ふ

細　六君よりの御つかひ
細　匂宮中君の方へ
西の対中君の方の也
和布といひて世のつねにもなし
白衣心
細　さしぐみ
孟　使の用捨もあるべきと也
白衣の心也
孟　女房ありさま

きく母のなかの　細 藤紫の
あく氏六君と書るなに志
ちゑ孟六君ハ衣内侍が
腹継母ハ藤紫の[illegible]
せんじらうといひし　お 自筆
あらそしも父の[illegible]を中
君の[illegible]ハ六君の[illegible]
まハ悪熱のなるぞそれを
うらみ[illegible]
説話に評して[illegible]
[illegible]へし　細 [illegible]
をさな[illegible]の
まの六君と[illegible]
く　三　[illegible]六君
の[illegible]雲の源
く[illegible]
記[illegible]
お白妙の[illegible]ハ六の[illegible]
ハ[illegible]女郎[illegible]
よそ[illegible]
[illegible]　細 文[illegible]
人[illegible]
しかり　孟

りそうすしきそくむと笑して[illegible]あけまへ
なよまく母の[illegible]
孟六君の自筆なそなくてく
まも[illegible]
じ[illegible]のけ[illegible]
孟六君よあそ[illegible]
細 文の御し
はらこ[illegible]
しきとあれけとし
おしけふく[illegible]
藤紫
どうれへし[illegible]雲のいうよ
細 白の御し[illegible]
とき[illegible]
まつり[illegible]
んとい[illegible]
こと[illegible]
おりひの[illegible]
[illegible]

みつハ[illegible]
師して[illegible]
のんようろね[illegible]
ひかたぞ[illegible]
めしけ[illegible]
時なども[illegible]
[illegible]
[illegible]
しそ[illegible]
[illegible]中君ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
お中君の今て[illegible]
[illegible]
[illegible]
お中君の[illegible]幕嫉
妬の[illegible]

人の中て[illegible]
も[illegible]
[illegible]
[illegible]中[illegible]世人[illegible]
白妙ハ[illegible]
[illegible]
細 中君の[illegible]
[illegible]
[illegible]
細 中君[illegible]
[illegible]
孟[illegible]
細 中君の[illegible]
[illegible]
孟[illegible]
[illegible]
[illegible]人の[illegible]
しきあ[illegible]みちをいふすれハ[illegible]

ひゞきくらといひてゝ
かゝあふにぞとおもひ
しが男のうへにかゝる
おもひ給ふなるへし

まいてひとりもあらんは
関白の中君へ参らう
も涼泊なるへし

よろつきんたてこと
さふらひてうせさせ
孟 中君へまいらせられ
つき物也花るまては泊お
候てうせさせ給ふと
トテ 注ニおりせハ食物
とかく給は給の飯を
ぬあわせとふ。合には
りゆへはあわせとふ

らぬ人のおもふらんと料物などもとゝのへよ
をひとつのうへにとりてもあやしうさくらにも
ひしいけによろこびたまへる 孟 中君の心ひ給ふ也
とりわきてそなたにもおもひたまへしか
給はふいつゝをもちらて長よらとけから
さ給ふりも泊まりのつらさ 白文の詞也
なからそひとあはれなるとのおもひてあはれ 由
おほれなるのかたくせ。わらへさへめし 料理なとの事也
てことさうしておとさせ給ふよし。てそ
ぞのしきてしまへともとよろこひの給は 中君の心 孟 不食也
しられぬそこらうさかれと給けさせ
三 大君へおりせんとそ二日めの蔵のかへ 白文

ひかりのあかく 細 白文也
のなまめつるなくゑは日ハされ
あらしもふく山のかけにそ
うつりゆくなるへし
しわりさま 細 常の山里体ま
すめるにしかば大方の
すべきりのなそろり 師 栄
まて物をまわらしひかりと
のこゑもかなしきとそ
わまとつかすら 孟 兼と
してねとのうらけれなお
松の梢の下にわあまそつ
里もつ 同
ほしあやかれを 細 白文義
に描くの思とすかなし

風もはしくゆかりこのおりしもうちかなるよ
いまめかしとするすゞめいかなれば、ほどく 白文の詞也
しくえんなるに物をゆかしき人のけはひの 細 中君也
あらはに何よりものびやかなるけしきのかたそ
ありさまびゞくしのたぐひ声ある山のかげにぞ 宇治とさひたる也
さびしくて
中 御かたちまだうつりたる物とひくつりのたきも 白文の大君へまうたりは也
ゆき秋のくれかれこゝひいまさらいけぬよいで
給ふかれいかの心地のくるしくなりゆくよりいわま 中君の心地すくの心也
くもよるゆる也
とつりすりけりにならも我がりちふくゝさ 孟 中君也 師 嫉妬の
念を入るゝ白文
うらうれしおりすくさめてかひうしめよ
つゝ物は我りもせ給しきさ給など世 評也

みゆるにつけて 細 懐姫に
てうせ給ひてうつるを
へりくれ
こさいのまへ 細 明石中宮乃
ら中宮よおひ立ちし
三月 同のつげ 孟司
中納言の君さるべきにて
師 夕霧のうかりをさそ
ひとまうりて内より
退出しまへたまり 抄

出かもうとおもしろきまで姫君ゆこれたまや 抄 懐姫のうへ
おしさこしきいかなるらんとおもしろくびうしう
細 母も姉君も平世のらうらん 選 を緒く いかうしけさきそうすれいからすらんつひ
でよりやさしうすゝめたんとすらんなとゞ思
あまはかしりるゝめどろすうもありえいと
つゝかうきおろか抱きまでゞ涌とろうれぬ
まくよおりひわりし給ふその日いさいの宮の
やましげよおさしまうそて、うれもくまいり
川どもひまえれどいそうるがはぐせよおかりしまう
まれたことなるつしもおそうしまするとそ(に 細 夕霧
さいもそまうく給まなり、中納言の君さそ

このさきもいのうつしきれと
師夕霧のなしむ六君とお
まき業のうけひくさあかね
と根之あひしのうとゞ
みかうく白家よまいり
せてりしづさまへハ業に
いちろうりしみかうす、母兄
中君れとこゝハの地の
くハよせんとてらくに
同車しくゆまりてあそ
と業す地らうくしいらり
つらう
のそうしくまうして給く
師うかりのいそさうら
よつき退出して夕霧乃
方へまうて給ひし
人のうへよりえもしうらと
孟六君を業すしわし
りさきもしより給とま
かよつ以ハ白のうしひまふ
とロかしとも出むぬん

細 三ケ夜をなしひはかうして、今日は東ゆらしぞまうし給の
まうとまひのさうし給いらうしんうまくるを給ゝ
さんとかやまくゝかれどうぞうりあらんりしこ
細 書く のさきもいそうりしられども 夕霧乃男の御兄弟業以前 そうしるさ乃
てハるさとし 堂ていかゞかゝさ涌よおこさうへさ今もおそく
さどと抱のさへよきんようてうろしきよおそくされ
かかう業の事とい之く そもろ人るれいかうありう 例なうしれいのそしか
うまうて給く人のおうえよきるきしまする給 夕霧の堂の業之
ロかしきと思ひへらどてるうゆやうやとりうん
細 夕霧ハそうてうくそひ出り まかつのまへる程、物しくいひしとされどなる
抄 李部生之の例よさてり ねうしそぞおりしもうゝひすうしとゞうる給ま
白家の出之 かりさしうりちん殿のされらのひさし、さん
六 落 勝之 げしはまうてかましまいれりは蓋や川ぎい

そん夜のことゞものゆうしきんりによりて 此夜の方法李部王重明の太政大臣の聟とりのことを
ことまふ三ヶ夜の事の後とみえ（て）けり彼記云九四日 天暦二年十一月 夜ゟ入漸深㚑右相府
亭ニ於寝殿之東南對ノ廂ノ東頭西向ニ設座以朱臺六基及銀器弁ス饌以朱臺一双以銀器
弁ス饌菓等ヲ安座右ニ上下畧 花鳥委

もちひ 細 三日の夜のもち
ゐのことなど人々するとぞいへり
孟 三ヶ夜の餅ハ銀器に
もらし 弄

ことゞもありけるを
細 白女ハ六君の方におはしまして御様まても酒
宴ありつべき（こと）ゞもを
とく出給ふ

の御さうぞくともいとさようにて女ち
いさきさいかく御心ざしのほどもいぶ
とい（なに）めづらしうさせ給ひつるをいせ
まうけめりけるぬことゞもさそいかく
これおとゞ（夕霧）ありて夜いとうふけぬるかたより女
房しそくのいとうくてまへどいとわされ
たてまつりに出給ふを少将かれもしもの
右衛門督藤宰相なとさしもの給ひて
じて出まするに夜いとうくあはれなる
りのいとかなしつきなかりけむいゝなる

細 花足し
細 若き人ども
夕霧之
孟 此酒宴ありつべき座へ運ぶ故也
細 雲井雁の兄弟也
白 六君の方にて
孟 匂宮出座の折之
孟 久のま息也
孟 孟をもちて出るやう

まうけいさ深りめとと
みさいふをおひてひ
しを 細 若きよりこめら
まいらくハなとくあはまし
ごとゞもありとの給しゆ
あらの人ゝあはれかり
ありきし まつり 孟 白女ま
いはる夕霧のおかたと宮同
まそしまゐらせ残は
わかるとのみひしかを
たひ出給ふえ
女のさうぞくはありてるかそ
あらく 花 女の装束ハ装
裳の裳 唐衣 領巾あり
細 長え 貴女着物之故
ま別よ是をさるらくし
三重かさねのうちきいハ
中倍ありといふはや腰
も小腰引腰之或白或
は地摺或村濃亦有差
異ニ唯かく衣のさしも裳衣

いかつきくの給ふは二ところにほひ
給へ源中納言のいうもすりまへるは女とこ
しほく出まつりまうけこはらいとぶ
されどもしぞおひてひとしと笑て出かるわ
まされどよしらぬやうなくいとおかたり
あんじのさまは出ますれともの人でまそん
やしゝ給へ笑てなる所ゝ人ともいと出がたり西住
六人は女のさうぞくよ似そなりそ人で五位十
人ハえりさねのかしこきあはりのうしをえれけ
らぬおあべし六位四人はれやの侍そなりぐんり
給ふと川はつかりあうしと長おちぬ出で
しれぬ抱のみしき夜なきとさきこゝろさつ

孟 薫之お 薫の白ハつかく酒を志ねらも
白 六君
細 薫のさ叙之
細 薫の出給之 孟円
孟 寒ふして
白の出給の人と薫の事をましき
おもしき人ゝ侍り
孟 禄よ出でらく装束
十五 細 常のさねより中倍ありといふ
細 ことねまうりて腰をまる
三 織物を位すらくあそく
じ 色あり

らゑくよありて織物も貴く、そめ平絹は次く故にくらゐありといへり
ものゝゑしき也　細 法令のおもはしんくさるをもうけ立ても忠ぐ也と称し給也　孟同義
めしつかはるゝ也
細 院の召次し　親王家
へ遣はさるゝ所ハ諸院也
なりどの所ハ御厩の舎
人也　花 西宮抄云院宮
等ノ雑事ノ中 御随身
御厩舎 夜行 召継 等義 時云々
今案 親王家有召継 式
部卿重明親王嫁娶之
時召継以下銭二万在
禄よ給はし上の紀に見
えたり。白文の時分是
よみはるべし 又和足
院禄図院の任料と
して召継を具せしこ
ともありしにや 六
御厩舎人かはし
中納言殿の御せんのなか
に　細 物院の御始也
けり

しまつりけるがしつきとものあらはどの中なり。
禄のかはりるなるべし　くさりぐりいはきぐいかめしうなんきこえける。
細 萬子の地也　けようくふぞきのせる花やかなるかたしいかうの
ひあれハ細従るもふもまいりひとそろひの
しやわらんされどくらしういえぞきへさそ
さりきかしとや。中納言殿の御前にも。蓋也　中にも。あまに
ひ肩しわさやうなるめやく。らしきますがれば
ふらぬしけりおんくりて折るけきそ。蓋の御従で論也
孟 蓋の御の前此細也　わが殿のあるじかしりてよこの殿乃御むこ　夕霧をいふ
よらうるゝを給ましき。わらうきかはきき御
かうぶりやしで中門のもとにしの

秋はてゝねさよ
二 花よりもいとひしろの
頭のやうにいへり。菓子也
かしこあげつるわざなり
三 何ともなく夜さに結
紙ぞくさりてかこゝ白文のさ
まらくあそのとまうくぞ也
まぎれぬなりとハ　師 夕霧
白文の御母とこの御おちも
御当主一門なれハ也
かま秋ふくも　細 かなり
を女子とめらうし也　たえ
此白文なりしても　をかう
かとなりう　孟同義
こらりしもふえたゝらせ

まうでとぶらひ給ふ。あはしくれんかぎり也。　白の御供の人々也
秋のはてゝねざめがちなるよは。いとあはれにつれける
人々は二ころちかしげにうち給くらんほとも　細 蓋之三
ねらんしくうつやましきこゝろあつまりて。まゐ　孟 菓子也
ありてみけ給ひしこそ。けしかるわざこそあれ。　東文よろしきかうり　師 今夜の酒宴の席の事を蓋の心也
ものしけなりさ御しもおやのいそぐ
くさもわれぬなりひろれどもられ。まひあ
うかしげくもてわきこゆるやうさせなど　白の乗と蓋の礙義也
といひとめやかくもそそし給めりつらるまみ
やのれあり海とめやもくもおしさてまゐり
まふきまふ秋ふくもこのしと姓よ女子とまう
ましりハこの宮をそくさしそてまりてから

孟 白ふとこそ云〻内裏
までもまいらせんとハ抄も
りとん 暁
源中納言まうでて 孟 白へ
あうぜし我ふとこふ人
どものあるハ両月と薫の
心也 細 白文と我身との
ひとしきとなり

叔ふことなり 三 ゝ文
字治をかり

よにきえまいらせ給はしものしとおもふまじきこれ
をさら後も丈ほどなくむすびたてまつるなむとめ
いひ侍る源中納言まうでてとかくなにひすらふ
なからそけに薫しのちらかしくにあらぬなりわ
まさろいひとあきらめ川わぞふりめいてう袖を 細 卑下云ゝ 孟 薫卑下之
なげゝ心をぞ里をせうと隠しらのれいとなれある 細 女二宮の御事也 孟 女三宮と云ゝことと
しまくも世かしらんまうしのそりのこく
猶さえばいづくまへかくん世もあくしれにとに
いかりとをいつくはあらんいうまぞ叔君よりと 孟 大君よ女三宮の事也 細 宇治を云ゝ 細 宇治の大君也
うくまうるへらん時よりれしらんうしとふ
らしうていさをうよえ思そのもゝのかなれにな
めりし例のはかなげなりたりつれくなれし 細 女三ハ宮の事也
あげらの色をそてひとえうつへまうし世りはひ

うら海 細 拵案の君ハ身
也今日とそぐりうやうに我
海しいそぎあつのうより
かくる時なりなりうて
そぐうり給へきこまうそてハ
あうしく宮身叔あうね
ゆへ也まつしくとえうら
さいなそとすへくみさる
ことゝりゝくとせさ海ん出
坂の関乃ふ海とうく云り
え身わそあわりんとハうんなる
まゝうての別よりせうり
あてらもそ 細 かうの所え
海あさうとそ人ゝみうと
と関海のあるりんえある

まくるふつかゞあまれはしきく云の夜ハあわりし給
つおきをむくしんと人のかくしじべうさふとあゝ
ぬよくらしげよいそぎきおさき給とほとあらび 孟 雨夜らの事也
此よへりめり
しらまうし世よゆうしたまさせさ河とろう とりとかりイ
世をかりんたてそかしかれもとふしげ此い
かうらもそうへはきあれども立さ川のあそこれゝ 薫
しひともの物うへかりしとの後りんかくえた 細 市と相て我身の地よ思ひ
そのゝげるきどこの人のわさつハいきくらく
ろやましう思ゆうしむうしつまのごとそくしあ 細 薫の御心也 八月十六夜也
けく海つらハ八代そうとまつまへいぞくうこ

しらぬ人へ　元良親王
浮ぐえ西れともこゝを
えいさらく下の流を西
すゞしさとし

ことはおりしきるれぞを
おんなは情しくえんあ
き年とこのみしくはく
さんとは志あるのひきも自然
のうあのもとすれうちてん
やうなるぞさかりはあり
しらいあへも情あるへ
そなへとし

あるかんにはせとそむきさ
つる事　細かわかれあるか
らは女三の宮の御言に俤
見えぬるなへしとぞり

まどろまずいづかたへもかへれんとはえんあり
ひとまはすはあらで、いとどあしらうてなかり
ゆくすゑのわざくみはこの世後の世ま
でなんとやられて哀なりおどうひまぎらし
りてぞつぐ語およれけしれるものうき哉
つくねど、み御のならまめしきみなしりや
あくひすさけなくあどとも、ひとよ也とつれ
語りぞうそあのさうふかれどとひそ見え
まつる人のけぢりくてごよきてまつらげるや
とのこともそゆうふもやおるぶられ世をそむき
まつる女のれりさまえんをもぢつまつりあ
つまりてうかしかれたのうちにし

廿よ一二そ、あまりに
六者の年齢し
さうかりあくぬ西く
浮しさうりよあ見る
あるのあるさとし

よつけ侍くみかうみぐし、えいは女君のかた
御ひかくらくして語まいとゞれんぶしますうた
あるはやさに御は語りなる人意やうずるいて
さはげみぐうそのさうりだうしらつきふどぞ
りのよりとてよあるすめてこちらし語りの文
あひのまかなりまぞ見ひて、このくしく
そこりるうかのずもいてころりしげよるく
じをいでまますこしにひくりてちらよ
さんといふんよあるゐ所あし、廿よ一二ぞあ
まり語へてかういらけなくく稍あるし御いかされ
あれあるゐ所すいおさやうよさうりれ親を見
えまつりがりあくすてしつきおつるり

けふのかやうそいへるまゝく
へし　河　夕顔ハ自惜
おほくの人のなやのかく
さまよ、
—

うちわすらひけるはおやみくはなをまゐらり
給ふべうもあらずやつしてよおはしますうちき（抄　大弐の乳母中君の乳母とえし）
らうたきさるはそのしこのたうさへすみはなぐり（細　中君也）
出これたる地のまなしく見えしらぬわくにかへ（孟　六君也）
れどもまさあなかゝかつらはくはかくれもろへて
いとうかあかくとどへろけなりしさきより（眠　一うとめさえもきくうるは六のわす）（六君の女房也）
人々も三十人ばかりしはべるにたるる
なしいさうぞくなどもいみじう例のさうしさし（英蘿ハ白文のあり）
と倒しれは
へめあれてくわかさかへりめれはひきさあかへう
のあるさかし
ろえぬまくこのよそふ給へる三条殿かう（殺）（細　爰井侍の乳母）（光）
のかやいえども文よまつせ給へるより

このそて　細　そこしと八殺
しこのさかしとふかへさう
かなく花香侯居略
ときうの何　孟　好殺也
夕顔のかしこまかどこの
うれうしもほそちかへ
ちかゝのかはしき物ねかへ
とまおわたくかうとこの
ことしとめて
三条院より我もとくも
三　白の夕顔の六条院
よのまおりて中君へ也
く殺とし
まゐこのすらは　孟　六条
院の臣々りしより夢の
まのすまるうゝかしもの也

いとうてしをやはなけ
抄　いとくやえなけ
あうくてきとかりの白文
のあるやうなる殺ある
こと

ものこれいたきのしのかぐしきてぬりしりはしとかさきし
きらくしまつるものみ後てしまうりしる（孟　白のるくの所）
めづらしくてのちの二条院よりもえこうやすく（孟　中君也）
ことさらに給ひてさうらうなりけるかみすくれば
出ゆきとまりてよひのあたりなどまたもえむかへ
いかやうにかさうのまゝつるもうかしばかり
やうおいつかましてかうれはえんかさすに（六君とも中君也）
てもてさら給ひてさうじし給ふにくと（えおかさ也）
なりかくまりとまちうみんすりことは（細　中君也不有也）
しうどそしあかうりてはいとうくしりや
はなかりなりてくさいけさものくむかへにど
すゐぬ身とさしでかうくへき世のもの
らぢりありとしへなしくも山殺なきいそがん

うくとも抄かてして
抄何とおもひて宇治をおもしそ近
抄かくて出ていてまつりなん
抄中君宇治への事也
あらしんとおもくとあるや
師思の切ならぬつつしき山
里へさらぬ心をすく
きりんとそるゆくまゝ
愈し
一上七 一日の法ノ事 細 文の細
八宮の第三年の法事 薫
のいそうしくちるさとひ
こゝろし
うろ法心の名品なつつまして
師薫の八宮大君なども文細
すかわがかとんの心ちも名
師あそしう紅紗にのつとる
くずそう心の名品なくいと
さりあへくい 細 はいそしわ
らじ立よりりへをつう
中にてまとし 呪 より文
くいかりよわきりまひ
もせよとし

かたうつくしもかくしくだれ 一両よ白文を甫く
いかなるぞ思ひしうそりなんむげよそむ
やうよわそとし くさ脚みはわくぞとも、こうしがをすぐ
さあがやふくげよをそてあーかたじもをべてそ。
うかそとあくめるかど、心ひとつよ思ひあまり 大の細
孟薫ハ中君の文つかひすて てもたりしかれど、中納言殿よ御ゆを下され給ふ
河署梨より中君へ法事のを申候よし 日のわるすいおぼさりのつさへ ずりしよ、心ーう
そて給よそう、はれにうらの御緑うすくま
薫の事を思ひますハ宮さん御のまあ備りけんとそ しうべいつよいとおかしくおりひまつうて
ゆもあをろうるしんの事あんさりめべくは
そぞうくもとさて給へうみちのくよう
こゝろもつくりとびんめあぶらてうそ給

細文の細き日にもいのうり
抄八宮の作ケの本意を
まつとびまるわよりく
道ぐしわかるべし
と世おおもかるべし

御心ざれよりそまつる法
是をそま 孟者ハこゝろさ
よりしそへてまーける
るよえぞまゆへらく
のことく薫の心し

実のいまめりしく 細 引
あの心へ白く六君よ出
ひつきまるわるへし
細白文のかくし給る
を法家毛の文そて申
君のうきをそてり給
ずくらーおとし

角うしをいしゆうしけるり、あさめの法事引に、
御のこゝをいしたうとくせさせまつり給
君をよ給てびさきてまへ君さまの物ごろく
しうはおもくねどげよ世をり給ひあるとうし。
薫心 御ハされりうそてまうろ法文をどうぐら
とげぞうあげるわがしてちかく去く
をつゞけ給をぬとこげりしとさへの君へ君
ぞめでくしくされしきまゝこゝろしときゃめさ
もあぬべし、文ののほめかしくこうの、こして給
すへるわざめく、明 白の中君へ御まちを思ひ、心細のこと わかしとしりよれうこと世
よう乙ろぐるしくそとそうら御むハいつく哀 孟結者えもうきとうつくそ
まて、かうしやうたまうるもたまさか文など

一夜ひとつ　細　夫の御忌
日のすかと大徳よろしく
とく〳〵
さぶらひあへる　細　此段事
どもは法すなはし、さべ
中君宇治へ行のかべきよ
しのすかべきとく夫の御ひ
さかしおよ宇治へ渡り
すべき事渡るゝの給
ひし　かへ（中君へ）聖　孟　同意
かぶりとのさまり世
細　薫の我ま此人の名残
あり〳〵かりうらくあり
嬰をとの名残くの事ハ
あさく水ぬとく　師　薫ハ
中君へのふよせよてきるや
うかもとりゆうらはへよあ
らし

もよほして引かへしくちおしきまでわか心にかなひ　細　薫の
給はりね。一日ハひとつさかりさ海にて。（ちかよし貴人への物すまいをうく云々）
こともさまよきのびやかにもさまりいまやう
うちとりかひそてかたんなりよの給はせ
さうこそすこしおくれたんなみやうにも
くちめしう給へてあれ。三　まうでちよいつまさ
かうひてうん。何よのうしとも〳〵おほろ　孟　薫の
さまうしのこはく〳〵さまさきおぼえての　中君へ薫の御心
日れ夕つきこそもてうまつる人〳〵さまでもなん
しそひ参れはおのるくのづからいくせら
はらく。なまくるけぞとも思ひて御
かの様へまかりゆかじんしはしさそ
あつよ下まそ文めれおもかさの。りそておもしかへ

まさりかほなくぞ人のこゝちして。なぎさにかく
さし。女君をもあやしうつみしきれくるたど。　細　宇治まその中に髪をひがし
おもひいでまふなりくるまさかしもあさくの
やうよ象かけれうろづれ。人みくさも物し　薫のさまの面影
よ似ぬらく
まきみるまつりぞてそそもあしきさまとつら　細　薫子推之　師　薫とおもひてもあらん
そよのんちし
いかりひりや思給らん。いかけるきれさまし
世をせねばなうめし亡人の御こゝ海を思ひう　細　自をうらみれ
かなはいかなるも　いとこゝろすくおぼえ
するにもやつねよりふぞそ世間うをいとお　師
しく。物思ひおもぬさ海よおもひまつらん
すくはりひまて。ゑよハうらそのうちにい昼ませ　孟

きまさりことこまりすく
御遊びもしまてとれさ
所々あるまじきことにやが
とゆるべし
又人みその御は
ひまりのみやの御はいれき
でゆうてりやのみそをと

論ずるに

わざとめかしく侍るきはに
細 しもあらねど聞えたる御事を
くさ〴〵になりてはべりつるを
御はあやうくて侍りつるかし
わざとめかしうはあらずさ
めでたくかう
素よしにてせ 細 此の詞
ゆるしとく
さこそしわのきはしも
抄 文ふみはことさらのふみにぞ
対面もありて文きのふみ
のなりさしもしほらしきを
ほのかにしる

つまおりて、かやのことゞもなど聞えて、中君へ 孟 薫詞也 御ぞすゝめなどし給 ことなり
しひきこえて、なにがしめしまゐらせ、わざとがましうし侍
らずなりしかども、心ざしいたしくたゆまざせ給うし
ものこゝろばへをみて、なにがしもおもしろく給
しを、こゝろにこそ給とらけ給うしかば、たのみ
あしくやはとて、かしこまりて候よりなるをとり
ところせきおしはかりおもひしも、やすくおもはれ給ふを
やへだてずものはしきこゆる御心ざしにて、細 中君の
ちよめづらしく侍ることのみありて、この給はる哉 師 薫の心ときこゆるさまのみありよし
心くるしく、いさゝかの世のつねのことならず、細 中君の御ことの
くちをしくうれしくなどいかゞにほひ 師 文の理なりのまゝ
なりさればこそ 一 ぞ御うれしくもてなし給ふにつけてこゝろみ

とびかのさまをなげきたまふに、いかでかなごしに侍るぞかし、 細 薫中の奥ゆかし
とうつくしげなるにはなほこの絵のあはれなるに思ふさま 奥ゆかしとなし
きえのはいくそのうこそのかなしうおもひけるも 孟 中君の奥ゆかしき
なかむかしおぼえざりけるはうれしくぞ 細 かの御ありうに 奥深きなりとなし
ていとほしくもゆかしくおぼしにほひやうなることえさ
せうけ給ひこそおもひつゝさ世の物語も侍りけるの
ときめかしう給ふべけれどもはかなくてこそしるよりさ 孟 中君のこゝろへ
よりまさりけるひとぞもこそ給ひかもみじみじのうら 孟 薫心へ
つゞけれどなかなかけるにいかでかさこそかゝる海士の 孟 白の六君をひとりにと薫の心ひかるゝと
て、こゝろの外かくのごとくならぞおもふさうおもしかり
とおぼしく、何いのひもらしめゆきけるにてすぐさ
めもがるくよそながらしとそこし給へてかへるぞ。 白とりて
中君之 女君は人のけはひなるめしさまぐいはゝなれるはのぞみなし

うき世やハうき　細 秋かる

なりゆく世やともきる人

やハつらき浮ぞる藤

よ宿世しの秋かるそう

ら

みちのやくのはしまうり

孟 宇治の弘徽の小道姫

ちゃらんとして

ものゝやきへるのみれ もちるまうしも

ものをうるや　細 薫の心ず

まなひ給ふどちがれなお

まること給ふの心細くぬ

うと　贈日 海よりうるそ

わが物すや

わのあうしつ

三 薫の心を風流めく

ぞう

いと心ざけう給しまち

の葉のも

二 宇治の花なり

らひさらえまでさるすみもあるねばやうく世や

[illegible]やうよ細ものせそ。ことにくなよ

まずるつゝ山里よりもし海よわさし

よるへとおもしく。いとねんごろよせての給。

細 薫 有文の御前えしまうかで ことし

まれとしもころひしつよまう世てはまの

まうまつるまで紀うまゐ給るかい秋文まゐよこと

のうちらう世えさせ給ふく。その御ついで給り

あさかひてうれしう給べきさうしだいちらしきを

文の由 気色よそらひがるの

たゞひめまで心ろくをことしに物なりのまん

文の由 気色の様の心ひかり給ふべく

いとおもう給ふみ。さきよおりあるまぢ

の御のはどうちもしへをたりさちてつまう

やまくへめゝぬいるのかほそハらあもみるきろ

せまいりたどはいひなるがくおもうくはさよりし

うきのみやしきを。まうくなりたく御みもが

かと

ぬやしるかくへさ海かりしきさ海ためでおりの色

うしつ。やうしくらうなうもまでおはせう

お 宇治の心こと

よ。いとうろきく物語して。きらばらちらうをる

細 中君の御こと

やましくのよ給ひまへゆうしく思まうんなど

よるよしうとそいう給めるそし元かを

薫の心こと

がいとうちおりしそれはさそをいうなうり

細 引とる人のこゝろくのまうけを

かくへいつかうせんぞうと

物がしう門べきわうゐいとまげう給しもち

の草をもろしかやうう世給ふしんかしとぞ

細 中君く

うとりよさるくまへば忠りしへみまでこの月え

何か世のなかしうかりしといふ
ことか
三 白へ中ル及為
もし 扨白もうけしなら
ま本すぢさしとするべし故
中ろね為ぎしあやとかわる
かくり

法華をひく所 師云
くるべき故あらとても
男なき所の女の人は對
面しまする法もなむき
ら次人なけのなあるを
さあらうくいひしめと
せう
あるぞや無ひくいはるべし
花おくぞや八のあふるゝは
いあしるやの名 細 前の
中音の詞は字低への事
をしたりし尊びてしそ

きじしらくらくしのさ
まひしくとぞとりう
堅中音の字低へ落てよ
ろくしと字ひしと葉
のまりなし於く無ひて
とりふ詞よより於く

いやしくとも出かしそよ
三 むりしきみりのかの
ろうり

細九月まうく 盃白
ゑぬべうめれば、つゆてらの浮ぶよすがとてそはむ
行れしぐいとしものびてしそようかめたふる
盃白ゝうけりさんえこらくしきこし
世のゆかしるぞくらくしつとの結ふ忍乃
芸君ん
いちじうらうあげなかられと、つゐうるゝ
三 大至をさひ出そも
むかしなつぐらくによ、えつみあてでん尚絡
つるくしらめりとのぞなれのあさしうやそり
盃 されど中音の名
まむびて法華をひく所、女さらやあるなふう
まぶよあすまござくいいはせん、りのをいれく
扨引入音よ付て葉も
いくひきつまくバぞれよつくきそいとする
へ分きう
得よなくうくらよつてそひふしまへて
葉白
あるぞや無びてはしまうべうぬかるともそき

中音の名
御気色やしうくをまへべ、つくへもべさこうち
とをもで、ぬりそよみくてひるりぬりをせあ
細中音の詞
くちちげめく、ゆりひのあたりりなんあわど
くる、人のきふんしくよ、おさめしとわどめ
葉の名
てやうさぬべきそしれたれ、もちしへてしつう
盃 葉の詞
るれば、いとおしくれど、これりくがおうがりの
こともかりりれさいめんで、いかしへともなや
細 大至 盃 大至も中音を法ゆる
しいそよりし、もさごみし人の法ゆかしもあり
しあをいとくてよさのく出得されよりるしそ中
くうくそあれずきぞくえつくめざ西しさん白
あじしらやさく出得をとてゝいとのどやうよ

すゞめみな心をもしさらん
人ならず 孟一向ちりしや
まろんへらうは薫いそうら
しきそく

ひきくもそらそうしけるよ
抄中君の心なし 薫の心

こしやとなつもこなまく
二 むうしのそひかしの時
のす

ゑしれまよずくるよ
孟古今教盛女…
ゑやしさそれねつるう
れかん 薫の心

りて侍しかれど月ごろかやしと思ひ給へる
心のうちはすぐやかりしも海をつゞく
といひつゞけきてゆるさるべきにしほにもあくね
孟中君の心
よびんくるすくつらじともよのつゐなる事く
むげよらくる思ひしむ人へものをとどろう
心づきなくて給ひあるをとはなにぞあるなるらん
孟薫の詞也
くしとひつひながらひぢひきしけれども
用言 涂
ちろづらし梅のしぐふうくろわりしげ
なかけもひなどのこうしわびしらもこまのく
ねびまさるすりろうろなどとみえひらうろう
まそ人よまずてりくやまそうし人地とそふ

やをらすべりてきぬぞ
あしこそや おちらくさす
ひし女房二人も退き
ぬるとされば中君の此
ことのしおしきこと
ひうしさまおうるうけし
あ若のこひふしよさ实
事みのうるしらへして薫の
忠思ひしまつん

ちうしうのぬ女だもうめぐりのあれたもそ
ずうかゆきくのつうきくろなりばてそれ
こはいらひうちずそをまつうくのくめぐく
うそりくぞやあしうら給はすくひるあれば
さ給やしてそつあしくめしありまゝさつくさ
孟第子詞
けまはおくもぞうかみくやなしてぞきあう
薫 孟猿偽
ぞいしおしとやゆくく見えひくありへとあう
心の思ひうくさるぞもいくむすぞうさうね
べうかれどむうしぞまきぞくうしわいうろ
式ようゆるれはなす給ひてそひのきくにとかそ
細第子詞
すしさく給なぞりうるうるかのとらぞんて
細第之成実
ますまとえるんするのひつゞけうなるうひる

世のなかのつねのおもしろそ
うし孟中君のこゝろと之
仰人のふかきをおもふす
身のうへより我女の流さ
めし中君への御物をふ
御かう
薫ハのおこゝろ用しのいや
こよひ中君をとりに御ゆ
せしるをおもひふかつ薫
のまへにまよひかほいの
こへいふ

読ろふ渚く
ここち抱うし。人めのあいすきさとさへだしにも何よ
とをしていでまいらずしもえひつきどお
ろまちらうかちにきうとみしげむらひしや
あるひとつずかしうさも。女のけしきあれいて
おしさぞうし。すやもしげにそうさう流ん
ちえうらり。懐妊いてそうしてゆすひまへ
つまつうらしのさすしに中かくハうるぐろしう
薫くてをやうねるされ。懐妊の御つるしの心
やこさへどるまうけなうもむしとはまいてや
いつまかへしつきこすちめしらのわがらう猿き
どれはすらすそめ あかうたうくろをへつひ
薫のへて中君のこゝろさハ懐妊の
細懐妊の事きこ
とうらて懐妊

しのうくのやとくしもえめもしらうかんりのう
らやくくさをあらさえん
やとさひつら我かく
さうしくわのよ
お添ふ薫の紙をとう
らをさそ

宇治よいそわてゆかりけ
よ 宇治へ中君の御ゆかり
しく。ちうまへハ宇治よもき
ゆうらいく我うまうん
うとさへどうの心と
文ハゆらしあひてんや
わらつれて宇治へゆくう
まりんるうハ白文の御ゆり

よりすきのひめりんかぐくきららげくし
よ。女のうちぐくゆかりしさぶれんしくよるかじ。さらし
そおふよきうれぞ。い海の事きも意しさぞそらう
きうろく。さらしへえていえあらすじくゆがうえ
結も。ゆへやかくわうろくろうけりやむりし
よりハをうしわそ御ぞそてあてまらくしくう
つうけるひるど。いうしらするかれくろうもまり
ど。身まそひうらんらしてさらしよっとくま
ゆかうそびやうおくうつぐらよいてまそうくま
かしげよゆかりハまあうと。さすやうそうし御なし
てま一あじさへどうさくを宗ハゆうしまひて
んや。あうとてものひてくさいてびんるりん。
中君をそうぞいて懐妊しるにと
苦ハ君をはんりもおはれらうして
苦かて中くあやかし
の事と
薫ん孟中君
御まもりて

さかづきをとりて白まくらしてよろこびへるなど八仮名かくもあへくさ酒ぐる事なかりし
またいはしつらきおしるはまあり
此文おもひ
御蓋より中乃意なし

いたしくは細書とかきのゑあやまりしらかり
こしいろしらしかね
盃別となかれど根ぬきの
よかなぐもりくしこしから
ちくぬつくしこらうん

いかさ酒のみてかへりぬめみだりがはしくて、そふ
らくのゆくづきなどいふことも、めくられてみ
ふかしまつりすぐいはしかすさおしこたびにあ
置剣かなたのべきいとけぎやかなれ共かみ
すく
蓋
いぶしまけつみちの家にけしむり
若やり秋の夜のふれたいたしさのうちろうにて
とそつとおしぬつくさのくらうんぞそせん
うさすいとありれんしうらくんも人の側なり
以尺となむべきといとくろしけ思ひらさを画へ
つねいとろやおしうてえまさてこせどとぞ
かりさまつるとおかやらくしたびくけりなめり
とよろしくしておもしりへりれけりいひ
のとゑしうさひ出しろどもし世中よま事り
す人なきりやさぐろあま面しうとうなり
とい世路つりつめのこひさよろまてぶをく
なぐへあしそでいとらくしくらへりしけ
なら気色もそひてずすぎようつつうひ
うら人音どしそいづしまつるわぶの流人ぞ人
なぐとおりひ出なもねくろをかう　うくもさ
海ぐくまくらよくるそてまびしくおがせ君ます
をいめしへはいいしかりくまろうてゑいそらう
何うへこのゑありれそて路なべされをこのり
人まだ路べさゝのそいあめ思ふそてしあしらん

またし世中そもおひおり
思へる
蓋中君の心を蓋乃
さへつらうし

三
からんはへいてとおりく
一蓋のむすしのきなひな
ししの附きなおひなしふるさ
三
きもありられてしやむさき
我とるのうし人ま

こまかにもすりてむさまにてはえかうじとて

ちきん人のけうあしきに
三 右兄の事はいふにおよばす
れぬあられぬ事のみ多
にあらくのみこしをかけ
なすおもひゆくらうさうを
とし著のへと
とふいへはうらみせぬぬ
三 白の中君へおくらる
るう

まくらやとこなど海中にたえあらじとおもふの
びつゝきこえひまなく人すさびの心あらそ
こそはおもしめらだ、たゞこの御すのこつとめて
ゆかぞ。ぐしうしぬらしろたるや。ふけうらいふ 細ソナタ作也
くげよさうしげうし海人など。世をしといふ物の。
とろうりきろてよ。なすさんへの心すこ 著の心も右兄の世也
いふうひなきこゝろをいとかくなしさ
まくいなからそらこれいはろげみぞなひなく 孟中君の事也
らされ給ひて。ふいふえまうらせ給ぬなとん 孟俗人の心へうせて著のかくうみへ師世すわうぬ可哉
のいむとさてまもうりをのうろいうせうく
むまらうなまく。いとうくやおしうむかしゆ。
白氏の六中君へ日比いふそくつるまをなかりてくく
めしうどかれくおいはましくうる人のなたいん
そり。何りいふさろへぞそたりさ海みもみてしも 師中君の事也 細中君白氏を根まあいなるべく
まうど。山里ふとせにぞ川みをゝよあれし人 師世すうれし
よ世の人もうとおもしくそひなきろうと
さ給よ世中いと煩をうせひまきまつくたぬ
いとうきをかりうしたゞきしせぬ給く
あはませておいしうるんとこへとそい
とらうげようろうりうしはさ海よりそ
なきてなきまへまば。いてき赦よをれしてた 細白氏の作也
がされて。日ごろのをとこうまど。さうりたく
の給ふ。れいしをもとしふうくうるれに 中君の事也 細著はなすなまへ孟様離の常也
ように。うのこくうがたの秘ひのひとさゆれ

あはれ人は世の中人は
孟著のくもをもそしき
心あかひしよ白ふ文くいふろ
らしくあくとこひまをと
世中いと煩をうしそひなきれ
てれいとうさう身なうろと 師世中すわ世まと人身のを
ま所なきうえしくるそ
いとうきよ身ならううくいふ
いふう
ここにえ中君のそれん文へ
はかりきうるこしてせぬ始
し身のいく一うかやまう記
そうへのあいるれ給ふ文
何いうりとうりてくりえ只
との方にてハきうり中君旨
まあを私んとく

まうら人と　孟　應姓の人
と白の文を見て事られ
られて

くわしくしるしれ
細　男ハいつまでも弁説あ
るかこなたへし　異日

ぶれゆくまれ　細　立ちより
よそへうりうらやましく白
家の御事をも形むべき
思ひて　師　かりのすへ
それすぢさへしられ
だ白ふかきことしるのし

うち積るどもいとめでたれはおぼろけならぬへとさだめ
くてもこのへだてなくさらしくたへなかや
しらうらけぬ細六君の北の方ふかくひきそうまうづ
のすんやうやくうけつるはれさるてまうにを
ろうすべくをとつきさすの深きたちぶる
と弄中君の心也ことをとりくのことゝまれわざとは
やあるむとおれうらなうつる人のれゝし紀をも
細薫心あらんとしろおとなれたりけんさなと
蕪君の事まてた也よりつれど花うとさす海あくはしきを
あうおぼすゆえかはねさすもんしハ四人とも思ふらてをえ
白のすゝしこの院ゆくされの
されめてもいでやとちひるがしらもあさうてみ
孟中君の薫へうすとみて　弄六君ハ宮へ心　おも油断さらそ

どう積しくのまてなで
のゝかすみて

ひさしくとるてまうんぐす
細　白家のしと後のいまゝく
孟　白の心出らて八丈やう
のうけおもんくしく
三　白のし結ぶおく八筆
とんの也ぎさねどしてた
ことおもへよ白と思ふえ
をやうま中君の至深く

そのたの人ふし　弄　香見々
ともみようけくる白家まる

ゆめてげりそそりし待よむりしの人すまうとまうしうと
くてるかしるするとどうぞう給しんだらへはげ
よあわうらさうけ心ども松よらくへくあう
ざりきうしるども理よろくんづうひとうるうく
みるもひさしくとどもし給ひんとくいひを抱れ
そろしうるべく思ふりこの人ざらしくよいぞくはい
をねどるとぬろくくしうはとこてまく川つ海　孟中君の白さとし
よりそてすもしまん人家をと気めしいとぐうきうる　弄薫の御まへし
あつれと思ふかしくるま　のひくの池の川つまおの
いとあうう是てし通へるがよのつるのののかうれ
うまいれとささ思ふめするみとみぞさいまつれ白ひ　師白家ねる亡の人ハ見ておもはれハさりくて　さらくおもてなし
おらきとそのことられ人ふし思はんされどもおやし

まへ又好文の方へ公の
つかうとまゐらせ候

のちのちへつたへもあとし
御白の跡ふ立そうらう
白の中君と御物切によりて
細東文の事まうさて

とりめかしく絵く、いろあるかしことそのけ
しきとり給よこしめかりよりそてあれぬこ
とみしあれハいかんかこなすくまうゐすくて、いと
くるしと思わいてうれど、されいつよかゐすくずさら
るかへおわりゐんよりも色めでたくはんど思ひま
うちとそうしと、わこつわさハござ候さらは
ひとへの唐ぞるしるもぬぎさんへまそてけれどもあ
やしうこゝろおもかぞ身かしこるまじる。
そぞろふくいのちありてもあらじ空を
まつ川よこてよくての給ひつくらるまんやくて。
身ぞときとどころをすさ給ひさこゆゐさ申こ
しうつ御ねぎとりれしさしきるまじやうに

つきみしたらり孟入道右府の御ひきゆう申しうらうおもとあつ紙立右のかる
よの法ぶし生くもくえれともされそのもさうたり也中君ともへるよハ紙もそ一版
ともろみしとし別る也みとりつるまてそあれとらく御同箋
まれてそささまよたもし
ん紙てそそよ書れめかしく
しこつしく細 飛月箋
又法ふもさ給 細いつをく
の私ぐれみもわらざる
御とらく

又人よ見れけろ袖の孟白の
前く又人よとハろるのう
つり香をとうめそとと
三見れめる袖とハんん乃
よく紙麹もろうめくご旦
のかみおしれどもへくう
らむらんすり
又見れめる細ぞどくうとハ
梅香ひうりとえ此前も
又又紙よいひあすまう
孟中君色あえ此白ひ申

かつか御ねぎとりれたらきゆうどしかれ
さへしくさもしくしよてそあれ又法ふくろを
ちそしくさちく、しるよてそあれ又法ふくろを
き給ぞうろのかどやハ色めうまりひの御よ
うろうる法ふられともろくすわる色てくも
あゐびいとくかしげよ思のしまへど、そ色う
くもいつへのかをぬさへいとねうくて
又人よ見れけるそのくうちぞと紙身よ
思めてうと法うれ。女ハあさまりうのまひ
づるよいつへきくうともろく、いづいて
見る見れめる中の衣とさのこし紙うそう

ゆへはすてんとも君かく
かゝりやうかへしも香を
二つとなりて也

河ハうしへことし
孟中君のかをえりて白
のなくさめ給へし
まさの日もんのこる
孟 聖日もんを河なる
中君とくくひきて
形白のとまるをおひて聖
翁のことし

よてやうけくまれたんとそうらるすさ給へるを 色細
しきのうぶらかすう衰からとこらみもうくれ
花の香は薫も給ふくへしとしとこ ぜずりしとぼとがこうろそありしくそでらんれもや
ろくとこがし給ぞ色めし 薫花の評也 こきれにてろるう
やまとしよみみどしさあやまちありともひ
さうらよいえがうとうんぞろうまじくゝうるげ
よこゝろうし紀さ母のまつ給へまいえをうこと
をてあうぞの給ひさしつゝ何にうしくへき
ら こ給まさの日もとこころのどうかは堺得とのご
りう妙きをしけそうづけ ぬ ある ごとをこるてこまま
いうとれあうくひろどとこさば 細六君の出方の用うふきく うりくやくだ
ぬきろめうつしはいぶまのつねようくうまれ
あこゝうしそ人ぐのそがうさもうす 中君のうちの女房也 へでみくう
こうまじつまるどうして いとあ何かよ見まつさ
あ君え 細中君之 細 あらうく給ふし るふえたかくうう 師 業のうそき也 そいろどもに 其そ 紅梅 ろで
しこのわそるみがかさるむてうらこゝぞれ こゝまあそ也 ますゐ法
さ 細六君のこと 海のたまよづともつとうろうしくゝこちくし
さこまでさうかたら人へのけしきそひたまふらぬは
あひてくふれどけとうりても 孟中君ハ六君よりもよくねたく 妙かしきたる
かーうれかしさは ごころわざしのところすくねま
くちるすれたあつさうしまろまうろうしくこ 孟中君之 師丸也
えまえわしへのすうしわえやごさうまい
ろいりよく志ろうこぬうておそよかうしげ

うえざしのとろうすくぬ
り 細 白衣の心さしより
えひうへあうま秘すさ
とし 三 心さしのみうき
好まよくつとなさるそ也

くろ(ゆ)らうつしがたきもじの
三 句のかゝへ慈別中君
へ薫のこゝろならぬと我心
まうくへてあだなるを類へ
しきみなどのあさりてとん
ひけまじきもうちこゝろとし
これをとろくることによれ
おもね人の
細 足がきなどのすくねん
ちらすこそ近づきよ
ひがことよいおうきま
じき中君の御心御
こゝろ

なりがたなれらうがたゞしのいろいろだちかゝり
（御是ハ中君の御事といへり）
ぬおりごとにもあいぶやうつくしうさきたるこころ
などのうち人々はおほかたまさりて御心さ
なまし心はこれをたくらうなども心はおほ
ねび人のきちゝいひつゞけてもてあそばれ給く
とのつくし思けるひとも心ことこれまでんは
いぞらさぐみをおもひわづらむどもあり
けりひかりぬべきこしやうとかはづらひとく
まるすされんはすこひよ御かはしきくこなれば
つめよんどうけく。ものさはまたちよそよ
（孟 御厨子小唐櫃 花）
どやあうしらうさころしこがくひへかしじ
やりのあれとおぼさりげなくしくなまうきん
さうりのともなしくどへつしもとくようなよこしらし
くなかくおほくしきるなどぞ。わざとしたる
（助字）
されど御よろしうなせるなどしてをあつと。あ
やしげなくのこへあつかひしらう。さかへ
（孟 つるにとなひまよれなよふほど思まよ給と）
なくよ。いとど人へはまてあらん御かさるやこ
（細 かうかく）
とさんなりつしきのひとのそら見にてる
（孟 ―）
さいとしょ心くよう(まゝ)こと
ぞくるのまてそ 御とるうき
文るどものわざし御返り
ともきせしかやかゐ
ねだ御よやかつてあ
つかしとく
る程いとくのこへあかし
御薫と中君まぞく
まそのことえをかしと
句のまそまとく
みとそなへとものおかさうへ
さしうなさん 孟 するの
おなはへうひなをてこと
その日もえぞまつぞ
おんりしるなくて程二
条院よおかうまるく
あらん女のおぼえとおぼひめべきとなるどもて
うへとのおかみはさしたるさんいとこ御め
（孟 中君と薫の事也）
ひなれはうてふみぞもひうらもんしと。
ちひやるぞまびしくつしめくもてねてさ
かりのみたる程いとやましらさきりれはその
（細 六君の御方へなり）
日もえいぞ給はず六条院はは文などぞ二さ

いつのかゝよつりかれことのも
こゝのふ三のはかゝるよいつ
のまするかかつろうさこのつ
りりてうやうに二度三度
まうつせのよれ文ぞうく
三 中君良女の六君へれ
文の志ルくさとそしうく
しろやまくと思ひそめ
し　三 中君のあどお
りふ人のゐうのふハお
かまず、こゝるしと思ひつ
つま

さハいへどえおかりもそさ
めり。細くハけろくも薫
のふまかりへど中君を
挫給ハさらハられしかと
之仰おまれんまおかえする
文あれバ今めうし絶えと
よ於はかゝろうハえん
と薫の思ひまふるあり
今めかしき六君まはなう
つうといへど中君もえか
らうやのはりくうまますり

ひ三よびきれ給ど、いつのかどよはりかれこと
志薫るらんと、ぶやくおいへども思しあり。
中納言の君ハ白家の二条よおハさうと薫のかくこむんおうくうつのうくこりりおかつむらうどさうく
ふしも、ふやましく思ゆれど、まかりすしや。
薫の思ひそふうくわがころのおこゞさまうあしきぞうし
ろやまくと思ひそめてしあうりのことどう
くそ思ふべしやしまあそぞ思ひへしてさハ
いへどえ思かりもそてさあらりしどうれしく
細中君のは方にさうきふ人を思ひやうまで
をありへどのけいひるどのるうしきお
衣服のあきりしうねうて
どよ。ま人だまたためうし絶思やりおそ。母文女三之
のはりるさよまのり給て。しろ志うさまうけ

例のさむ月の初ちじの
細九月ハ忌月なれば
法ろうあうべし　孟母文
の絹九月の彩綉中と
て用ゐの抱ありとえ
おむ九月なとよきに
みつうく法すゝすや
あまうことくしくさ
お纏除なとえまかべく
やうく思ひそでこそせ
させめくのゝふあく

つうとゐあや
おいまごまゐうぞ

のさむらやまおはかけらむうふべくきつしるめんとや
孟女三へ薫のまりりてまんしき抱がつハ今よりつりしうきことや
孟母文れ給
まへど。例のさむ月のはうじのまうに。志
ろうさ抱どもおどやあしんぞめまうおどは今
いわざうきも志とりぬとりそ彩くうそせはせ
めとの給へハ。なよらうくしくきようかるを
孟薫の詞く
待しむぶふうりんよあさうひてとふくみくし
衣服と洞を
きう人く
き厳るとよとりせのそ。女のさうぞくとをわ
まさくさうりきうけなるおかそる
うがやさもてきまであるなりあうさらひてらぐ
なうさぬおやまどくまりぐ給ふうりし
細中君のはれうく
はまうと母しきゆはごかれまうよ
と中君の身のうへ
孟薫の紬なる紅のうへの
うらくれるぬれしらめるまべてするぬまこ

ちゝ海のぐあらはるゝは
抄 蓋のねうのきぬるれ
む女のちゝ母のぞへすとえ
こしのひとつかうとに 孟ひき
ごしのきくし唐衣まそひ
ちる物こりんちいさきく
りんまあくれとりつまの
うつかうにはくろうまの
るもこまこしかりあつ
といふなり　細 腰の帯る
むもひろき どもと見るふるすこ文まよ
ハ腰り俗くおつしまし
かつあうとくえ抄身まへ
うつむべきるけりはし
と三 しるこまちつまへ
腰の一川のつとひりてん
ハ袋としるも八蓋の句まよ
出づちし銭うくのるすうれハ
中君ニと恨んやうるしとえ
おちんちうせれと 中君ハ
御めよりけこもせねあく
まちかうの蓋乃ね音信あ

ろきあやどもをなどおほくとらせ給ふ。
ちゞ海のぐするをにはするにけり
ありそんじのひとつりうなどひさむを
びろへて
蓋 むもびかうちぞうしこなり給ふとて
人びとをちらまきゝみやはすうだけの蓋と
附寺侍人説 て。ゆかしくしきみへのひろまぞまる人より
入補ヲ蓋よりの通し つりもとちうあへねさ海のみぢつ抄をつき
まこうつてまつるせよとえ ぼさしうりそかうてるんとの給て
のかまのびやうすれどもとこふさくつくとこ
とまうれらんをさせねどさ抄ぐまうく

くりまけうつり抄ど物しつ
何かこゝべきみもあくねど
何れ出案まもすくへくに
ちぞうりあらえしても
ろくまとりちらしうて
孟大輔の君がわかうに
ろつまゝりうれへを
る縫さえ
そのさしめハちとを
三 ねもねもあうとお
まえくゝり
物まへうらくつてまる
るしとそ
三 のおちうさハ蓋も御
らんまへきおまつてるふ
よれハ何るするもうしろ
そ 兵中君を誰ハうし
ろさんとくし 三 中君の御
ことりちらつきハ蓋る
らくハるしとくし

まゐられバかしこみだりがはしきまでひら
べきみもあしくねバいかゞなどとぞ思ひ
で人びとよりちらしなどおもふれバ
しめひとまとぞりつこ人々のかまへ
うまつるなどとぞとりなしてハつ
づきおもひつくしものゝいとうるさく
孟揚巽ハ… なすごともなど思ひわづらはせ
孟中君を… かゝえんすくめりぞかくめやも
これのハるなどやうにし給
なんのあらん心ハまろうすく
のかどふかくもよういとぞとお
てられどこまかなるうちくの

えんよそろさむく花
の露をとりてあそびて
孟 白ハ優艶の云ひなり
まで人をそこなふハ
あるべき人と云ふ 師説で
風流などのたぐひのき
しれる人の中君よハ浅
からうしき女へよまま
めやうなりともあり
かひなふとくそぞろさ
むく花の露を翫く
るとえる詞也
ありがたく人のとめるれハ
細 白文ハ中文とハ一段と
みなよまりてこそ見給
ひそでへまへしと
いそやうなし 師 好色のかゆる
れど白文の作めのごとなど
のこめ給ひしるしハかりかなす
とく 孟ニモ中君の乳母の不
足よりひろすと義を極じ
せりきうしハ白文の中君に
ハやあやうろすなりもあり
かひあふとくそど董の宮
よ細やうなるハあまかく白く
のうすなれバいでやと見し
らりけるよりかくるや
私 所説をみなとるかなや
うくてへあるりまハ 彼を
見ぬのうへかさね母へハ志あ
ひかきこゆなひともおる
よききうひてさでなる北
ぬるやうじくさふくしく
てまちきせまへりし
あるづらしハるなれど
中君とあまづるよハあるれ
どまたくあるあひなる
ねをまいらせまつるを述を
私ハ縫ことげくしくきさ
てかぎりよ諸播なる抱をま
いらせあるんもそひのかた乃
ることえとらむかう人もわ

いかでハあながちしもむ。孟 白ニ文の心の外りむこうそ世いかに さがなりけるくへまゐ乃
そうづまゐくなすしかせまへまゐハ世の中のう
ちあはれどさびしきこし。いろいろ地となしきり
給ひぬこしいろいろえんよそろさむく花
のつゆをとりてあそびて。世ハをぐをぐときぬと
ありしうろねどもりハおもかなくひとのこあ
なれバよのづしおかしありよりけりつ。おのあ
やうなろことまだくそあのひまつ世給ふ
そ。ありありてめづらかなりすまりわれども
でやるなとをしらりけりよるこ。中君の流ろうる女ろうなゆゑ。流め乃
とるをしそありくなからへなどのちかう
ありやかうしぬがありしくしらかめりしまゐるをなど
あゝうと。女君ハいとをかりしう。中君くたけうとも 二条院のぬの
もまるねといふり まねかもあつかれるど。人をまゐもでハあかれなる
なさこふしをあくぬよまして。これあかうしと世
よひこころけうる様の花やうさこのかりハ宮 細 大君の御方え 宮居
内未も大君の日ろうる人げなく見えかうんとく
のうら人乃え見そうんしくも。人げろさ
こしくあかりみてうらとをそひてまげり
しきと。中納言の君ハいとよくとしさう 孟 董の御やうあつるえ
きそしすへいとうしむあうりよハこぐる 彼をそろ抱しまふるをのえ
うちくしらりぬべきこころさうひ乃
さ海も海なづらとはるけまゐどなるよえつと
くしくまゐてそうかさうんをかくあ私く
なくえとかむかう人やおうんとあかきとるり

らんとのをそ海ーそて
いまそ又例の 細 前よハと
まさあへね海ともすれハ今
ハ又我又よきてそくま
いとせまり 孟 おハ言合
よ兄まりせられより今
八宮とこうらえてまつる
せん。

きり。海ぞ又例のめやすくさる海のりのど 細 様子
そとるじせうとをすそ。れこうちさとそせおや
ど織べき弁之 花鳥 織男之 細 薫之
のまうり給らせるどし給りぬ。式君しをぞ家
みもとくに薫のこちられハ上臈ちさとく
みとどとんやのしすりど。さ海とくまようつ
きこえそられくうさいにすろまでこうとどり
り。世をゆりひしをあしてあそかりらむ海も
ことよるけまど。故宮二代れ山ぞとくとみそめ給 孟 八宮
しらぞさびしき前のあくれさハさ海こ
となりうとこうぞうしらぬうれく。
うへての世をもゆりひめぐらし ふかさるを
よそとするひ給よろ。いとおしの人それ
細 薫のにて 中君へふとかた
[illegible]

さびしき前のあはれさて
嘆ふ宇治の宮よりきこゆ 細
私に見るひてそつり
かやとくへ
いとをしの人すりしや云
細 薫之地之よくさひし
らせすみすり 師 宇治宮
のさびしさよりすひて世
のありさまをそうらり
しやとこ宇治の宮のさ
びしさと人かしこいふへ
おかうに給くよ信しさ
すのううりしもよ如きふ
八宮をいとどしさてすと
りなん

おしろす。さんへのくやきるんとそうかりも
さうりそくらようりそてくうしくれハれ文
あどしど。まうしとりハこ海やりよて。さもと
ま八君びあきりさうりしさみとつくさこ
えおふせど女君いとしひきさるすそひかさ 孟 中君之
おかりと申しすげりて。ひとへよきてねん 細 中君のにこひこゆる
すうそ。ある物ぐうおしとくしさるわさし
海ことなりさのりしへよすくひさそ。いま
それさんよをやそうべきど。むりしうさ
さうまなりあしらすうんを中くへめ河
うつべしずうずうよおさえりよもあくぬれん
ぞくありさ海のあはれをきてぬふけあるど。

しりうろ海ことらうさ
のとしへ 細 薫ハ中君と兄
弟ともありをも又夫婦乃
君をまもおすくて相そありひ
よりんへぎれハさ海ことう
ことえし

あはれときこぬよそ
細 薫のあはれなるんの

とゝさえすがよえへれわ
とゝ

ワかやうなる人みるあまし
細 皆新参の人(達之)
作者のはじめてみる人(なる)
とよハ中君の心をいふ詞
なるへし 箋

この人もうち人なとえ人
孟 かわりの大君のおもえ世ハ
心をうけしけ物をし中
君の心也
付なるいとみつらきか 箋
三 白箋の心のかはりかたも
箋のかけれにかはりかたし

さるものにてこゝろつくしげなるよあへらきたらんは
いとゝうまじきいはんかたなくくるしきとこゝろ 孟 中君の心也
よそひき入れ給ふよ今はさうふかく侍人ぞとをすこ
しものいふくひなりぬべくわりなくやうなるハ
みるあつしきたち給ふて 孟 宮給よりつきまて よひとへれれうう
つかふ女房也 人ともいふの山里のよかる女がくしなとりなさ
とよきと見てしてかよへなかりけるいひあへるを
べきんのあすきまてよハ 孟 大君と云ひ出すかとき ひいぞ
さゝて給へかはなりさしおい世ましハいご式人 箋之
もと有心もそへうはまりやとかいとうれし
う。弦のつしくなりあらんあすけさうゑ 孟 白之
細 箋く

やでてらにほし
お心あよあへきうらん
まあり。やがてきこゆるを
ゐもと箋なし

ちかきせまよわし
細 かわりの御醫師 侍
ふたのさうひみくし
孟 此御ひの御よ藥師又
ハ侍るどのまうにその
ふくみてもまうら海
しくやとくし師 侍なる
寄るとの時のかし

一乘物のかしき人くく
箋の中えよちうさか
ひしをえしくくし

あひよびて。例のさめやうすりりへのこあり
さりやうくるしよれさしく。さしいごさ世給
中君の御けしきいひて對面なさむ
て。いとるやまし給ふとかくるんえこゝ
さゝせぬとし人しくやよしいでつるをさく
箋 箋心之
よいきうつくして。激の世ちねべくこと人
めよつめハさうて。まだくつて。るやま
細 箋の御
せしまよわりハさうぬ侍るどをちく。まい
つとらをくもむなどのつしくそまえその
うらよハさふつ叔まじうやハうく人づてるう
れそうそこうんかひるうさくちかるとこゝて
までいとりの吉げるうれ人しさたるを。一乘
物の氣色そし人でげめやいとみぐるしう

けしきんなるらんも
かの揚雲といらふものさも
人のわか君くらべられだ
なくて対面しすめ

孟 侍るめりとまかり
侍めりとて。りやのことそうらおもうて。しねの 細 かの君の侍之
侍のざまはいまなりと。女君はのこしよくらうと 孟 対面
いとくるしけれど。人のうへふようそしなら 細 中君の御侍之
えんなるむとみいかにしつすゝくれば。物うか あるもいふおもきやうられど
げにもこうしぬさりいかてしのめしまへりいと
わのりよ何ぐ〱りのわすふれきつひの昔けん〱れる
やゝそめまへつもしうつ。まげゆきゆひ出しうく。 あやこの初瀬のゆうなひ出まへ 薫公 孟 大君の
ゆくしうれしうてうちくもそんら志給
つでもとゆるよ物もいそれど。あるひつくぞ空
え給こゝよるるくおくまいうするもいとつく〱
てもりのおさこまりま丁とすらしとりれて。 おいかゞ中君の
別のうれしくちょうげはらうかゝる〱(?)

かいかねの君とそのうへ
おかねの君とそぞうまろ
くせまつく
むかへとまえへくろいてもうちしう
中君のかねとそぞな
きさまふいとひそ薫の御くし
おまたこゝとやをそうしぬ
細 中君のふくうかうと
いふ業うれとも花うかり
孟 かなるの君とやそうか
ねらひまかの年いわの神も
ことうくうかり行
人は〱ひ侍りしうくし
細 懐姫しらう人の気を
給よ人でしとくし
あう〱こうそんちとかし
ゆうすれ 孟 悪阻いさのここ
たゝやうゝわそしるきこれと
人のうちとくしおいかゝそ
なうしれ給いきまもるさき
とういし〱とく〱

別のうれしくしけれ
くらしそれば。いらいるすしとゆかりて。かいかねの 薫の〱
君とのふへせらうかめしゝせてびろうるん 孟 中君の机の前びくを〱ぞ薫の御之
いこゝ志げしとうへてとの給とうく給く。
むかいとうんゝうくいとくらしう給ゝかのとき。
うらるびさそあるひをり給なども。かゞるよ 細 薫の御之
ぞ志ふやをとうくぬいうるれバうくしうとつ
ねよるやむしうバ物けさうらんく〱まそひ
侍しうべ志ぞしてまそくらうをおしうるれさ
てみしろ志うきこおりあうりあでもしそとうし〱給
しでおゆうりわうくるくめそてるうさんせ給る 細 懐姫のさまと祝給之
かりうしとの給よいとくらゝしうて。むしり 細 中君之対 孟
いつうともろすくうしそいい侍る。むりしの人も 細 大君之

みづからまづ主人の
義も命ならまづ主人
のりくわつと人のいふ
とし
これをしらせ
細 ならをせの中ならは
かなりぬが非もしらせ
の私わすなくば孟田
よせたる人の
あつてますますなかの中君
ばかりの事をならはの
まいりし

ばかりかくさこれかさん
三 かわがみよいさぶん
ござりましてござりさうらえ

さてそれはそのしなしがなかんずく主人
のとりわざとうじ人をといひ給めつとぞの給
ふげよりこれをもちとせのはなしぬよとと候
かよはいとこころざしう表すれべこのめ
まきたる人のきうんをつくすれどもかこつ
いつさこともちかうら浅ましそこらうとぐむれむか
しよりむかしこゆかさ海なとどそのほかくて
ひとりまはらえさこるがしらくへ人はみるさまに
をさくありし紀さ海よりくめやをくくぞい
ひるし給をとげよわりくて紀れころだらん
よりとさてぬさりかりなすよふまようけて
細 そ数君のかりもよぞつきをとかれたる人へかの
いそげうかりしかどもしう世中とおひて
すれてやとぬべきさくらひとのこころすくひ
給しとさうべきよや給きん。らくさ施かう
とうらすら侭にそめなすりしひとかしに。
なかいのひじりまかえさもとがるよ為がひやし
よくんずくさめぐりよこてみもうしこよ
をもりつくひてひとのありさ海をさこうん
よつみそてすりさるすりやあしむるとお
りひよかありく給まで。さらしまれのざ海
みはるすびくべしも給しさりそりぞすべる河
よそのへまびてはらのひくきこのつよりしぬ
まござるかされ、はすきなりしさやうまゐか

なかいのひじりまかえ
お大君よんがけしかうる
家入たるどのかはやうさ
らかれとく

かのひくきされつようくぬ
かのひくきるようけて
かつうくまゐひがさき
にかとのかく中君へいひな
かるるやうかすることと

つりとのかつく

世の人みくぬころのかどハ
三 薫の実法なりるとも
思東 若薫の実法なれバ人
のもどくやうなるかハ返女
じといふ心し

さうらんとおぼしけれど、おりあしくもこ
ろのうけても侍しぞ。めざましうしめ
えどうけりのかど、みくけくはりふへくまた
けのしさせらけありなどして、へだてなくの
給かはかんとされけんハ、とめいつくきさ世の人
薫の実法なれハ人のもどくやうなるうれ八宮御
みくぬころの給はするよりにどうかまり
く侍りとて、思ひろやはしくともはりわしなし
こころぐるしくおぼしておかしませとの心
あどうらみくなれとこうて給ふ、うしろめ
ところどころさきんハおかしげにと思ふハそれとも
くおひ出しつくありしと人もえそひ
めべきまでハことくし侍るべくや、年比
細 中君の詞 孟と
さるさまにつけつゝ、みし御ずりともとけ侍し

みしをるをともの侍しかば
とて 孟 薫の実法又心
ぎしの添物なるやうに

まやうふかりもはかなく給
らぬ物と 中君の心これよ
まするぎさへとどろうきを
どのかひしよつけて薫
のこやうのあるもつるなり
なかしぬとく
きうしして 細それハ山
ざとへの供男よことその
まひつれとく
それをかる 細それを
とうれしくたかひ
とうら孟のやうのるす
もめらんじおなるあ
まくれ右窓の給とう
あうくたふしく

今ハたゞれくなどさへ物ぐかりしこうこゆれと
の給へハ、さくりかかおかりを思し侍らぬ御
孟 薫詞之
とも、いとりしことまなかりしよさての給ふ
細 中君の薫よ添かりまへとすうるを思ふうるにのまかと
すかやとの山里ハづくらいそここよから
うしてやしつくせすべき。それもげに浩
らんじなりくありてこそ、いとどあはれまやハ
たひ給ふどの給ふて、可被いとものうくめし
薫の術之
げなれど、うくひとあれハ、ゆりかまくにおいぞ
えつづけ給はんどものうきをた、ちあいうつされハ
そうくらうなりようつみむしいれ。思ハう
細 庭の山なるへし 孟 右の心くきこ
まなきれなくて、山のうこさとぐくくてなほ
のおやめもえてぬよいとしもあやうなるさ海

限りだにある　細　云へし
その限りだにある世ならば
あはせてうきをきはめる
てはなげかざらまし
まことの里　細　宇治の
山里に籠りて本尊など
作り・慈悲ぬねとど
よまうん書きていつこ
ぬらんともおもしけなど
孟　紀伊守のかずくなど
すしにとらんし花
むかしおぼゆる人がたを
細　大君の事也　孟大君を
人形にも絵にもかきて
たてまつりけんとし　仰ひ
うかがひとへ大君は仏
て大君をおもひよせて
るらし又一説に昔も
さ人を人かたに作り
絵にかきてあがむるに
似ることし香爐男の
小の遺恩も唐の事

しそうなるまくるも、うちつけにものゝうう　中君の心
ちみは井きさらぎ、いつきよむるまどいと　薫の詠吟し
おもひやうにもむすびて作り。　薫の詞也
などこの里をもあまりうさどうの山　細　宇治なり
里のわたりに、わざと寺などはなくとも、
むかしおぼゆる人がたをもつくり、ゑにも
かきとりて、をこなひ侍らんとなん思ふ給へ
なりにたるとの給へば、あはれなる御ねがひに　細　中君の心也　孟　中君の詞也
又うたてみたらし河ちかき心ちする
人がたこそ思ひやりいとほしく侍れ。こが　毛延寿
ね　金をもとめて人をかくを云、金をおくらぬ人をばあしくかきし
もとむるゑしもこそなど、うしろめた(う)
ぞ侍るやとの給へば、そよ、そのたくみも　薫の詞　細　工人也

墨せられたる白氏文集の草堂記にあり又漢の武帝の李夫人のことを似せ
させて甘泉殿のうちに絵にかゝせ給ひしと
文集にあり又李夫人の本像と童仲君に温石をもてやうかたちをつくらせられ
しとありとおもひてつかひ給ふ事にや不言不笑愁殺人といふ句
みたらし河　細　人形とてつけて罪をはらへ流すも　細　孟　河の事也
し　恋せじとみたらし河にせしみそぎ
のうれし　大君のかたみにおもふ人
何にかへてか川へ流すをば思ふべき　孟中君の詞　人形を川へ流すをたとへ
ての給ふ事ぞ　孟中君のかくの給ふぞ人が　師
みぞのけがれをもつけてもやるさま也
かくいひなすべきものから　嗟　細　孟　又孟の義は人形の人形をも絵もかきて
の御ねがひにやさしくもあるをかく言ひて
かぶれるやうにもつくり給ふ其人形の絵をも右大君のかたみ
ことの心をさとりたまひて
こゞひ　昭君がとこ(ろ)をもいふ　細
てとおもひ給へる事ひさしきにありてたる　孟まへの尋ねも云とあ
昭君がこゝ(ろ)ふかくおもふ絵師もいふ
細　昭君若贈黄金賂　定是終身奉帝王　江相公
不言不笑
そよそのさま　江の心　昭君の事也
おさまり

花ふらせたる　細　神変
と観音の巧ありたとえ
孟或説云ひとのたくみ
わりそとよ花をふらせ
より木冬抄　嘆　細　そ花
とくるあり云々　此

ゑしもいかでか心にかなふべきわざならん。
ちかき世に花ふらせたるたくみも侍りけるを、
さやうならんへんくゑの人もがなと

みさとす前也
いかやうにもうしろくおもり
よりて あ 薫の法師に童
のみとのすふかんなこしく
て法師のすとひし人と
て中君の近く来る也く
いとあやしくさなひうるまし
さらすけ 孟 薫にわうる
へうに給るとなといへかさ
孟よく人花鳥に細 君
のありとひ出人なてん
うさのつあそおもしろり
昔の人乃けつひ似が
よひられがたくうしろ
ねらひうしまひて薫の
手 書よむつうしも手を
らそまんとひの欲へ
ととひまいれく
いうる敬れてうらふやめそ
是末何となそ薫は也
おふとやめんとてとく伊勢
物語よ我るらふやめ給
へとある詞しみなし川の

手ひくせよおもしへ
細中君の詞く まわうれ君
のすとうかうあし給
ふり
三 別勝のいりうとく
うくいそふやかじなれど
よこかけまさしを似ろても
つび 八宮のふくくさおびて
毎にへぶそし人のすうれ也
さ何にうさうりしてそ
法師の中君の你うえこ
うりしるすあるずべし
うすくもしく 細 中君の我
身すらんよく 大君よ似
ある人あろしくく中君と
ぞさらみ人くへ大君
よ似さう元えつねより
とりるよく 孟 中君と
姉君の形又と薫の宣
へどさふへ人るそさ
もありくゝ似ぬうしとつふ
よ此法師へ似てうく 一嘆
いとうしもありうしさ人
のいうつへ 孟 故姉君と一勝

さ夜うらざ夜よまされんかこたまこよし
とおりけを給ひてしれのいとくるかげあるも
いとおしうもてうつしくそていふをもうします（細 中君く）
まよりて人がされつるでまいとおやしく（細 中君の詞之）
ぞひるもじさますとてそないでまいれとも
のありけるひのここしるうしきをいでくられ（薫のうく）
しくあられなく何ごとなくいふまうれ（薫詞）
本ゝしれそてまいりまでとくふまではいて（中君のうへ）
かうさくそひすら消じくいくさ夜ふし
てうるふとやめくなすへうへんあるらじ
とさんぐこれちうさ人のおもりんとの南（細 中うなく）
いるくしもうをなくりけしなしきつりし（三 中君の身とうくするとかねよえうせとそうるぬ後く）
しづかい世よおりしむしまきへうりしんへ
異 とれ夜びく我さるうかうけ也してよるを（中君のうへ名しし）
いづかうしとくくいそふまずなれぞすうく
しらつまえよさしもなまえへひろひ出まうん
とぞ給しばさい何ころさうりしてそお
やしかまぐむじりしの人れ似なくひよかよ（大君とうく）
ひうりしうべ袁よ出かりしるう給しがかてこ（中君とそ）
みじらう出りおりしの給めかい中くなるよ（君のとてとも 薫のあふとく）
るとあさおうしうそてなるれさうとるを
人みる人ぐそいひ給しとういうしと治
みあり沢人のいてうれさいあうかへとの（細 うへの心え）
給とう夜うりうし中まてうくさうへさせ（細 うへの詞）

そもあらく人のいふらく
御らんひさうとの事也

あけくれさきさ海とし
そせまほしきり
師 八宮の家ひしくと
中君の御おもひ 八宮の娘君うらみとも
てまうんげとうしろめ
たげにおぼしく
くびらうこあれて
細 大君えおとせども
あさるるハ中君の事也
程の事ならず

へあれべしそへば、やうかもむつびさくしら
すゞ光んおほどかうかはそぐるをうまさせ給ひ
ざらん、かのまへだ、いふめやそのゆへをもいうかけり
ぞんしくをおもわれ侍しれ、りのたのむる
きあらさ海じもかく、せよおちうとまうり
えたくつんとましん事を乃く、うしろめ
されるよ思ひしらしるをと、ひ
とりわきあはれめてたひおされ侍りよまさ
あひるさしくとえらちえて人をとまつて
んこそ、いとしくかしうくれとの給ふ
とく事よらかの世ひくねすぐのまひりん人
の心のおかさにつくとうもりかるかへし
もしつまんぶかくんまの給ふゆかりよえてと
まりてうらろりかくとも（？）れかしうへいひ
そてさせきてうくぶらぶ给へとさ
をずまかるつりつてえら海うかもるさ
うあるそとるのむしと思ふとんあしくぞその
まうりとはすえズ久れどらうらうへし
とえあうしてや、おさあまうりてくれんとと
マきもあべきろるみんしのまへ、世とう
こなうかとぞ、おのありハころのよはころの
うざりもて、えぬべきと、いつきそへおふ
づきまへおもぶざるれど、いとうくかくぎさめん
うしるさきりつとをしうれ給ふ、ひくくさの

細 中君の御詞
中君
孟 浮舟ハ
浮舟

あふくさ 細 蔵流（？）殿ゑ
じろうらべしとし（？）
まりきしうすかき（？）
まとつましし
ささがるさとうてて
三のちうらすくハさまが
ぞいまうて思ひとく
そのうちうしハやしつそれ
と 孟 そこかくハよ（？）ん
どれどもらうしくハ志
らみす又心をとうりや
と中君の細し 師 ひとら
のこがむまくめうてそて
いひんるとさうぐうり
中あへ
世とうてるうま 細 李夫人
山ととり楊貴妃のるも
孟 玄宗の楊貴妃のあ
しれ 芙大君をとらえ
ひとつのねがひづりよ
いいへ宗おうまこしてみと

いでありけんこのねがひ心
うちうちハかく人々をおもひ元
て宇治にすへをきて後来
の物を思ひもすぎにしハぞ
ハくよく
らうたかれと
河口経からぐるしく也ゟ
るなり
いとをさきをも不よ年とふ
抄此菩薩ちかりしハ陸奥
ちかうとさだ付てそでし
てありけりしや
いとうれしくなりけり
自分の身を常陸守の方
よおぼつかなくてよく
すすとられへしとなし
おのがうへしかべりや
三 浮舟と中君のかた乃
ならでゆくゆかりくか
けしきしも
私まうしん 細やまの里の
なりゆくいとる所にて
の給ふ 孟曰
まうけすべて 細 薫乃
んく中君の事身をも
のがれんとあるべく也
あやし
又おもひまゐるにてすべてと云
ふなしとしもきこさ
私薫の御心の中と中君
の又知りまゐらしせも

ねびびとなればすゞしく山里のかくれぞ（盂 宇治にすへをきて…）
人にもすみひわびたるが心ぐるしうなるよの
給ふをせうとうつりふよをあつかひても給へいさ（細 中君）
やかて人の心ゆかしとあやしくも給へる（の給 八の宮の御子より…事）
まぐへとりしこゝろもうかひとくら（口）
うかれど。宮人が君のかくさせしめ給ふいと（姓）
かしきまてそうくもそてていと大ごまな事（盂 当…之）
じんなるも、母なる人のいとおかれいにうる（細 自分の君のおへ中君のいく事之）
よ思ひておぼつかなる物からしどろし
かれくきこえつる。でも、よりのしろし（名をよられへ本ごし之）
かりなのうめりしかへしや。おまにとゝもし（大納言がよにあなる況かひしや）
給ひたりはさらにしてそおんへてし。されど（自分のを）

いつさ御まりてあへんしらびくめりしよ。
私よすまんへいとこゝによそまにまうそへおる（これがすそのあれそうみまえぞとき之）
め。ご御心ぐへいてそゝえるそうく給。さりげ（何となくて）
あてうつりのゆきこえ給をいとくちれ（とかくり）
りわざまへかれど、すすひまえ見とくるいつすげ（盂 浮舟をこそくくさく）
まことすのよおかれなり。かのまことしれは（薫などにくしく給中へ八知るぞ）
かくさぞまへるまのうくまさつよつしられさ（ハ中君のさひなざしよと 盂 顕證也おもハなきと）
さ海よへえりてもし給ふあと。又おりまへる
よゝそえこしまんなひかさめれよ。薫もいさ（中君の心）
う又もりと。らかはく人、めいとさこつうかて（細 薫をもせよりてへかえうし）
くをくますらとあめくつうあぬまれは。
まろく君へとつりきへ花てえ、どかれてく（薫し）

らめしうくちをしきことよ。おもかはめんうきも
あさき心地して。波のこゑも人まろかれ
ばよろ川よおもひみて候えど。ひとさかりよあ
さくらうゑすしんすてうすしざらごとおほく紙ひとこう（中君のあとしとやうかう）
まへわづらはしもあひくらべんかれはわらん（薫の心）
じ世して。つひよりもすけさぶらうおそ出
すぬりくのこととすりひてはらじきえうらん。ら酒（養 薫の我と浮舟をすれこ）
しうきあへりるはうもしてうせせこくこれ世
のりぞれあうまじきはまふうへ。ききてうよ
おふんのよるわざとはもとへりんあて。おわ（細 光経）
まらまんじうろうとうれはやわらか（まへ薫へ諫せさること）
しめんのくもちくろやをとうかうまじ。れ。

ろうのめんのことなや
もうちまし さこり

戦もりうすく出がしあつくそ。あそうりぞろ（浮舟のこゝろく）
すひつる人ともいりてうへ海しくもうえ
おぼつきさえりのさえしるすれども。うしむ（薫君の心をひそうもふく）
ようしうはおもへんまで。ひとのかいふと
あしらでいらうかしこそおかへいれあざる（浮舟のこゝまでかくうらきこえずとし）
よそあすくちよはひらころもうくもて。宇治
のこやとえへしくこのかね何ばいらくむり（細 大君のすと）
とそくたるらちしてもころよらかそかれ
だかりの月ふたよ日のかどよおりくらいぞ（こゝろもゝり）（宇治宇）
あへ風のふ吹ありへてんもどうあしう酒（のきわし）
しきありめのとのかやじくりうおかく人う
けもこえみてもころよまいかさくらしかし

ましていとおそろしけれは
らんれい。孟 蓋の奏とめ
せさせて弄よりならむと
てあきらもまつしぬるえ
おほ直ち対面ありてなむ無
けるかうこえされど弄
まりて又若しきなぞ
とこしめりとぞし

人のくしそ 細 弄か詞
八君白衣の泪をも衣を
秋さまかしのはふそ
あかしく 孟 大君の
中君かことよりのと思
ひましはのこゝく
秋のよせるかましてそ

さうざうしくなりなむ。弄 れおほめくいとく
孟 諸本よく
これハ涙くもりにおほえなびの事ーすさし
細 弄かさまし 孟 さまおほすとより 野月
出てまいまゐりてうしとくれど。かゝりしてハて
物そろしけれは御運ハつよしくあまんとすめ
細 蓋の詞し
まいるとこもそいかまなむめあはれんとやるに。
大君のすゝめくし
物れしらるの人もなくさ御絵もこゝくん
まいるんそかくもつりかくし月のれと
て涙をひとめくけそおかなすちよ。老人ハい
弄 しびく
とさまし比をさもあへど人のこころふくあ
いさく御とおもわそめりし比のそくそりしと。
物りひまへいつるよせてもぬ中ふること秋の
比ハみめしくてつもうかわし給てけげるよの

されハ弄かむしへりける人のあはれ
けまゐのなけかせ 細 中ノ君只今ハ六君を
とぞかり

あはくにうん 弄 瑩見
君と中君とのかたり
かけるの詞と

この比の泪あのかなるとく
弄 白玄かに六君のおかなきる
ふりゝくのゝみかなくて
かなふかしきさすそえ
されとうらめしくけけりハ
又くさとく
弄 六君おかなとして中君
のおかしとかかすいなす
しとこし

細 中ノ君只今ハ六君衣物をひとしのゝくなるを申給れへ理し岩合ちぎり
大君のく
かけりせまぬかしと忘かさ世中のほあり
涙をおのくるうけ給らもを涙くよすへとる
孟 又蓋詞
こゆれハかくおかしくらもう かるゝも。なかくふ
かくまれ八宮そ
かたれありとく
まかる代るやうそあかとおもらさるすぞ物が
細 秋分蝶らなしかうるれそ
一人也しくとくし
しちこのんそも。けつおやもちつやうに物
細 白衣のくし
かすかれ。このほのゝ給ハなまよりされて
そこのつゝ四するれさされとこうめくけりれ
孟 大君のまし 細 涙絡の詞し
こしらえてあかさありかひてよ。くむすし
細 彼も立
れ宮よの御ゆめかなのことそゝられも
かる世とし
のがれぬかすがうしてくれさされところかでは。
れいとゆかひなうとれそても。まことなる

さ日 細 大まの一廻忌
なり。事之年とりふ義
不用ぞ 哢 大まの一周忌
ことおけまくの事く菩志六
三昧の十月こゑま志う
られおくり早菩薩書ぐ
菩志の式四ゑれハ此二周忌
八早菩薩書 のとし

まゐりて。例のれ法志日の経仏と
けのこしたなしの経みぞてうんりく時ぐを
嘆 此示とゑれハ志ひ出うこと
のまうよつりそも。うひるさとものやをそうく
粗 ん。ありいとやくおさとこのもん殿とか
お 法閑架のちの人とりて給ぐし
ちそうの山寺のうくつしるよ。さくたそんしれ
ん 粗り し 粗
お
堂し
まるうじうハとくうりしめてんとのる
ひらくたうりつ川らうとも。そうくだくうるさ。
あるく。さしと先くさいでの経しゑでをさせ
孟 あさり相 お ち遠立の功徳をあさりのとし
給をいと。たくうときくしくさて志つれ
細 八宮く菩志の人
むうしの人乃ゆくおうれさてまゐるよ。志めつく
つし給く人席さいひきことのさん ちうまけるさ
やうくるれどくその法ろうぞしまうらくれりこ

その法ひとしまらくの
孟 八宮のちるかし八宮ハかりり
ありしくり。ちこ乃みしく
とうりうん人くと
細 古宮も 姉君達のおり
ますとおいましてもるを
よおほしへさくうのとをひ
うづらひうひつうゐ道
こくみうし寺よ
お 此古宮の此みぐう
ハ姫うきさしたり
志ん殿をこうまひて
孟 渡殿とちるまつりの
て粥うしこ志ん殿と他さ
まうれしくし 佛志ん殿
とおくうの寺の辺にう
つて寺とるまんまの
らく
それをつくこて 細 河海
よみくくり宮の人く前
の弟子と存て仏名よ

よはとくみぬへつく 粗 り けげんを。よまうりぬハ
人くども粗りやりて。えさえくとききそあい
細中書かし
まりてまん。いる ハ兵部 ハ宮の本乃をこそ。
孟 白宮のうへらし 此示ハ白宮の御領かと
ありまへあれば。のえ乃れの事のやうとも。ひつ
も此ゑへうしと
へくなりまうりきれハらてまうし。寺 ある
うえてへおんまうべし。らくまくそさを
三
えせでおの法をもおもうりょ川づくちらく。
嘆 おえ世ハときのき
けちうもあれハちうぬ志ん殿とうちうひ
てごしき海みそとつくうりえんのちらまそなん
細 おどうりを算へぐ始とし
の弟子ハどうき海うい。さ海まいつとをうし
こうしてうくされうるなうり。若わられをま
されしろそかうでて、をつてこそて、お 粗 うしこれし

此入しかへてくは観音
勢至因位の菩薩のうに
て二人おはしましよ
継母のよめおとろされ
それより観音を
頸まかけくる。けさし
がつゐて佛ざう入りて
経まておりしかく

二 観音勢至因位の事

出家だにおしとゝてうきまへん
殿とそりまくとときまうで
かずふをつうぞおゆるや
うのうとされとえこし
てきまなりしうつでかね
を捨て仏よぬさかうこと
しくそもし

仏の道とをへの事うよ
御寺とちうさ母もこと
しく 仏後なども法令
あらくし

ふびやうけて侍る人をも法のばちくらうかゞみん
おくふかくゞのおくろをたてつゝおもひ
じ事の心みちもいり侍つらよりろごれもん
数をかゝんとろよつけてれころろござさ
おつしまうすらん。ひとつよといくしきれず（細退之玉記ヲ之）
なりおちて後世（のちのよ）のれまくめしろうすゑさて
ともなりかいそさつゝまゝしともべしと
まこのそろせれえしひやて作しん田役う
け給て地のゆんまうりさしんくく二三人（盂大工之）（盂ありさま）
とあつりてご坐りるかくしとは、法の出を
人へのまてまつりまつらを侍しんとか
（細 莫の定めすなと）こゝくのとりひさごめてみをくれん

御けしとまうのちうよろ
しそかれ、殿まの法指伝
を場所因縁のちるよろ
しろまらて

つりかへしてはのちうま
こと法め指りあうまで
も弁が廟の方にうり
伝へしく
法まうの人めして
卿もうす抱あらば法
左の人しそうちせと之

めでこのかうのししがちおもひりのはらん
おもよまんとうりおど此かせ侍よりうれ（細廿右のん）
くろれあれいぞの板はくまりかぬびぬ
びぞりこそいみめしおがしくうらめく
まうてみ侍へはかしけをゑるるの寺にう
つてくれいおま君のよこえひのくろと
ありいとちうるけよすまるかとも義ま（細弁よう）
いろよしてもくもしんとこまゝこのとん
ちんはえてゆう魚てさやうさつりいぞん
かどいふのらうる抱しまへ京の宮よより（細中君の弟之）
まこさろへき抱なでおらば法さうの命めし
ておろへさんやうまりのしまへ六しとまめ

今はとてありしかひしかなきま
孟 柏木の今はのきざみに女
三の宮懐妊の事を若
せられしことを身のやく

みの御世より 細 今薫乃
あまりくらくなれ給ふ
柏木にはよく定めつくるを
かし 陰徳陽報なるべし

さこたちまへとりかへしひ給けりかくかゝえ
くらさゞこすさまじく人をあまよりうしろへれ
名ごりみえおもしろくねじよりもちらくみせく。
むかし物がたりのことゞもきかせ給ふ故権大納言乃 細 柏木之 孟 弁の語之
君の御のちの御こともとかく人かたきまゝなやうく
さていとこ由やうまゐの母。今はとなり給しかど
よめづらしくかいしまきこえんはあるさまと。 細 薫の誕生の事
いふかしき物によひおもしきせ給めりしれ
かくれなきものゝかりひとへいそらるゝようくも
うけ給へぬ世の心たふようくてこなり給 薫之
おぼえんかの御世よむつましうつかうまつりを
ようのさへの御ぞうかしく給ふられく

うき瀬くのことゝ見給
へきし 抄 柏木入道云
君ならなみだもし

ともかくもおもひまへ人さかれ給ふこく
ろうき命のかぎりまでうつくしくのこる事を
見きえへもさゝし君給へまゐり給ふなる。いとく
づかしうらうらくなる給ふ。まめなる時 細 中君之
ぐはまかりて見まれけれ。おはつかなくきえこ
れんとふきしめかりつかふよおかう御ひいでそあ
るなりおぼしの給いとそあかりく給ひれど。
ゆくし紀身ゆくなるんおほとさこ給ふんそう
よいみそえへまんしまかしき人へとすくな
マふめくうりなきこころ。故姫君のれて 孟 大君之
まじきもことつきもせ侍ぐらしひの御おりさ
備ろどうしてりて給ふのおりなふとの給

ものゝさいらん人の（細）う
とき人まどはへ（女房たち）ぐ
しうりへしらひまよ
いへ（物語のよと）（弄口）
我りハ（細）うれうよへ（なき
けなき）しく西ハえ
えてやさむべきやうに
しとまつり兄弟の心を
気合てあらうべきく

きみろの事（細）中君の
わのうようなりのひとき
人の（細）ひとりの心
女人の思案のうちおうて人給
わるかしとしかぬをなさくハ
薫の給ふへしに思ふ
やりノ
故宮の御こゝろうら山すゝも
思ふわず　其うり浮舟
のすゝを薫の思ふや物
語也

あいそうてわつてたしく
お女子（ヲンナゴ）へ浮舟をされ故
よ八宮のをさゞります

いられすみだれいろとみくもなくする
こゝに給ひつるうりあさしとつきなりく（細巨之薫のこと大君のこと）
なぞらへまいらすれどこゝろしくとく
ずくなくて御物かくおりうそゝ人の御（細中）
らうたく人わかれしのいとゞとふそ人給はぬ
の（君のこと）かれとは今をとつまめり御物しらん
ゆかうなら人の世のあはれたくこすくちそ
すく給ふべくこゝろのし給ふめとも我ゆは
いとふかく思ひさけくしとへえてやう
でありてんとてもさひきえまつるに
うらは思ひなく給ふて御物のうちなて（細弁の君）よう
のりしとおほすかけに御ひかりへ給はり京へ
この給ひんとえあらう給ひしへつく
よらけ給ひうしるゝのとかなうり（八宮之）おぼ
のまさらうに御山ずゝも思ふのうとて故（浮舟の母也）宮の
うせまへうりてちらわりたらう中ね
の君のかくふかしひたゞらうのかやせな
どもなしうハ給ひしざりたりとやひし思ふ
ひくなう給ひさ給よ物の給ひせたるを
ありへ（大君）給ひしうりたるよ（イ女浮子を）とんなごをおん
うちて給ひぬとさりやおもむしと思ひをこ
（明八宮ハ我浮女とハ思ふかなりくとも）
よのありたうしるよあいなくとひくうし
うちのしたやうよゆかりなりて（孟中ねの君へと）ようとも
（懐妊ハ浮舟之）
けらんじいかとしと給ふさりかりおい

ひとりにまかせまいらせ給ふよしか
三 それより八丈のひとりとて
よなりたまひしとて
そうしてたまひてえさせたまふ
となりにけり
三 八丈の厩部にまかせ
よりひかれはれば中納
の退出しまうて

のちの世をかたらんなれは
此八丈へ尸せしうどの評
答ありしとそ
まそ文ひとつ。
細殿に陸奥守もしが
今ひとつにありて
ぞれりけり

すくそのことよめかしこうときく。やかてくれ 中納言君
わらさひとつにおりしをまひよなうとくし
しまうくねりひてえさふかしかとそなりにける 御前の事淑景
かくんちのくわうこのめよとおりてくつりを
みなと。ひとつせのかりて。その御たちつまれ 淑景舎の平安の中宮
し給のしはまとりのもわのかつしゅうり
かゝと。ふくしめしつけく。さくよからさう
そこあるべきさこしみとあらひとの給を
せとまうらされ。いかひなくてへんなけさ給 中納言君の
ひとかさそてまさひさちよたりてくらり
給うよきうか。はよしはとこみもさう給 中宮
いさうかは君のかりく。うのゝ御めなかゝ

いとくしゝおすひつぐ
まかりすしさまり
淑景舎のころしくゆひおか
ひかりうく書淑の事
かりくよ更れてまられ
るのうすしまとく
みよさんへかきつけて
中宮のうさ母よりく
中納言君八舟かひとこめ
いろり
ひりの法けりひよくけそ
あれらん 中宮大君よ似
ららしさくぬ出ふ給
んとも
うぞかへあくぞりされど
八丈の佛よりへまちて
ねど一向にかけられ
ねんまらんしく
はまうりよとまお有り
おらんつわそよ
宮淑へ淑景舎のとよされ

またりうろくしらん御のまて給しゆうの
君のとしいてくらつうりよまうり給ふらん 中宮淑景舎
しはとらうしくはひいそすまふか。あれしし 御けしき
さくしさのとことそ中なろいひよさへうさ
つけくうんさべめりしうしすか。くう 細蓋の
うさくわきつめかそ。さうへ海くしまそ
もおかんうしみかやとまりふらいかくさね。
ひとしのれけりひようけりくもみれさらん 蓋の何し
人はまゝねらくよまゝくもしかつまかし
さこうちのあかとうかぞゆく人すふざりけれども
みなかちうさ人よこそいおるすれ。わかさとは
すくとも。はまうりよとくえすふ御りあらむ

まゐりてまでは薫のながめ
しとゞめぬをしく
ちく君く君は母の方
細 薫君とりとりて浮舟の
母中将君へ弁がいふ一義
なり

この君たんいのそうの御れて
うよ 細 八宮の御墓へ浮舟の
孟 八宮の御墓へ浮舟の
まいりまいらん也

つれ〴〵とよそながらもしのび給へまへまで
ぎりの給ひとく母君は故郷ふるさとのれめい（弁尼 こきみの）
あり。弁もえまれぬあらしひとよ給べきを。
（母君八柏木に弁八中将君八宮の子や）
そのうへはかくよ給りて。うしろめたへ
まゐるゝれざりきさひつゝけるもりたいふ（細 浮舟の君中将君の事也）
うしよりさりしいかの君あまんなぞうの御れ
ところうまゝまゐりむしとの給かうさうんせよ
おぼしうしうどおぼごこにさしもへてはとく
まうどゆめり。今さうしばさやのつむでり（細 さのつのつかそへ 孟 日ころ思へ）
うつのつかそとさく
うらぬかとるすうつゝ給んとらる。（細 うかうよどれいさ）
薫の給京へおぼえそ
あけぬをまへへりかんとそ。しくさんれく

やまよくらせまつかめのぞ君はよわ法師
らあさく君のげどどものまゐりよとて夜
あどりよりのとまへかしてふんかぞこさ
とゝまるあれどうつれよつひしも
ずりまれ八身のわざよへいしめやまく君め
やうりそであびとこすひわるあがくしれへ（細 京気くらひなし）
うれつて吹とくとしるよ給るまぶ気（孟 世のうき給も）
をあくらりあさらとみぢぞふとふ
りかめくもえてぬとゞまりてどうえ
をえりく給つぞりし気きあう濡ま給
やどりかつさのもぞめぞのきらう。こ
ざれあどくもうしひさうしを給てえゐへと（孟 中君へ）

ひゐるぬゆえいそまぬ夜
孟 弁が御様あり申敷そ
ときかとも薫の御ぐして
しそめぞたくしてとを
うへぬうとも

とゝかてえいでまかど
三 懐旧のそひての意
とよ久さのりそがれぬ
るり
さゞれあし 細 薫の御歎也
ろく 孟 薫の御歎く旨木蝸の一説
異又云 薫よりつきら也

のゝのゆふべ蜩竹冶ノ切
斑身ノ小蟬也 師細に同
やどりきと 細 前の名
おもひでずはさびしう
うつろひたる葛で薫
の一生の心ありて也
く宇治の宮の宗旨にか
さめ寄耳とゆふごく
いづくとも宮ざ
ぞし 孟同義 師つくを
やどりきとは聯て
毛詩注ニ云葛也寄生
とあり思人の古郷を
やどりきとはとかくの
あれはつる 細 あはれなる
うけたまはりしと思ひぞ
一夜とまりしこゝろ
譬ば浅茅を思ひ
あらぬと義あると
なり
南の宮より 細 二条の院を
さりがたきにもかの院より
あらん中にいづれも二条院
の御事なり

峯の朝霧 細 廃の宮
峯の朝霧晴るものをお
もひつゞけぬよの中
のうきにそへ字の字也
ゆうしとゝてそれ晴
くもしと 孟同義
師 宇治山里の
事をいひつけといふより
まづかくゝとりまぜさ
せ
あくもつれなくうきまろ
三 師 よくもつゝまずかゝれ
くりかへし白はのすゑに
師 よくすゝむ奴見
ことしいはさやあらつ
らん 細 葛にかく孟とこ
しかるを此のありつる人
とし 師 かくは白のお字
細と知るべからずなく云

をかしくてうちせ給
薫 やどりきと思ひいでずは木のもとの旅
ねもいかにさびしからましとひとりごち給
ときゝて。あまぎみ
弁 あれはつるくちきのもとをやどりきと思ひ
おきけるほどのかなしさ。あくまでふるめ
抄 祖の作り給ふ
きたれど。ゆへなくはあらぬをぞ。いさゝかのなぐ
孟弁
さめにはおぼされける。宮にもみぢたてまつ
孟 中君よ薫の心得
れ給へれば。をとこ宮おはしましけるほど
細 わかり白文にまゐりたる
なりけり。みなみの宮よりとてなに心もなく
もてまゐりたるを。女君例のむ
中君のこゝろ薫の恩
恩のうやあんとく
つかしきことにやあらんとくるしくおぼせど
とりかくさむやは。宮をかしきつたかなとたゞな
細 なくなり
らずのたまひてめしよせて見給。御文には
孟 薫の文奉る
日ごろなにごとかおはしますらん。やま里にもの
し侍りて。いとゞ峯の朝霧にまどひ侍りつる御物語
をもみづからきこえさせんとてなん。寝殿の
堂になすべきことあざりにいひつけ侍り
箋 彼は中君の御ゆるしあるべきなれバ
にき。御ゆるしありてこそ外にうつすことも
しはべらめ。弁の尼君にさるべき仰せごと
細白細
はつかはせなどぞある。よくもつゝまず
かき給へる文かな。まろありとぞ思つらん
給もすこしはげにさやありつらん。女君は
中君
ことなる事なきをうれしと思給に。あながちに

さらそもおかんしく
こゝろにくいうきよの中
細 別の山をわけしめ今は
つまもなくこそはなれの
細 妙し 竹内も入べき
のかありけるから人巌
の中にすまむとうの世の
うきことのみきこえず
ん 孟 ここちにとえれ
の中をわけしめんわれ
宇治のゑみにすみまれ
しきこし 喉 篤

のおとよりうちしきわたしてうちなんじて
かぜつよれさ風よろづのつゆもゆりしつべく
細 白のかくのこまやかに白衣ハ又ゆ中きこゆ
かしきらうち聞えてやよそおろぞ風よ
中君の心也
そむきまつりおまへてうくさしく今をわやし
細 かすかの宿也
かれは山里の水おりとのうしやましくも絶
細 堂にまうでてまうでしとし
わかしこはげよさうふらくそさうくとな
まへしくよと行くまにいへ身の中わりと
宇治の宮也
めんかりはおそしきろまうけとも作るとい
ふとききこみえあらん
かふとさ消ぢきさ風まそうせ沿くぐそろつ
細 とふらふ
すむかれりしらんとし
すらかえんときこて済へやくさうし紀
細 白衣の心也
孟 白のあはうのとかひるに様まゐて歩み給し
とるう衝むつびそ移かとらん給ひたりう。
もうやうそうくねおかえいそれくたうう前栽

のうりしくし
細 こしく事まはすぎれをも
尾花のもくれわうさ
ましし 孟 ここと事まかり
もおくれてとし 細
乃か草の移ろ苑むくうさ
われは出てまうつ神とも
不と申さんは 花
最 うつろはきこしむかう
細 出くさを出のやより
しこそうら濃わき有るに
いはきの出のさみぞうるま
西 ふしもうえり
われは出ぬ 細 うそかうの移
てうろうの文うよりしわ
まどくきてまんおん風
しまとつうきと白の雅
しまつくさののこと死一
碓勤列よありとそる
沈あんる徊鞭よ出ざる
其 気どいあれるの文くさ
鞭よ出うしものうら
なりしゆて鞭よ出さ
る勤列とらふ説 雅説

のかよかぞれのりわりうしくまうしまゑさ
細 と花のこと
しおうくまよくうおかうしうこゑうまよまくづ
河妙し
よ出さしてかえ露とつてぬきこともうら
面のとろうるげようちるひさむて倒の
孟 白の中君とまうでひとの言く
ことするれど夕風そ秋わつれるうし
そよいでねりのやよふうしまのじくさをの
細 白衣の中さ身こし
くたりしの家三げしそなうし紀ゆく
下つるとらふ給ふ母々帝未注
のかそどもよ身すしくすりさ移く琵琶
哥に注
とひさお移つりけうきさてくのうさおく
せとりしかれよひこうしまのへは女君まこて
中君も移あう
さまざま きみう
うよりまへるしみ心くそのをんしも浣し

三 あらはれて下に給をも
思ふらしとはまねく袂
は中君の方より薫を
許容しまねくとし
あきはつる 細 中君は白
身の心乃かはりはてたるよ
すゝきより 孟 白の前は
薫を疑ひしくて、おそ
れつゝ此句は中君よりを
うつされしらるゝを中君
のよめり 師 おほかれく
あたり前栽とありとも
しく 六君へ白のかた
してうちかくれなる
とそり
ゆかしくとそ人へも
細 薫のうへ 孟 中君の
やうにあれこそ薫
もへいかゞしるらめ
と白のえ給へ
うつろひそめしも 細 菊代さ
かり次をとよりかきなき
尾花の袂

花の中にひとへに 細 胡詠 不是花中偏愛菊 此花開後更無花 元稹
あまりしろこ乃はなめ
で 細 西宮の左府の子
にて親王ありしかど王孫
になりてくらいよろしくまかり
代には寛平八宮ありまゝに
れど曲もなくてなりしを
西宮左大臣庭前菊ニ冥
物辞居樹上ニ詠詩前遊ニ
小児ニ詠此詩ヲ教作者ノ
本意ハ書字ヲ兼請琵琶ヲ
授秘手曲ヲ小児醒ム
源兼武之冥地授ニ上玄石上流泉曲ヲ 天
人琵琶とみえたりうつて
しく西宮の琵琶を
源兼武かたる也 師 後覚
の物語今の世まではを
そのわたりは 細 中君乃
御返白詞也 宮何ことぞ心
ほくし給ふ用なりとは也

よろそ給つれど。らいさきに出来てのつまなり。
（細 中君懐姙の時なし 孟 白）けうそくによりかゝりて。ほのかなるさし
見ゆる。いとゞ哀れしくらうたげなり
（中）秋はつるのべのけしきもしのすゝきほの
めく風につけてこそしれ（細 大かたの秋をばこそ）わが身ひとつの
とて涙ぐまるゝが。さすがにはづかしければ。
あふぎをまぎらはしておはする御心の（白の心）
うちもらうたくをしはからるれど。かゝ
るにこそ人もえ思ひはなたざらめとうた
がはしきがたゞならでうらめしきなめり。
菊のまだよくもうつろひはてでわざとつく
ろひたてさせ給へるはなか〳〵おそきにいかなる
ひともとにかあらん。いとみどころありてうつろ
ひたるを。とりわきてをらせ給て。花の中（白 文の詞なり）
にひとへにとずし給て。なにがしのみこの
（三 西宮左大臣有菊…）この花めでたる夕ぞかし。いにしへ天人のかけ
りて。びはの手をしへけるは。なに事もあさ
くなりにたる世はものうしやとて。御ことさし（細 琵琶 孟 絃）
をき給ふを。口おしとおぼして。心こそあさ（細 中君の心）
くもあらめ。昔をつたへたらむことさへは。
などてかさしもとて。おぼつかなき手をゆか
しげにおぼいたれば。さらばひとりごとはさう（白 宮の詞）
ぐしきに。さしいらへし給へかしとて。人めして（中君へ箏をとそくの）
さうの御ことゝりよせさせて。ひかせたてまつ

まうくべうしんとくし 孟人のおほかたくちをしも琵琶の音ハいかくろうまじれかくよどかわそのせと自ハ拙し

女ハやつしろまゐりせさ 細 女ハいかにも今すこしにくやつこうるかたそえみれと 又中君の詞也 此せの叢中納言ものとさやうなるこそ定むれと白比の事也

まし由へど背こそまねぶ人撥し給しも

どもしくおもうちとしやならずなるめし

拙そして、つまはげふく重をも重給ハ

ねいりぐりのるを、届ざそ、まへるそこて

らうられ、みびんろめさりハ山すごいとしを

いづきわじゐもあしれど、うさわりうる

うねことをもくさまてそあれもべて

女ハやつうまふころう、れあんよる

こしくてそ、それ中納言もさごじめりし

ぐうの宮よえくこうとつくそ給ふよ

あうされ中なめれハ、なしまあやうよう

こられんこしうりかけさししもし

ゆかりひかりの杉 くれ上よ黄鐘調のりさ会よわり 師箏の法の事くまへのひびいまうしきさ調しありを調子をかへて箏せぜんしさてうよあつへあふふや 細柱よ手の立柱ゆりひてさうしくされバ南盤渉調よきつへすてし盤渉調ハ柱乃さうりてその御ゆへあらむし 細白氏文集 保等のうさるまとうるひ出し海ふくしそのうくハ律の方し盤渉調とし律平調よあそわへならさまうや郢曲の家よりあ人へ

うられありさ叙よりら ひまふへくも 宇治よれ わろ内之はひ まふざさみるあるぬ今 の比住居をとくし

のふゆりびさりくりそ、げれあるきてくりまの

なせ給へさあそせるもどもしまとしれたり

うさうそ。いせのくしうひあみにきえれあ

てよおりしさ、女づくりのくしろまち 孟白の朗詠せうくと中君の家并とものときえ

ろうさまりく、ゑをひろうりてあくり。 義白文の比子と女かくのよ稀し

わさうてろおそしりなえつらけもどそ

れをこともうされバ、柱よかおかまへをばさい 孟中君のさうし

ちひ人とえも申さ親なりれありさ海よ

まじらひまべくもあそざうしこてわ 細 宇治へ御わたりさんの事也

の比をうまる、ど中さくうう海わしけよ

出がりての給ひとうてそいとうくろくれ

まどさくいひよ以人バ、ま入ごいあまの海

三四日ことまかりて
源氏の二条院にて御遊あそ
あり

やうやうひきつれきて給
て夕顔の白骨をひろひ
入れて六条院へかへりたまふ

やくせいとはこくさとそへもそてまかりなど
さりて三四日こもりおはして御物いみなどし
てきこえつけ給ふよ夕顔の宿にはうらめしく思ひ
細六条の御方也
て北山ごしにまかり出給ひければ 孟夕顔の宿人
いりて御へればあへとく思ひけれど夕顔の御事をわすれがたくのみ思ひ
白の頭之夕顔の宿人
てその日はいかにせんとおもひわびつゝ
お宿所にて夕顔へ白の頭向しか之
あへどもおほくはいかにもそれなんさいめし給ひ
書の宿之
しかりけるまなどにこのゆかんなたへ
細二条院之六条院の御後
くろんさつとくと
さしうなり給ふと夜はこそなど宵の
御物語などすとしてやりそこなひ
つれきてまで給ふはげしきの夜ゆく
うねよ道にて夜半に人なりともいひしかはかりし

三
うしふくもおもひなきつ
のうつりける
中将の人
のんくらうちきさへ御の様
ひと夜のかくと
よもさうらふにおもしきう
みかうる
源夕顔とよんで人くれ
むらくし
にはまものよすがとなることを
あろう 源夕顔のみ集
のやよ御くるもかしと
源ひとへよまゐりたまひても
お白気の御返へよみ夕顔
のあはりすつることこそ
数あり

つらきまつるはいかにもひとつそれはさうらはぬ
すくふべくもあはれにいひてさうらひなん
孟夕顔の事
のぞきたまひてもさうざうしかりけり
おほくれさはかりいつれともなくいう
さりあくさまにかりそめにもこれのよ
まづさこもありかるみめぐさやとゝいふ
とおもふ又さいはひやんごとなげなれさ海
みくわうこれむくよまり御人のそ
細中将之
うくされやよにけるは世やるところなげく
お六条のすゑの事
をあんしけつけつゝしもとにこさと給
ゝうそのゝの花やかなるけるうひよ
さう海しみへてもあつて御そうするかたの女

正月のつごもりに　細 叢元年
霊元の御歳の年にて　五月
次の年のうちにし　五月
れいのすゞしき御ありさま
まふ　細 元年五月より
懐妊も五ヶ月より懐妊
のうちに年五月より懐
妊されて二月に御産な
るへし
うゑ二つ三つせよ　細 事ひ
よめりしたる年に御
すら孟白の字後へかよ
ひありて三年莫れ
ど氏古懐妊そ人く
の系しく

のおはしまししいよ／＼うれしくめでたくおぼし
やらるゝにつけても御身のうへのみそめでたうしめ
なぐさめてえしも給はらず思ひてにし給へ 細二年は書にて
むつきのつごもりころよりいとゞなやましくおぼし
よろづのことゝも思ひつゞけさせ給ふに　白の御産のことをおもひつゞけ
たてまつらんとおぼしけるそらも
御こゝちのなやましくおぼしけるそらも
ほどなくまた御つゝしみの御ことゞもおはします
三 じめそへさせ給ひていつしかとおぼしめす
のこりなくつれ／＼とおぼしめして給へる
よろづなれどもいとゞそこはかとなく
らひたるこの世の中のあはれなる
さらにありがたきことゞもおはしまして給はる
いつとはなくしめやかなるそれにつけても
ども給はる中納言の君の君の御かたへ
さるらんとおぼしめしけるにおはしけるを
けるころおひさきくらうらめしくおぼし
まれながらおはしましてひさしうくおはし
おぼしもえさせ給ひて給はで悲しひて思ひ
のりなどもさせ給ふに女二の宮の御ことを
りさらにこの世にありて世の中ひさしく
すゑのことゞもいかなるみちのいまさら
ひとつたちやうなどしけるはことに
なきしとぞ申しめでたきけるなど
の御母后の御産の
のことゞもさへ御ありさまなどいとゞくも

細 叢元年五月
さへて御服をとりぬ
きて御喪の御衣のことを
思ひ出でゝ御服の御母の服
めぐりて叢へつれまい
らせんの御ことゝ
ゆうくつくゝしきて
三 母女御のおかくれぬれば
帝の御こゝろにしたまひ
とうその御ことも
つとめ 細 御のことり
なさけなる事の孟作

おもてむき細工ほどの事とするなり[illegible]
下向のさま[illegible]つかうまつるべき事を〔細〕花の宴
に作付するを御覧じ朝廷の
ことを何事も一事にくはし
くしろしめさるゝ[illegible]にて[illegible]
ておはしますまゝにもてなし給ふ
法の[illegible]〔孟〕[illegible]しらくしたるを[illegible]
あるにもよし作てさせら
給ひけり
二月の朔日ごろに〔細〕除目の
後執筆[illegible]行ふ[illegible]直物
なるを俗説あり[illegible]
代々[illegible]給ひけりや
河海[illegible]或ハ京官除目
以後執筆直物とよめり
しかはいへ除目以後あく二月
に経ることもあるしと云々
除目未だのうちとを
も又執筆直物とみえたり
左大臣のおほせて〔細〕紅梅
右大臣〔竹河〕にての昇
進よみえたり此ほか源

ところせく、さすがにうしともおぼしかゞく〔細〕
につかうまつるべきといとゞうらうすや
ぞそのわざとまうけもありつゝ〔花〕
られいかゞとも心づかひし給ひつゝ
例のしるれど、そのかひあるべきもなし
この月にいとたゞかけりたまひ二月
のついたちころに、なほしものとかいふ事に
権大納言になりて、右大将かけ給ひつ。右の大殿
いま左にておはしけるが、辞し給へる所なり〔細〕
なりけり。よろこびに所々ありき給ひて、この宮にも
此宮にもまゐり給へり。いとくるしげにし給へば
じ[illegible]

所[illegible]大将をかけ給ふ[illegible]
を辞し給ふて右大将[illegible]
ありし人左大臣になりて給
ひし[illegible]大将にかはり給
しいはれたる[illegible]の右大将[illegible]
たまふこと[illegible]〔孟〕新任
是りてよその[illegible]
南殿の前にて[illegible]
細花宴にみえたり花拝
ひとつにて[illegible]
ぬ中[illegible]南殿にて行はるゝ
ことに[illegible]拝舞の作法
あるべし[illegible]
ことに[illegible]直衣下襲
よ白き[illegible]
経来[illegible]
きこえ[illegible]
このたびの人よ〔細〕大将[illegible]
中将少将[illegible]
招請[illegible]衛府
の下の[illegible]
〔孟〕大将初任の[illegible]

まゐり給へり。僧などさぶらひて、いとびんなき
かたにとおどろき給ひて、あざやかなる御なほし
御したがさねなどたてまつり、ひきつくろひ給
ひて、おりてたうの拝し給ふ御さまども
とりどりにいとめでたくみゆ。やがてこよひゑふの
つかさの人々に禄給ふ。あるじの所にとさうじ
たてまつり給ふを、なやみ給ふ人によりてぞ、たゆたひ給
ひめる。右の大殿のなさせ給へりしやうをまねびて
とて、六条院にてなんありける。上達部殿上人
ら上達部、大饗におとらず、あまりさはがし
きまでつどひ給へり。この宮もわたり給
ひて、しづ心なければ、まだ事はてぬにいそぎ

つぎの中納言以下を従して大饗のことを行ひて禄を給ふ。白文と饗一人給しかさ
あくまでこの殿人の中よりて[illegible] 左西宮記 大将初任[illegible]
右の大臣大饗の[illegible]此大臣のつらさの禄を[illegible]
給ふよし也 孟 夕霧の大饗の例を
六君の御[illegible] 花 頃下の王卿[illegible]親王は[illegible]
附大将のつき所のうち[illegible]白文を頃下の座ニ待しかるべく 行儀[illegible]親王
尊者の例ならず[illegible]頃下ハ[illegible]
[illegible]
一の大将をまうしまで 孟 夕霧の辞退しまひしのく白のわかりまで中君の[illegible]
まつてむしくても暑ぬよ 六条院より[illegible] 三 此事六条院にて[illegible]六君[illegible]
夕霧などまいりて[illegible]
[illegible]
とりつきも 細 中君を
八宮の御娘なれども六君
[illegible]
[illegible]
あの夕霧のこの権威も
まして[illegible]中
君[illegible]
[illegible]

出給へるを大殿の御方にはいとあ
かずめざましとの給。おとるべくもあ
らぬ御ほどを。たゞいまのおぼえの花やかさ
に思しおごりて。おしなべてもてなし
給へるなりし。からうじてその暁
男にてむまれ給へるを。宮もいとかひありてうれしく

夕霧ノ六君のかたへのことく 中君の御ことにて[illegible] 葉子地也 細 中君の[illegible] の為君ハまだし 白也

よべおはしまし
白文の[illegible]
[illegible]
誕生の祝[illegible]
[illegible]
かくこもりおはしませハ
御産養のわたくし白文
なり
御産[illegible]
わたくし 花 まつ王記天
暦四年七月七日是夕女御有産養事産婦
饗衝重十六合破子食七
荷屯食八具碁手銭二
万贈物児衣襁褓各五重
納支佗木筥二合絹白襁褓
使大蔵丞藤原守忠
このせよ 細 碁のかずを
[illegible]の碁を
させて[illegible]
[illegible]

思したり。大将殿もよろこびにそへて
うれしくおぼす。よべおはしましたりしかしこま
りに。やがてこの喜びもうちそへて
たちながらまゐり給へり。かくこもりおはしませば。
まゐり給はぬ人なし。御産やしなひ
三日ハ例のたゞ宮の御わたくし
ごとにて。五日の夜ハ大将殿よりとんじき
五十具。碁手のせに。わうばんなどハ世の
つねのやうにて。子もちの御前のつゐがさね
三十。ちごの御ぞいつゝがさねにて。御むつき
などぞことごとしからず。忍びやかにしなし
給へれど。こまかにみれば

細 産養なれバ 白文の中君の御ことはおはせハ世の人[illegible] 孟 白文の[illegible] 三 白の[illegible] 茂 手 碗飯 中君へ 孟 襁褓 孟 [illegible]

こゝらのかずへのつゝしみね
天暦四年庚五月五日此日
自中宮給産養飾息所
前衝重廿枚又曰皇子
御衣十襲袈五具九条
右丞相記 冷泉院
誕生の例也

細 [illegible]何色菅舎の例として [illegible]
[illegible]

孟 白 [illegible]

ぬぐ〳〵とまぎらはしてらうたげなる文の御まへうるせ
ん [illegible]
ふずくまゐらせ給へり。女房の御まへにはつ
いがさねはさるものにて檜わりご三十さ
まざまつくしたる事どもあり。人めにこと
ことしくはことさらにしなし給はず。
七日の夜は后の宮の御うぶやしなひなれば
まゐり給ふ人々いとおほかり。宮の大夫をはじめて
殿上人上達部かずしらずまゐり給へり。
うちにもきこしめして宮のはじめておとなび
給ふなるにはいかでかとのたまはせて御はかし
たてまつらせ給へり。九日も大殿より

細 中宮の大夫也
今上
白 若宮を云
細 夕霧より也

孟 夕霧よりはさして此わさなど白の [illegible]

よりつかうまつらせ給へり。よろしからずおぼす
あたりなれど宮のおぼさむところあれば
御子の君たちなどまゐり給ひてすべていと
思ふことなげにめでたければ御みづからも月
ごろものおもはしく心ちのなやましきにつけ
ても心ぼそくおぼしたりつるにかくおもだ
たしくいまめかしき事どものおほかればす
こしなぐさみもやし給ふらん。大将殿は
かくさへおとなびはて給ふめればいとゞ我かた
ざまはけどほくやならむ。又宮の御心ざしも
いとおろかならじとおもふはくちをしけれ
ど又はじめよりの心おきてをおもふにはいと

細 中君の事也
中君の男子をうみ給へば
薫

秘かくさへおとなびはてけるぞくや
おもはしくにはよろしからぬさき
これは中君の孫猶を是
と薫のおもふ也
又我のはかなし　抄 又白も
のはかなしとおもふべけ

きよはふ涌くる人ともよいは
おもひわれど姫もち浩き
ものくちをことへまして
あさくもちしくきよ盖の雅
なり

二月

はかなくうれしきもありくてその月九日あま

孟 第二巻 母八歳蓬の宮

りのやどりぞ義つぶの宮乃御めぐみつくしわ

盖し

つるく。まさの日なん大ねまいつま給わりて乃

孟 女三宮

法親王所てらしく八世さをものぞもとく

秋のことはあのびさうさ御なり。おめのこと

ひぐらそいつくしくみてつらはうしづきたり。

孟 盖まえ よりて

さく人のぐしさてまうり給ぞ祝わるをこそ

めぐらしくさゆかさ法は御ゆかしいありなが

らもとさて、はまらくしもいそぎ世給まで紀

ことぞうしとく。そしらりつげよまりひのまふ

孟 法門の法心をとりて

人をおりるれど。おがしさらゆるとしずか

をげしうかりしまれ法はらそてうしうされ

しげりをとそつるめり。みなげしの法むこに

ええる人が

なる人はむかしも今をゆかられどうくさ

りの法世まぐてん人のやうよいむこより

細 夕顔也

いそぎせまるさくひた。もとなすやわり

盖と云之

るん。右のゆくをも。めづらしうまりる人の

源氏の第二十三巻の事

法ゆかしもくせたり。和院らうの菩薩儀

の法をまよるうせまりて。はなりしやつ

細 第二十三之

給しさいまことがのとくみやとえまで

まり給しうげ意しまいてひとしもゆうさ

蓬生の心え

まぬ物とも。紅うひさりしやとの給ひつ

藤裏葉之

まで嫁いげると思ひがもとよきうつりうてしは

第二十三の事之

細 二十三帖母方之

りく人をえてしまうとて三日の秋は大和つよ

いつの世もむかしよりかうれんとも
むかしも今をとゆかられと
細 花るるよみてしり
花 醍醐皇女勤子内親王 通
恵仁云ニ亨多宮と女源朝
臣頭子通貞信公。醍醐
皇女勤子内親王配右
大臣所輔公ニ下略花今
案此等例皆以脱屣の
後或は崩御の後まで
人の事よかりけれはさ
しも生佐の天子の御女
皇子配せらる中かられ
なかりく醍醐皇女勤子
の御えにしくおぼえける
かなり。漢朝には是を例か
ありそれさと尚ことかふ
なり。
とかれまいて 孟 久なる
一条院のみ子とのまふて
藤原氏のこうたのひて 秘
しうるもりひおかく 花

みなさん　孟子百人の名書
の会ほどかならずひとりをを
うらやましくおもひしを
あらその心おもろうし
そのわけのあやしみ八きつらへ
おもひやけるは八ろうの
こまりつうあやまず
こともことの人の智れの
ごとく念ひきて　いふと
もとらしるとよる名
身し
ろんがやう　わりなよ
ふりハさして　やすむの
ども王命をさよりそ
不信くまうりあふとん
よりかとらぬし
ろうよくらよ　羞の好
色をうぬくとせ一へくさ

思へじめてこの法をくれんとせよおやうさ労
まへる人くでけいしよ地角をごとくまてあのひ
やうなれども（孟羞の着ともろこ）の心もんあへだん東ぞひとよ
思ふをじめずくあまくすそれがでの
とハまさらしごとの（孟九人の齊君おつろふのことしえ）やうぞあわりうべく
てのち八ちのぴくよまつり給ふのしらる
もうかとまもれごをさいふへぶ海のこれ
かしてひとつ八さしよおるまかしなかあつ
しもうのま八んかりわうよいをござまつり
給ふとかやうねん地よいと抱うくしせう
てかまそてませしそ世ふんことどぞ労（細羞の態のれまつんこと）
しもまてけしかう母文がハいにしくれしきこし

おりきすきんどと
孟女二の言いまさつうこ
とゆつんとう へ宅
おはそてよろのろひあふ
つき　三母ともて八女三丈
のいりろへまあるさとも
うらふもさうしめて
孟 従ぢく紋へつれり
きんを　寥闻まてて
ていうと名にくし　おり羞
の女三丈ぞろつまうくを
んあきをともののこと
しめりとし
わふろくらしみけるむひ
あそうん　お不速ゑ女三丈
黒亭へ後店のるすのく

よかりしかひりしまて寝殿とゆつり
かえるきふくの給へども　いたしうしけるり
らんもそはかんとくるのおやひくらしと
でかてつくらと給ふかしせうてまわるうひ
あがるあ思ふきんかしの巻どもなども
やうそののちうくうしくあそらし　あか
まりしとさといひおくみかさそへてこうるま
あかりてせあかなるにてろうつひとども
みととさらしぬ　くかじるすくうちとけ
つらひ給ひんとひく嬉かりもわ。みうとど
とせゆれどいんのやうへ八地あしことよりんお
つーおしりの母文の世ゆりこまにいつうひあり

よの出家をあはれみて
朱雀院のくりかへして
孟 女三宮のうへとて出家
ふ御心をしられしとて

さらせさせありける
薫 女三の宮より上へ奏
せるわけなれば御くわしき
しかれてそ
うらやみと見えたる也
孟 今上と女三宮とたが
ひなりつゞきあひなれば
も薫の御事はむつかしき事
しのびたる事ならび出て
当流の事のいはれそが
せまりやすらし

まのわかぞへの 孟 誕生
のへるゝ五十日といふ也

ろうけかゝえまもくゞけれ〳〵しとのゝからんかえ
させあへりけれど朱雀院のくりわきさせこ
のあま宮のれいとゞぶらうしとぶらひを給し
うぶりく（女三の宮）世をそむきまへまど（成坊の宮）御かつらひな
まごともそのまてま（三の宮）うせさせを給へく
おぼれ（今上の宮）りるじんさうしめしつれはのうい
あくまれりくやむでく事されにてろど
すまかさみようぞりをとゞくりてしつる
さはゞれ給ひをくしくさいかなふか
あらむ（細 薫の宮）らゝのうちよはへられし〳〵
薫てれなどもはれぞうらながあつな
給のすつらうましいそかを給文（白し）のわか

五十日儀式ありて餅を
御めぐらしあるにや 河 勘例
あり 河 五十日或百日御
餅事。天暦四年八月五日
儲宮降誕之後當五十日百日
依世俗例供御餅 見李部王記
九条記にも 花 子誕生
の後五十日といふ又百日
日とて儀式ありて餅を
御まいらする也

右のうへやかゝん
細 薫の五十日の御いはひ昇進
かたがたありて又御いはひの
御餅まいらする 孟 今は
いまはもしかりし
し 薫の帝の御年より
昇進あるとかや

ぐゝのいま（今上日）ゝわりり給日りぞへとりりあゆく。
まのりつるのいそぎとゝのへられてご祝ひ（紫檀 桧）
ろりご（破籠）ろじまでまうれつ世のつねなる
べくよはかたきどとゆかりうろづしてち（侍）
んきらん志ろなゝこがねなどみちくたま
くども（紫檀）いとゆかしくめしきふみゝそせまへばま
れどもいと海く（が御覧どもする人のうへ）のこともとまう
せりか身つくろひ（薫）も例（れい）の家（白し）れ物しまさな
ひまよおりいちからのすまやあらん
い海もとしともくもくやむでとるげな
おかし見えひようとえ面。今かさ（細 中君の事也）
まとをもろうしらぶろしもろとおど

これとりしるかひなきもしきはにあはれさてなつかしうそ 三 薫の詞也大君の事なども見れぬさまし

うつりかそさけなるすよそふも 孟 薫の心也三 よそかはなりてもなぐさまでみれるてみふハんかうとし中君の心そ 御大君のかはと見れ給へねどんかうく薫は中君のそひかて

ハかなひたまひし御なさけんとも心やましくて こひかしきうちりさむれどあはれしるゝまきらはしも 色にまづ添ふて心つもあらぬまじら 薫の詞也 細 かりのことえ 御 三光院まち ひいとゞ色ひのかはりたる袖ににそとゝ世と さすへうらごゑかくまゝのそゝるんまさりにたるか 御たそひみくまりありをみてかた となひずらかくさらしれへ給いてあるほど 細 中君の詞也 きはしと見人をこそとめでくく涙のか 中君の みをとりそて伝れなどハのつまへどかべ らりめくさけるまどもふもなくさ まもてまもれどうかしおもんふかき あやく数よせてうて給よそうつかも御 らぞさひ気しれ給かりとまりげくら 細 大君の事也

これもわりありまぬの 御 中君の心也大君のおハせバ大君のすをさうまさん に中二君のすとぞ中さん とうらやみかくとハ中 君と大君との物也ひれ るぞれて物へしとなふ 細 とらとけぬそ゜ 孟 大君 の薫よこちとけまそそ 果すひしハ心もくし きこく 細 中君の我身 自君よ弁給く後悔 の心の如くもされハそ するん給ちとく 私 此 細 の説を心文意への下心 と註しおつ ようなさすひとけり つけて 三 薫の中君へ心 とくらするへまさがれ ぬやすまれど見一句の 限ハ物のべしくかのる ハ薫の心よさらんじさ の中君の心く

物しかりひ出でゝつへじまれもわら 孟 大君の御ことを 八様のこゝまあかんとて あつさ御のやうようしやと給ひと方どうう ひゞりかうしあまことをうぞすとて ハ 世の人めきこゝもあやまちうそうと 物得ゆるみぞいとゞみのうらとけなそ゜やさ すんとせひまへつゝしれ心をきそへいまぞこ とゝよとものしうさいぞしれ給へわづ 孟 薫の御心え らせらにゆづりきこえてやまんいだろう 中君の心 それど何かハへでそてうかみとあらん 盃 中君よ 薫の心うけまたす ろうさてしひとめよつりそうらみらるあ よろ御よハいそこの人うれしうろよ参らハ しと思ひてく三門かうハまもくくもつへ

さしもうかしとられハいく
けれしんやハ
細 若君をめでたきもの思ひ
くらく一般くらくひるさき
るかすれたる 異孟同
仰 白薫の君の中君の
おもひすれて心ふかき
とまらさるらむされハ
さくわ御修のすすそよ
くけるさとく
わが心ゆくしんやりしう
三 薫のみにかくさとと
こそやうの心やハうくハ
世中ニのとあうらのぞき
わかうく薫のおつかうた
ひとも
おもひつくしけるら
細 十二よるどハいつう
とをあくれまの御身よう
ししハ薫の思ひそれ
ねとく
をもべらさ君の 孟 あべき
やうしとみ もじくし 廿二ぐ

かし給そでぬれとしてうしろくさせまつる。
薫の君ニ云る其のこと
さうかりてしるれとおかしけすらむや。ハゆく 孟 小児の体ゝるく
しさせてあろくろうしそでうらやゝる
わうふ心くるてとし
抱給ひしりもてとまへおもひ田とてろうかなつ。
細 ゐらとれこと かくてしくし
りのうくこまかりしうつやまことしもせ
のをひそるれかくかりめたしやあらん。
細 大君く 孟 大君の服まうやうに我子と生れさうらひしとし
されとうふひるくなう給ふひとのよれ
つるのみてさ夜もそてりうんひとよすを
十三の仏事おりさんすハ先うのうしく
とゝめとさ給つてうかはそめむ思ひて。
代はもうてあらけるうれあさらよそし。
かとハ先のうぬっしそあやりまく かなき君
のれんかすめれうくめでしくわからかてし

つきとくおきの能たなりかえ薫のれんハもんくまさやうしもちうくうらもしるおも
待くうせ給も一般薫の方と待しうく
くめくさく 細 宇治のすまひにそめてそくく
あるしかとく
あくしきさま夜のれん
三 薫の後御を今上の
御婿に私わりてそれが
のハ思のうちの家しる
方てそおかのくめとそう
ちるらん〳〵としと思ふまで
薫の経こし
うくおさむさわざと
おもかとつくり思まへ
方を悔いとと思ふ
〳〵
おりつれも 孟 句ありつれハ
袖に匂ひし梅花あり

ねびまさりていとおかしくれたちまさりたまひ
わすらんへ心をうつのとり わさせうとま
かけるきもうひそ そうつりをあらし抱き袖
しはうさや侮のたちてらとさきそ分ともこそ
いかやもてりのし給じめとぞそ 孟 そもてそ代ゝて
げより薫君をとるを思ふうをとひあるよ
表るれハきりうら抱給るとこまりやうるよさ
細 二みへまかりまかれと
え給わしよ篤めれハつうやまして
よろくすまかさをくらしつ
二へ中のう 中君の女房の詞
く出給ぬ。あくしのひとのれ匂ひやかうりし

くやこくは常のごとく
くらひをも觀ニあへらかり
わかとらにくみとしかし
きこもあるのさらんあれ
ハたちへし
冬まで三条の家のかくえ
箋 秋四十さらとそ四季
よらつ王相らふ正月寅
より次の月ニまうく・

萩の花のえん　細 花鳥西
宮記といつて花西宮記
云天暦三年四月十二日於
弘徽殿前有萩花宴以
殿上御倚子立南廂有
毯代南廂東一二三間巻
簾ッ御妾下器
たの如し　細 右中左とこ
花鳥天暦三年右大臣
上﨟よりとかくされ
そこんたるへし夕霧の
ごとし

ばとりのみやつかよ、常るにからずの、へつめのり　細 萩壷
すぐまろうつくしろしきらき、人もあり、云々
すうべし、三条の家のやさしくもなかりぬへ
しとさこめくゝ、宮月つのさらしろせらへ　孟 四月の
んとらつつるゝかうごきさつさる、ちうし　孟 廿二丁
つらぬあもとその御萩つぎよう人もいうら給　廿二の夕霧花香今かゝり
給ひ萩の花のえんをさせ給ふるその日さ　そもそも天暦の例
しのそれあげてれいそもり、地月やけ　孟 廿二丁 細
わざうそあらのうへやれつきりゆるよ
ハあるぞ、上達部殿上人の饗あるとくうさ　細 夕霧
からうつつうち、またれの如く、按察のに　江俊之
大納言萩中納言左兵衛督みこし

あそびの大納言　師氏入道
人々や花鳥絵よ八若きおとしく
絵も此まりもしろしもくれまうる御こ息のたうらられたと、とうあせらと云み
ゐる人さらへしーもうれて紅梅や、紀　細 孟の説奥よちろうきて
萩中納言　細 好須の息の大臣の息出来給ふも同兄弟へ　師 廿三丁の内母の姪なれて
三の宮　細 白玄なり　師 白
ゑとき陸奥沖井之
萩の花のりうよ殿上人
の座八ありり
花 天暦三年南庭萩花
下ニ賜ニ近臣座ヲ　孟 同
こうらくでんのひんがし
よりその人くめして
花 天暦三軋廊東ニ設ニ
樂所座ヲ　孟 同於
羽不容し萩壷うその御
まそ隆深殿そを不お遠
さらく、吉本うえらうの東下
ひしとこうらでんと云誤記
きんの二丁三そこの段よ
りうとやしとりまて
既りのまつりせかふ
と夕霧の花次まふ此例
花鳥よあり、延喜の帝
勅子内親王　式部卿重明親王

のうぐひすのぬあらしひ給ふあるとの
庭の萩乃これのもしよ、殿上人の座をき
よりこうらでんの御んがしのよて吹の
のりさ、られゆくりそよ、そうして、師そうん
のれあそびよ、宮のれりくさよりれてしそふ
ゑあどいづさきせのへべ、此もとそぐめなり
て此まへよとりつくまりれ給ひ、右大臣の
まづしりきまそて入道宮をまもうを給ふ
んのふ二丁三めそふの段よつけりうを、此とぐ
とりますてそうし給、つきくよ、さんさくの

し弟の譜也九条右丞
相のうまごつぎりてあ
つかしと丞相の息女中宮
号安子とすりつゝくて村上
天皇へまゐりたまひし
うちとなり花多天暦三
ねん。
そふがせらるゝをたゞのうきう
選集按察の大納言の
うしよりさうにうてながれの
うぶりハえゆきとときき
なせらん人よいくそつ
さへてぞしと拍子の
事りのまひしするう
まそ流よ葉のまにさ
まくうゆへこふぞ世にて
みらるゝみかぎりとて
子孔
じんのゆきこゝろあらんの
よろこさ 花 天暦三年一
流香折安日牧紫檀盤
以玉器按録光武御肴

はこしびハわらんなるく。菩薩悦の拍子にもなり
つきうら箔八名の声よつくんしるゝつゝへのこと
みのもとすゝころ拍の声るらくとめでさせ給
それハこれおうりのさゝのしゝるき又八ツの
こくしさつめでのおゝむとと拍子して。
とくでまへあるかり。拍子らんこ上手琵琶。
とうくよおふるねの拍箔ハ名ふぞ世をよなささ
ねのうてりハ暁して給ひら最上人の甲まると。
三郡曲よえふるあ上人とさうはまつさこなうくぬどもいかし出つてのとお
りろうわきふ。文のれうさうらふとさこハまへり
給ちんのおしさ卍。そうらんのさうつき。わづれいし
らどのしうちゝさよ。おりえてめひとう。

秘曲有新譜大納銀鉄子一
かゞらのむしこのくらしさまおりえぞ 帥 友のむしとゝえ池のもとくおうえてこハそれもん
よ遊の秘をとめひとうて若き又縁あり 細 やうしぎハ盤のすみりうもく拍之 盃 銀揚巻也或楽巻盤之四方
まろうらのやうらさ
の勝なとのてさて 帥 一説 やりろうと朱巻といひ白本と揚巻と名づくるうち至徳記
まうり

みこえうて八 細 天盃
を毎夜よ上前すらはり
秘を銀盃の中にとし
しあんしとゝ大ねにゆ
つりまつり 天盃のるゝ
代舊の毎夜すりうすき
を縛しうらんくさうき
代まうれくこゝや業するゆ
つくゝおゝて
流の一きもいうくおうりん
流さんとこそくそとこと
のまひはゆる
花 騶天盃例 重明親王
具平親王流 宣騶賢天
盃をまひしろをまうし

ねのやうこき。みうの八こうつくさ亀なうじハこ 花 寛治堀河万寿後一条の天盃の例あり
んなうたまら。若楽給 ひげ黒の息く へまふひつろうろきま
つり給。はさうしまうへ 盃こすとゝへハおゝうすゞまとかゝえてす 夕 給よ。御らくまつまう 今上ノ御盃也
ではひんなうてくしこゝやさうのはまにゝ
るれざゞるら そろきうさんへさもおいそれハ。ちねまゆらうき 薫
おか 葉の秘秘あらし 一つれのまへどはまねにまいお 天気よき葉へいやまうたえ
こと給ひとたら゛
薫の がわりろんれさうづさはくハそ。そうしとはく
まるこはつうひりそあすさへ御の衣やけ
ことられど。ひとにふぞこふろも。なふさい

まうゐどしとのまつるまり花鳥よ云河海の流く皆今案之一[illegible]
きれらんをよく知りよせよおもしろきらんとぞ不知とせよ是知也と孔子の格言也
あれば言がりくきしとてく是古実之但永延二年三月[illegible]日小右記ニ云ク摂政六十
賀也尼大臣起座献御盃右大臣取御銚子奉上[illegible]御盃[illegible]摂政此間[illegible]
寿言或若万葉 手欲云く 摂政又有詠吟奏ニ云く 記録[illegible] 摂政下ニ庭中ニ[illegible]
あれはやそしうふこと称るまつるそのこころをそりやあつらん寿のくだとて
懸意小治 ろふの地ろうりよるしとのる細ありそん八[illegible]るどもつくるろう
人のめしとるのみことをあらわれしとそるらし今案三天盃をえらまふ[illegible]
さといましむるなる 哭 法が納言摂政[illegible]のは[illegible]のちりのまうろ是[illegible]
ぐげるひるとふしくとつふこ[illegible] 細 [illegible]
さうえし 細 盃の凝濁を
うりて天盃をと八標本を
ろく別盃をと移うえしと
之[illegible]天盃をと経時く
大盞をめして[illegible]さるつき
の酒をとうしつくのむこ
そのうし[illegible]をさし[illegible]と
いふくのことをくりて後の
さりしの路しろうくろり
て[illegible]まむかひて[illegible]
して[illegible]まくろうつ是
さうこまれの[illegible]
よろうのみこうら
盞をみてかや中[illegible]
よ[illegible]て[illegible]代の[illegible]世の[illegible]天盃を[illegible]
重明寛弘子具平 親王ふの天盃をまいるまり花鳥まうり

とぐみするしらんそふりやあわしきし[illegible]
つりて、わりくおうり[illegible]
ぐひすしらられみくちら[illegible]
くりまふじるよめでしきるり[illegible]
まして[illegible]としてりくくやされそてま
つりまへあ[illegible]
しらよ[illegible]

あぜちの大納言 細 祝之
とろうしとうく紅梅の
やうくうつくし右大臣と
りくんまらくりさされ
かく[illegible]や 盃 女二
まらとうけし人之 紅梅
の[illegible] 哭二六 作[illegible]
うし紅梅よ八[illegible]
もとも[illegible]紅梅[illegible]
此文の[illegible] 女御
細 [illegible]女御 [illegible]よ
[illegible]の大納言の[illegible]
[illegible]や 盃文[illegible]
臣の家よおかずして[illegible]
ろうべし

人で[illegible]
お[illegible]
し[illegible]
らつしくつふ[illegible]

まつる[illegible]
細盃二六紅梅[illegible]
あぜちの大納言[illegible]
さしいづるわざ[illegible]
やの[illegible]女房をぞ[illegible]
こくまつり[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
しよけ[illegible]
つまよされ[illegible]
[illegible]

いみじうの　おほきみの流
御屋のうすとりて
おりしまれ殿ちかき　おほ上
御殿ちかきをさく殿は坊く
とまむへるきよの女三へあよ
ひまふるとらひし　師説
よろしむ

まづさして寿くもそ
まづ　師　老らくまて
文集の古よりて傳紙
とさく経信カウハし天
暦三年の花宴みも
有三所事・立文書南庭
宸庭擬献詩　西宮記
花宴　天暦
又あり皆詩云しとあり
うたのすらも　おあ一と
はらし二のすらとある
いみじうのあり

いみじくのくせゞろくちゝさまでひとじ
づさし給へるまきあくじうしそのへんう
ちよおりしまれ殿ちかき程ゆてうへの
うちしけさらひくいゞそへいゑんやおよ
やとりそてはゞうるいかゞしつらじうそ
そらうぶやさしまいけりどしゞするよゆう
しられいぶうてそろのくちまでくく
ぶちお給ゐるまくさしてゐりともはる。
おんなのりとよいりつゞよくれいのかしき
いとのくらゐぶちるゝれく御のゞよ
おやしけるかゝめいくりるんとはりひやさし
はおみうらをもとらねりくしてさ

（注）孟　按宰家大納言之
（注）抄　按宰の心弟を云
（注）孟　宰之　師　今日の花
（注）細　よしうりの心へ

ちゝせうしろてはしらゝつきゝども　わいしなちり
うぐそらあれど志つしくろりとそひとり
ちゝろぞとひそうらしゝられはいたみの見え
ありてけうしおろしまうりまへ　ちう
またゝそあゞうしよあろとふちの紀と
よゐねえざよ袖うけくぶうらけつりしうぞ
みくらや
あり世とうけてまた　花ゑんれは人
ともあけねさてとそこれやうことゆれくの
君がためかれ子ゝぐしへむしうきさの雲り
とゝしぬるのゑしきく
よのつねの事ともみえてさ雲ゐのそとち

細　女二の宮の流さ
とのり　三　皇上の流さ
めかれたる御移り袖
をうけて弘れらぐし
あらとしくのうちへ
女三のまれたまし
なゞらきおか
細　殺掛りまくるとし
師　取紙の切あり
まろ何代を　細　師　製之
新葉万くなるへ給へ
をゑ今日をもあくらか
とく　孟　師　説　師　清書會
の君あすよ延喜の流あくへ
てゝをんまくけーられ万代
とうけてしかをる君あとを
の花前よ万葉の只あり
君うるの　細　久さくりの末ある

ころへし 哢 源氏作者ふしきなる人のゑらひや 孟
人看原國章挙イ 花の花散の内もひとへさくの雲かくのこそあやまりれやう
て薄雲のゝく
よめつるいのちとしとみへきて
めうハくわうのうすとおくるに仰より
うしろんひのこしくりや 仰
ととなり

孟 拾遺延喜御時藤つぼの御方のかうし 哢 光 延喜のまつりの御かとしもまたもやまくれやう 師 光源氏の君
孟 られハ和歌とみくらの御の心ハ雲の中そてらのかうとこ
作者の才つくしたるよりなくうせたとハかわくハせいてこ
のかりなる猶ろをやくれいられやこれのうしろき
大綱これなりけんとそこもれのうえハひ
づしとみもやありけん御ついよつしかるか
おうしさおしもすくのこぞあるうし。哢 夜
みちのよく此あそびいとおもしろし大将の
君れあるうしくてひゝのへおてこそすから
をすくめでさらのり接客とも男きくれまうし流
しるのうさりまれいつまもいふりのくさう
くらしあるのはまわり先の母やい殿の流七帥の ら

細 夕霧息
細 紅梅大臣
後ろまて男任
哢 薫

らハふくさうの女え悔くいてふらしうけ
せハれ七給つとはて、おかりそふくゝうし給よ
おゆつきちらくなりて男人々てゝおゐ給へるおゐ
八どもをかんしうらめいてもしるよいゝんよるの
ゑて殿よ人かくそのへくまいて女のれうるさ
よりまされくよまりそそのまかりなん家
まりぞさせなり給へなるさしけいてひこと
なりし人の女房さうふくしたるとらハつるま
つうるを給へり、ひさしのれ車みへくひさうしな
きいひけ三びらうけのとよのこつく里六かゝ
ざのひらうけ廿おしたう二、女房二十人目く
八志もとづろへ八人づゝてまかりぬよかくれうしむるへ

細 置御そへ
義 流衣をまうて
お 親王の御まへ八御禄あるへし
今上之
細 女三之
孟 女三
の姜ヘ流先之
孟 美濃守

そのまさりうんきよらなさまをせ
三 この夜あけての夜女三
かの三宮の宮へ源氏之君乃
へ女房のかける夜のさうさし
え女ならうさまうそれを
うら 孟 弘とものくとうふこ
とくれはさなうしとは
その夜若宮より同作せ
房えまへし
ひさしの御車みへく
孟 蔵 往上のうえ 女二宮
の御車ならへし御四
方へひさしをさけ、うる
車之
くすけ 孟 糸毛車之也

陸上ある所いへるはよし八条とさくらにありて車のくしくし上臈のこゝろをしき
こともつくりて 細車の轂の金物をとりて晄あざやかなる金の物にてからうるさし 盤同
きなりのびらうげ 盤 挟榔毛 所もけの車のたぐひにての女房の家なるべしここな
つかうまつるの中宿のぬくしおぼろげにてかつへの人のつかふるにやとかいふ

さやうにあてて
あ三十三の比遊女をとらうさ
まきらくうへよりてげさ紀
へくるなる

をもてみするの君しれかは
あ八十三ちょそてもみすん
まぎれぬなし

のいりて車十二、中宮の人〻のりせちくうんわ
つきゐたるにとものの上達部人〻六位な
ごうちふくだりありて、きよらつくしとてあせき
あきらかにてとやもくしろくしけて見る
つき絵の心とかくしけるにゆるしてさや
あてよきあやしかくこそつとこゝろにも
すくおほされば、くせの絹くちかかしうき
つきありとぞころこともしろし物はいと
まとありしこのまうれば、こそはあるめる
まぎくかりありく、物のこゝろしくゆかし

この世こそはかなくおぼゆれ、あかぬ事もなく
ひとけよくあつてこそはあやしくつかはり
かうちぎりの絹に、何のむらひとはあさら
で出たりけれ、きめしくもりひつて寺のつぞ
よろこぶてるとしいれまうるものゝはうのぼす
さはらしきなどうして、其よ目のあはしにむ
のうきへゆかしくうらくしくを絹ともし
あそてしるべくとくをとまでの絹かさし
てさくきりのくらまのりて、そのもの絵
んぐなる絹あそれなれば、なるくさ絵をにゆかし
なりよ女車のことくあつきさ絵よへはね
ひかり何あしまうしき、あつまゆくこのこしに

やうけようありてこそ
あ給ありうりて三明六通
をあそ我身の前生を
しらるの宿縁とあり
らぬぞらう

とまるのくらまる 細常に
身の事よしとあ 盤 身の為
へかるの所あく見待り
まふるをさえすてのこ
と

あつまやとのうしに物之人
また 浮舟の作之意候も

う御の君みて来とい
まへ屁様を負つる
もさ

このまとりしてらくえなり
盛御伎の衣をとりしとうり
なるま此車のうちへいれても
これの海舟なり

おいや　細　此納言なりけり
よ男の衣脱へし　孟か
いへかくしといふ羽じさう
こすあひりといふかし　幾叢
の海舟ださし　ふひ今すがりし

地けるあまたさぐりて。ちりも人々ぶつかりぬ
のりげわらへしてそてちりしよりのまる
さりくらさ色。御車びくら抱くれとみ給つ。
薫之
殿へまづつり給そ。御前ども立じへすさたち
さりぎさら狩よ。此車とこの衣をとう
らるたりくりしさ色。御海舟どもをりくと
とも半
いふとせつしまそて。おはん人へざしとりせまへこ
薫のし　常陸前司
たらしゆぐくふらりの。ひくらのどんじ殿の
おきらうらうるすと
姫君のもちをれ此手よまりてくろりまる
たらぢしめをこうてよるんやどうまへりし
とりよ。おいやらてしん人すくらてゆかり
出らく。んてとへいしうらよくしのそし。
薫之　孟前阿弥陀て
薫の此の
細
人ありいそせうふ御し
此車いれよ。うてよゆうさひくやどりるへと。小わた。
よへ人のありしとく
うくよるんといそせ給。此ともの人もされ
薫の御伎之
うりさぬとくうさ。ゆくくしうくしらぬそ
くさどもるれど。おす紙げそひやえるうる人。
薫の母ふと志のまでたとし
どくつげよやくゆるむもよいもひさ
さげるの。しくりこまりつてぞくとう車へ
涼舟筆之
細
紀遊
いれてくらくのよしのつまりよぞしすらこ乃
るれどこし
えん殿へゆきさおしつよてもどれをとりけどて。
ゆうしこあさつ中の二まうしそてへでそれ
孟
薫の乃ぞきすらし
おうこじのあるようのぞこさ給れぞのるれ
鳴
ぢぬきとらそ。るみもしさしぬきのうえゆ
衣装の帝みも指示の衣みもぬきさ給く
くさ舟の車うりありずもしく
つきをさそてぞおりもろ。ともみもありく。

とくみむまくもひくさけ
ふのじ　あるとり避慧之
おをさるこうと

此まりあれて　細　とのうさ
ねくめきまえる御へし
おの衣の鳴れがし衣の
とくるの2よりし
とくふもありで
おりまりうんをされそと

そひて浮舟の車に今よ
ゐりぬるも

ゆめその心ちすらし
此車を浮舟ぞと薫の
推してのぞきてごん／＼さ
めよ此人は薫のかくれてし
はからせ給ひし弁のあ
まひかゝる

此女人どものさ海　細となと
まよひへ京あれと
分さ多く師となよ
つれらるあづま男らら
そめやうかしとまり
此草といゞれてしる
るへし　三此あとハ浮
舟のつれる独ともを前
猶よ比しておく

あま君はをそくしてかくやんごとなきげ（弁尼之）（孟浮舟より見へ）
なる人のけはひもなうきかれぞなどあるらう
なるべし。君は車をよそれしきてまゐる。（薫之）
ゆめそれひとりまろありとの給ふも川
くらきにめさせまてせんざいさへさんえて（弁みづから薫の御ことをいふなるべし）
やおりさせ給ふまへまうきとはりのしあへ。
どことをりまさるんとのさせらりやうまん（浮舟の供の女房之）
あ浮ずかりてむきゞれおもくありけ常ど（車の簾之）（孟薫のこと）
りのさ海よりはこの坊りしられくめやもし。
又ゆしるびらん、いまひとらかりてなやう（浮舟の乳母りやおもともの、よそひも）
らふにおやもくわしはうるくちてもそれ
といふてきのりるれどいとあてやりよ雪ま。（孟老が浮舟也）

例の法し御心かきりの法師

例のはしにとうるさはさ犯しくさもおろしこ
てまし　さらしとはかんてまる　とのまなあれ
まるるのおやるくおらはかれども
はちゆるもこそもれけいとおそくしりて

（左頁頭注）
例の法しりつりの法師
つまし　さりしてかんて
まる見のおやもくおら
ばうゝうこそせれしい
かまつけてこ
いづくのあはれなるべきぞと
ふをやりて　おおちつて
人の見るともふて／＼人
ながしとむりきひなうし
てらくいふとふとやりてと
いふこ
つましげにゆるし
お浮舟は殿人かへるべき
と用意のあるこ　細
車ハ女らく　女車之
車の前板よりうら板
もふ物とこゝそ坊りて
こしく家より八代用意
するし　孟女の車に
おりのりよハ前板とい
物をやて車のお板と縁
とよそを物之此車よハ
うら板ろまうや　花

例のはしにとうるさはさ犯しくさもおろしこ
めそのこそへ裕めれさそハ又いづくれわ（浮舟代の御之）
らハあるべきぞしにとやりていふつま
しげにゆるしとれハまらしうくさや（薫の見さ給之）
うらひかきやうまおてなう程ハいとよう（孟浮舟の数をとてて車より坊る之）
此むそられなべし。おみざとつくさしう（細大夫よ仲より）
うしられば程へとしぬ程こころりくそく
てじめらうづきつてるん給。東ハくめるく。
坊る雨ハらぐりさると。此人くハやまあるら
うまおかりすつれど。いとくるしげによ（浮舟の乳母之）
るんそひさしくおりてみさりいう。こ／＼き（孟良見へ）
しうさよ。うすぞくしぬすぎろそてなが。わ（浮舟の衣裳也）（発紅之）

まりろへいうろ　花ぐもそ声
のまつしかうろ色之夜
の表れこ之　源　若苗書之
又ワカへでのまうしうろ江
そるとありけるかれ　ワカ
冠木

つの川の舟わうら　ほ　本注
川をいふ　日本紀云ハ桃河
しあり。又しつく又音日通
也崇神天皇発兵此川
と中ゐして挑戦あり
船なり。造舟　文選巻二
あるまらどと云へハ
細東西の名を云へハ東
の名なとしやそそと
也

みらりして
牛車よりきえたり
つる二人のでうらと

かうへいうろのこゝろさしより四尺の屏風
盃台の乃えき。まよ子之。折　四尺の屏風なれハ人をもよう屏風の尺あらへ
どころのさうじよそへてしそうがかみより
とゝろあるれハのこゝろべくもあくごころさ
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　浮舟のひ衣之
どハしろかさげよとひくおもさざ海り
ひゝきぞぞひかしぬかさもこうるぐし
　　　　　　　　　細人くのひゝし
げよかりしまりつうれいつく河の舟よ
ほとぞまくくるよ気よいてし出そろつてそ
　　　　　　　二月あり節よおうてそうへし
ありつれこの二月にハあゝのもくかろりし
くバまるゝしかうそうゆそやあゝさハおの
まらどと出りへバいでくおそそろしうむるぞ
みゝりしてらしとも出ひさしれいひるゝさ
　　　　　　　　　　くさ舟之主之
るよおそへもしもせでひまかろうい

のゝいのあとくりいへくも
尽しもて
細ひさらのせんげぐむ
さらうあしくいかべくハ
あしくへ　浮舟のき
海女外の女なとげべ
くもあしとて

出かくへまことよ
舟二ヶ茲めよ車より
よう出とうへいうろとあり
し人あるへし
三　ここにまいとうしきろのと
　　テ若とてしむへし　お
めとさくさてもる乃花帯
源氏の衣をとあゑ
せし薫物をとりまへ
あくかるらしとて

すとさうしいぞいらうがすかろらうよかうしげ
宮かくもびくら殿るとしいかべくもみてぞ
　　　　　　　　　　　　　　　　薫の之
またしよおそするやうくうしいてさゝま
でくちもくみなへど人のけしきひそしと
　　　　　　　　　　代の女の詞之
てすとしぞうぞゝ給よけうさ人あるう
　　　　　　　　　　　　　　　　薫の君へ御返し
ぐしやひうそしさうのうこそしそれおまこ
のさき給まやあらんとあどころく出ひへ
　　　　　　　　　　　香
まてとよあるめぞしての袍のやゝ京人へそる
とのしてそやびうよい海めりしつれ天
　薫乃君合せしうき物のうゑ
ドよつうしきてうゆくと出わしくうしどあ
つまそへく階さりのくゝへえありせ出
あかざりきりしこの尼君のもとまゐへうく

いとさむげにそあまた
抄 薫のしろきをまた私
うり

かうして
まどのあさきへ人と老び
としし

くはしくて見えきき
あへし 抄 かうしくなれ
ば薫の主の心さしかへどみ
ゆかしくなりてのぞく

いとそうよ物はおぼれどさうぞくのあしくま
孟 弁尼ヶ歎息
わびしがべきわざかなとていとさう
しぞあはやるなどかあみしりおもふみの心
のこなりもしへはそてはゆるみどもすつきせ
給へしそ抄しきどものつりつゞきてさしい
わらさりのとりにせろきしてまりのけ給ふ
抄ぶ為ともをまくれと浮舟をかこつこと
わこれなしれ、こ世とかくろくまべうすり
孟 くるひれて宿まて 細 抄頭ち
しそくりるとやさのわかやかろくと心
栗之
とききしくぬくちまへぬさつくりへそくて志
孟
薫之
ぞくさのみへど又ゆりしくらりつくるとしすら
ありくしう給ふられなりまさるさうの人
まことに
とくきさいのまえとちじめてしてうしこ

みだりがはしくでいかも心も
三 がくのなりそて薫
のくしも物ありがしと
師たへところがんでふかくん
をとめすみつすあると
しや

あまざこいみのく 抄 薫
の詞りこへ浪まとそこゆこ
れどさうふるよふくのそき
まめやきかて見てこ浪覧
あつへしくさと

うちつけにみえていらへどもなくらあ
くもでさあしまへれどの浪ころけなみ
らぞはめどとふあとどましにれあまりへよ
みしくうくまでしのりあふ流んらよ、ふて
つまはなりよりもくれてさかりをと
るさへなれどうくさちさりがてくあふ
弁之
じらよゆうしさもいとあやしさんぞり
あまきいとれ歳の薫之いくるよも浪あうそこ
ふりしいでしくりくれどもふゆるやさ
薫の
しとて今の月とくらやもとありせあてるかり
とはとものくういへふひてにひらくり
孟 弁尼の心く 抄 かきみを薫の目くぬ
くいん浪てのこと
されどこの心もとしげてゝまにけるおり

ここくの人あげりどよあ
紛 薫の剱術しまふ本乃
あづくりし
あつまの人ともみもくりせ
孟 薫の流儀あつそし方く
の流派のあつかりま
いらせし物をあつかひ物
どもみもくそんもろく
ああつろさうくそく
細 前よ代あつま人の和
そくうへてしくへ 孟弁乃
尾の薫しろそねあり
いるゝ人のあめくろす
くそまえてしより 作よ
びいろあをどいろと云ど
きうしみぞあろをと
いへしるし

の法ひしりばいろつるじよりのいひかまん
と此わとよりて日とこし法りやと云
てくのぞき法らんとは志く流儀のさき
うのあげらりどものまられるさらごやる
しやとこるそこみもいれうとおげまん
じもおもくそせるどこしにもとこけひ
とをまてしらげさうして海らうよのりき
よきうりわあつるこさぞくげくよいとくぞ
らうふくこゝあるをたかうしくしくさよ
げりぞあかきのはおかりつきるんとあら
ききとをせしとるくろうみを日さけて
はしいよめれバ此老人いとわやしくらか



もこうり 孟 年称之名し
くし紛 並細をとるまし
しくぶらしもろそそくい
みたえい
わまえをとそうらひく
細弁をとそづうそし薫
の乃でさまふ方へむき
まうあり

これもうきよつけてお
られし 紛流 母叔よ大
老の物ぐしそひ物らうそ
あそうれと 其事れ
ゆし

しげれのくをみせあつれバきさのあからのひ
河のまこらはとまりてげさもじこま流
らろしあらひくろじいへておこたばい
まずでゆさおくろあまえをちらひて
そびくしさうくこうくめこれあうかいとよ
くこれ曲まくとよいとよりあつまるんの事だ
うんざしのまこうろれよとくろくつく
もしをみまかざりし流りわるれどこれど
さろまつろそふくそれとおひ物がろくよ
御の流儀らねあまえ流ハいくらうそうこ
志けりひろ弁のへみるれど薫のけいさみと
いくらくみてれとこころ曲表まうりろ人

うれたる日かしつくんさい
の　おもしろくてぞうちつ
その人あらりともゆかりな
らんとうろかなしき
とがえ兄君なれども
まことに

あられさすつくうつるれを
孟 八宮の方へねと作ら
れたりしとかれども御子と
ハえてしるとき 薫のうへ
せの中におかし
細 大君よくしく何されえ
世よおかしかるとも
たいつる疲ともし 作日本紀
紀日天稚彦とそ云 味
耜高彦根神喪を
弔ひよ天へのぼりし人
ハ此神の形天稚彦によく似
たりかれば天稚彦ノ親屬
妻子皆謂吾君猶在則

くるしかりけりのさいまてとかくもし
らぞおもしろくよくされなりくちおもしろ
らんさへの方るなしらんゆかりもそれぞれよは
ぞかりてひとつしてしらん人をしては
わろきえ物りふまし紀んちすらにありし
てられはつれさてまつりぞれども海
とくるよ敵らめの御子よてそいおりたれとこそ
し給てハかなきりつおもなれよならし
物わし給らく今をもひかりて世中よ物えん
しなりけのをとしびすぐさあめれ。おく 玄宗の御
貴妃とちぬしまサ長恨哥よあり
らむすぐらてかんさしのかぎりとつてへ 玄宗ハ形ノ人のかうえかをしくハ私の御句なり
こゝのけん みなしハなし代いとしみふさうらんへ

薫 衣帯且喜且慟
ころ此調子そりはるや
これしとんをれどもすぐ
さあ不 おかくえバうらえ
し玄宗の御代ハ皆来る
るべし見えも別人なれど
兄君そしよく似されば
すさまおりとし
人のよかめつけかり
おかつ、八ハ宮も紀を
宮の君をうなとそ
うすに
御をおとらきのひて
お薫のおよねうきにわし
きぬの子なおどき給
たし

ハこし人すれどもすぐさめ所ありぬべき 浮舟ハ中の君の大君によく似られたるし
おかしと物かゆかりハ此人よちかきりれおかし
そうよやあらん尼君ハ物がたりすうてし
てをくいりぬ人のとうめかぞうじとら 細 弁ノ尼ハ之のくさき語らし物語ハり
くそのぞき給すめちしらうろえてぞれ
ぞいらせけましくうつらなりわか物べ
し日もくれけてゆけハ薫もやをし出そし給 薫
ぞなどこ給てぞ出いめし物ありらうしく いつも弁を召出す所ハ陰子日之
らよおもぞ薫めし出すてありさ御あそびこ 御 浮舟のさ絵と尼よ薫方
昆給 細 薫の詞
ひ給おりそうとうもしくおかくぞうさあひ
ようとつうまぞうのかしつとてのまへ 弁よ浮舟のうをひきうまりなまあり
細 弁が詞
志う物わ世事何し後ハさるべきつゐでくらう

こそわすれそ　お玄弁
ゑほうのでさくてらし
し

又この月こもまくぞく
御形へ浮舟のまうで給
ひそし

べとまうち給しよとぞ八とせぞそ比二月よ
なん。そ河をまうでのうちまこいめて
て給し。うのえく君よ此かりめしうち夜は
わのめりし給しうハ。[illegible]
じけなうこれよりそへよこそへ給うるれよなん
給しうじ。そのころかひへのどやうふとした
りしまでぞとらけ給りし。おりがんな
くゆりひめへつくえそなん。[illegible]
えさせ給しさるしどゑ。又この月よまうで
でいまふうりまへるまかり。めうそんの中や
しりまいが。むうびらくそも。[illegible]
けりひとらうしゆんへよなん給めり。

うへかへしまやすとそしなる
まうハ　御浮舟の母え
つまてひで薫のひまれ
ちうしまいともしさ
ぬとうるうお薫のおハ
しますをもえうせ
ねとし

ひとり物しおふらんこそ
めつく　三ケ所の浮は
ふし弁よのみふ之浮舟
ぐうりあれバ都で白[illegible]
しるろう

うかくりの　細薫の合うく
ちく古人薫をわほれ

この母君はさるか。しまくそ。このうびハひ
里物し給われバ。くおえしまをてなな
ようハ物し給へんとこする。おまびるか
人ぐもよ。まひやつれさるあうきこえし
とてらぐさめつれどうであくんげすど
をいうれあらどうし。こそいうでまべきひて
里物し給ひんこそおくこうやもろうな
れぐくおりつくてなんまうきあひそう
とつくへ給へりしこのまへぶちつけよいつの
おどやりぬちまうりよくつてこうもうくひ
てまくいはちりつくへ給ひんとそてゐるよ
薫
うわがるのこゝろもえうしよう[illegible]やどと志

げにとまきくゑふそしろかね、くはそ
さくのなかよの路と、つりてゐさく 於弁尾深再愚まりうつりく
えたり

さるによりて何かるを
いかにいわりくしくし
孟武子のんとへうけるの
らく大意より何かる経
まこ意を何かるか曽
いきたよくし師の教
えらくしきき書なり
深山よりわりとえて於同
河外されいのへまるくるらかとり乃ゆまえるてきられるくり 金丸
引きとりのまゝくもとすく夏の時より華ねのさけきさ無きすり 百家